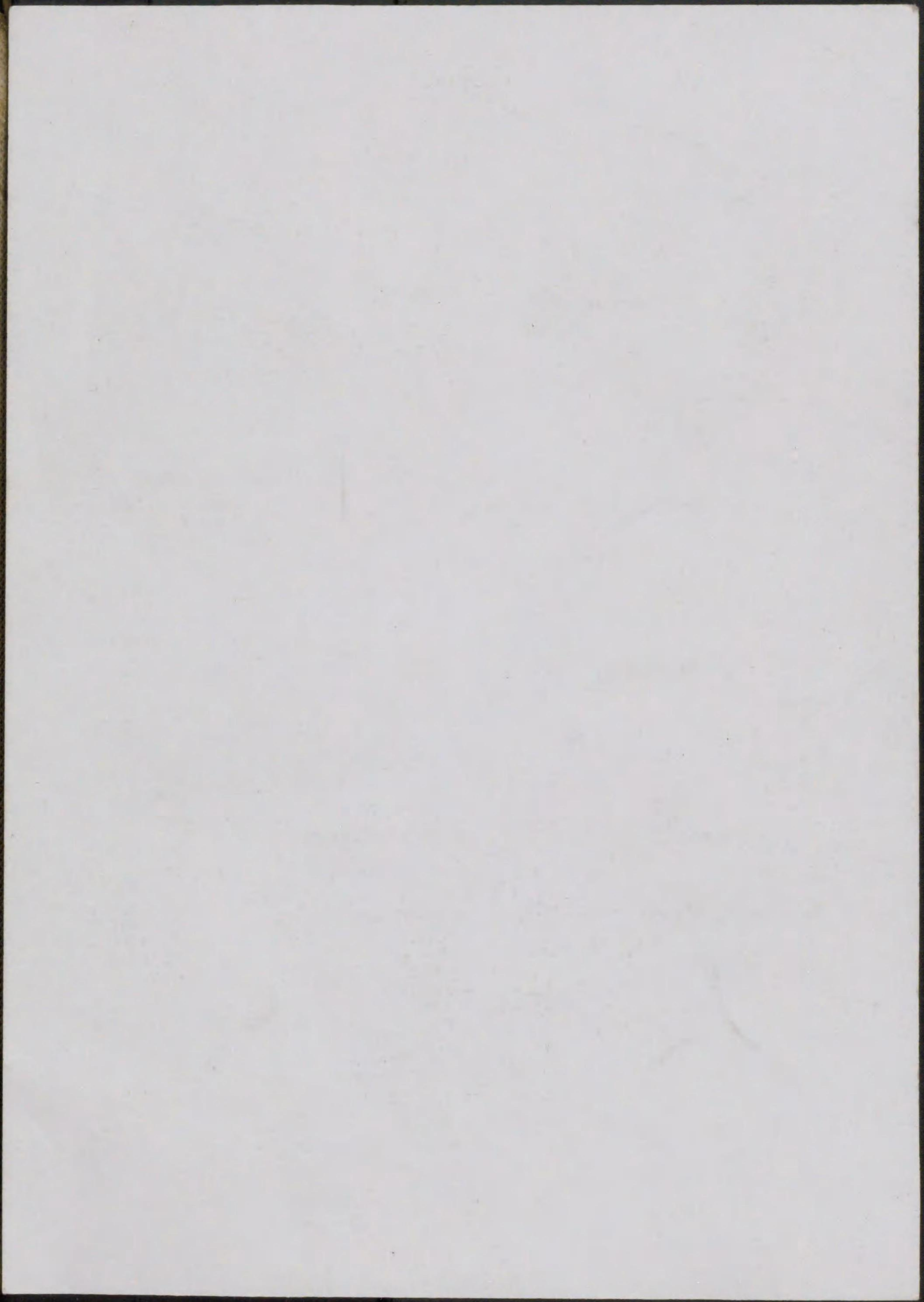


595  
I

595-324  
  
1200501527514



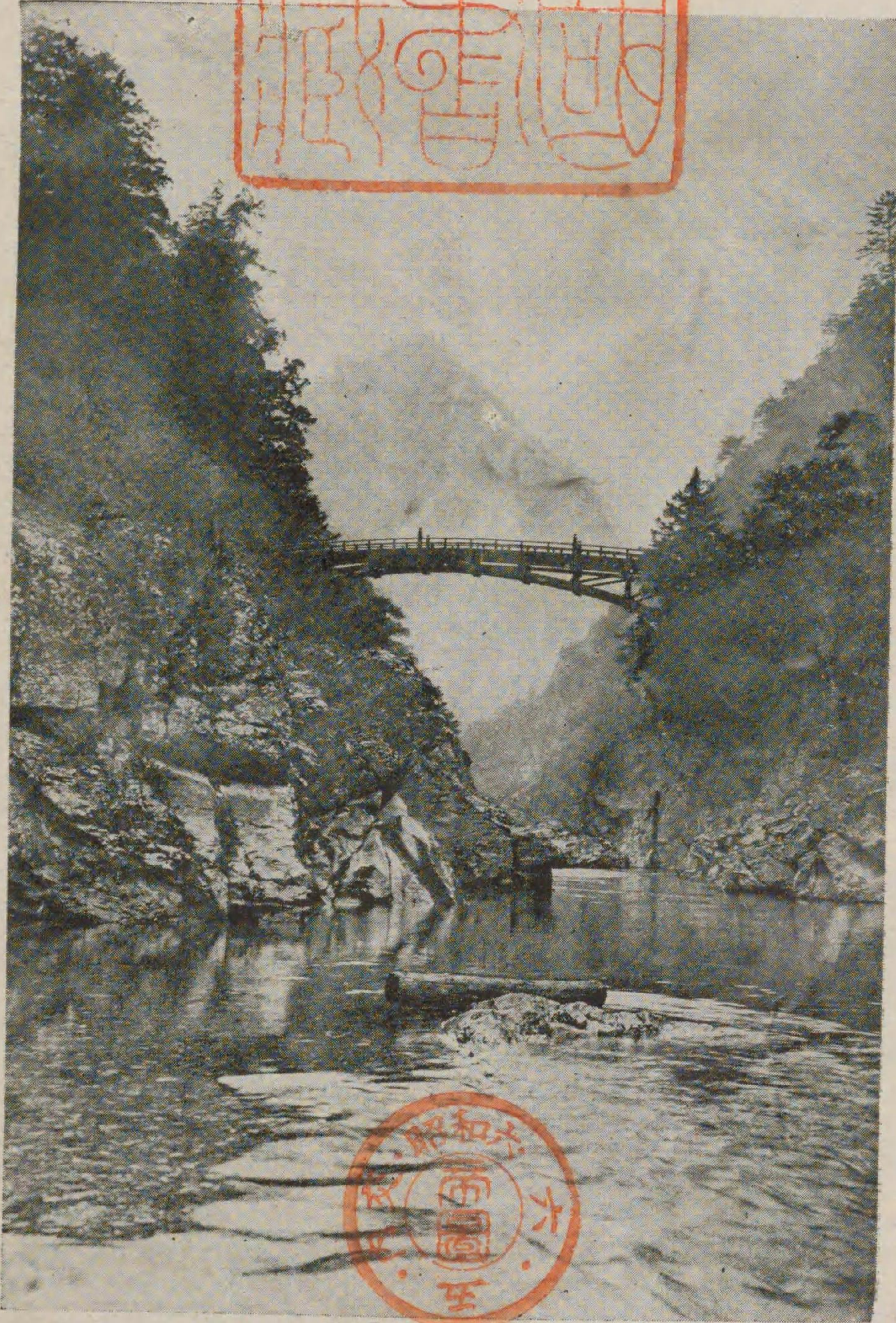


515



山と峽と谷

大泉黒石著





595-324

## 溪谷の大観

天龍峽。木曾川峽谷。御嶽昇仙峽。瀨八丁。長門峽。寒霞溪。祖谷溪。(祖谷溪谷は徳島縣美馬郡の山奥にある。徳島縣阿波池田驛から東方八里十町。吉野川の一支流で祖谷山に源を發する松尾川の溪間。水流を夾む兩岸絶壁をなして奇景百出する。その絶壁と絶壁とのあいだに架け渡した蔓橋こそは古來甚だ有名である。橋數八つ。善徳橋はなかでも著名である。日本危橋の一と稱せられたものであつたが、今日は木橋が出来たために昔の姿はないといふ。この溪谷の祖谷村の人々は平氏の末裔といはれ、風俗も昔のままであるさうだ。)それから大歩危。小歩危。耶馬溪の如きは昔から有名である。それから保津川の峽谷また然りだ。近年に至つて富山の黒部峽谷。埼玉の長瀨。岐阜の惠那峽。廣島の三段峽。岩手の猊鼻溪が世にあらはれた。それから長野の裾花峽。(裾花峽は善光寺で有名な長野市から一里。茂菅棧道から裾花川の清流に沿ふて二里にわたる大きな峽谷だ。激流と闘ふ奇岩怪石千態萬狀。筆紙の畫きつくすところでない。その奇勝のなか



でも観音岩、迎仙峰、五蛇淵、樋淵、品の字岩、善鬼岩、五良瀧、不動瀧などはまことに壯觀である。近くには湯の瀬温泉などがあり、史蹟も少くない。それから宮崎の高千穂峽。廣島の帝釋峽。長野の上高地溪谷。東京の奥多摩溪谷。北海道の層雲峽。愛媛の面河溪おもがたなどが、或は日本八景のうち、或は日本百景のうちに東京日日新聞によつて選定されたのは、一昨年のことであつて、夙に紹介さるべき筈のものでありながら、殆んど紹介されずにゐた溪谷のなかには、朽木の鬼怒川溪谷と大谷溪とがあり、その沿岸の温泉のみ廣く知られてゐる箒川溪谷があり、群馬には吾妻溪谷。岩手には巖美溪。當樂溪。十和田湖には奥入瀬溪谷。飛騨の魔境双六谷まがら。三重縣の馬野溪まのと魚跳溪。和歌山縣の古座川溪谷などがある。その他に數へ上げたら内地だけでも、まだまだ澤山あるに違ひないと思ふのである。けれど、これらの峽谷と溪谷とは、それぞれの背景をなすところの遠山近岳のたたずまるや、峽溪を挟む兩岸の森林の性質や、兩岸と水との關係によつて、その風致に千差萬別を呈してゐることは言ふまでもないであらう。則ち峽谷と溪谷のなかにも幾多の種類があつて、それ独自の美觀を示してゐるのであるが、風景の特質を地質によつて區別することは困難でない。それは例へば火山岩の峽谷とか、花崗岩の溪谷とか、水成岩の谿谷といふやうな分類の仕方であつて、この分類に従へば、峽溪の特徴は大體に於てわかるのである。火山岩の例としては

耶馬溪が有名だ。この溪谷は兩岸の集塊岩が水のために浸蝕されて奇峰を形成してゐるのみならず流下する水の有様にまで火山岩溪谷の特色があらはれてゐる。瀬戸内海の寒霞溪。鹽原の箒川溪谷。十和田湖の奥入瀬溪谷。これを蔽ひ包むに東北らしい強葉潤葉樹の密林があるから紅葉する季節の眺めは別して立派だ。花崗岩に屬する峽溪は殊に神斧鬼鑿を以てつくられたやうな奇岩怪石に富んでゐる。朝鮮の金剛山はその代表的なものであつて、日本の金剛山と稱せられる甲州の御嶽昇仙峽などは、概ね柱狀の節理に従つて花崗岩が水に浸蝕されてゐるために柱のやうな危巖峭立し、溪底たにそこに崩落したものは、そこでまた水の作用をうけるから愈々奇妙な形狀を呈し、累々として亂臥するのである。備中の豪溪もやはり此の組に入る。北アルプス關門の黒部峽谷もこの仲間だ。これは峽谷の年齢からいふと壯年期に屬する好箇の峽であつて、峭壁の高峻急刻なること峽山の頂上から峽底の流水を俯瞰し得ないほどである。陸中三峽の一つである當樂溪あたら（岩手縣仙人驛から二里餘）。飛驒の双六谷なども、これに屬して非常に幽遠神秘な特徴を呈してゐる。これに反して優佳な風趣と森深たる奥ぶかさを有つてゐるのは水成岩溪谷の部類に入る紀州の瀨八丁。秩父赤壁。奥多摩溪谷。山城の保津川。吉野川上流の大歩危小歩危。廣島縣の帝釋峽。岩手縣の貌鼻溪などである。帝釋峽は數年前に内務省の景勝指定地にされた。帝釋天の鎮座せる帝



釋寺附近を起點として下ること三四里の、白い岩壁に夾まれた幽邃な峽谷である。清冽な水に姿を映す奇峰。急湍。碧淵。丸木橋。吊橋。巖窟。夏は河鹿が鳴く。鮎が跳る。山椒魚も棲んでゐる。秋は全谷の樹が紅葉し枝から枝をわたる猿の影も見える。冬の雪景もめざましいものである。帝釋峽を探るには山陽線福山から乗合自動車で長驅するか、もしくは岡山から木野山線に乗り、高梁驛で下車し、そこから乗合自動車で成羽川の左岸を走るかである。いづれも四時間はたつぷりかゝるから、あまり便利な場所とはいへないであらう。山陽本線福山驛から約十里。油本町まで自動車。同地點から一里餘り徒歩。或は山陽本線廣島驛から藝備鐵道に入り備後庄原驛より五里。自動車の便がある。また紀州の南端に近い古座町に口をあけて海へ注ぐとにろの古座川は地質第三紀層から出來てゐる山地を判り貫いて深い峽流をつくりながら山間を迂曲するので舟遊には好適の場所とされてゐる。總じて紀伊山系の間に横たはる河川は、十津川でも日高川でも北山川でも、この古座川でも、左右に甚だしく蛇行しながら深峽幽溪をつくつてゐるのが特徴だ。その古座川の北東に瀧で名高い那智山が控へてをり、更にその北東に木津川北山川との合流より成る熊野川がある。木津と北山の二流域は大和南部の紀伊山系を横切つて、例の甚しい蛇行をしてゐるために自ら山間迂曲の深い幽峽が穿たれてゐるのだ。瀧八丁の深潭は斯くて生じた。水成岩溪谷の

なかには岩層を有つ特徴に従つて階段のやうな形状を示すものがある。秩父赤壁の稱ある埼玉の長瀨などはその一例であらう。而もかやうな古成層の地質は、樹木の繁茂に都合がいゝから溪谷の周圍には大森林が成生する。従つて水が豊富だといふことになつて、溪谷の趣は一層幽邃を加へるのである。奥多摩上流がさうだ。則ち深潭と激流とが付物となるやうなわけである。同じく水成岩の溪谷に屬するもので、石灰岩の岩橋や洞窟や洞門を有つてゐるのは廣島縣の帝釋峽である。貌鼻溪も石灰岩だ。これは岩手縣一ノ關から大船渡線に乗りかへて三つ目の驛から約一里。北上川流域の高地に穿たれたもので、蛇行迂曲すること半里ばかりの深溪である。兩岸の石灰岩が雨水に洗ひ流されて線狀に刻彫され蟲々たる峭壁となつて鋭く鋒立してゐる。その岩壁に湧出する水のために、石灰質が沈積して貌の鼻のやうな恰好をしてゐるから、貌鼻といふ名稱がついてゐる。同じく一ノ關驛から西方二里餘。磐井川いんがわの流域にある嚴美溪がみびは安山岩溪谷だ。栗駒火山の基底熔岩たる玻璃質の安山岩で、溪中には激湍あり急流あり瀑布があるけれども雄大の景とは言ひかねる。また伊豫の松山市から、或は柚川村を経て、或は久萬町を経て八里餘り入つて行く地點にあつて岩石、水、樹木共に豊かな面河溪なども此の安山岩溪谷である。峽谷や溪谷の作られる原因は色々だが、或る土地が漸次に隆起して、既に存在してゐる河域、則ち先行性の川がその河床

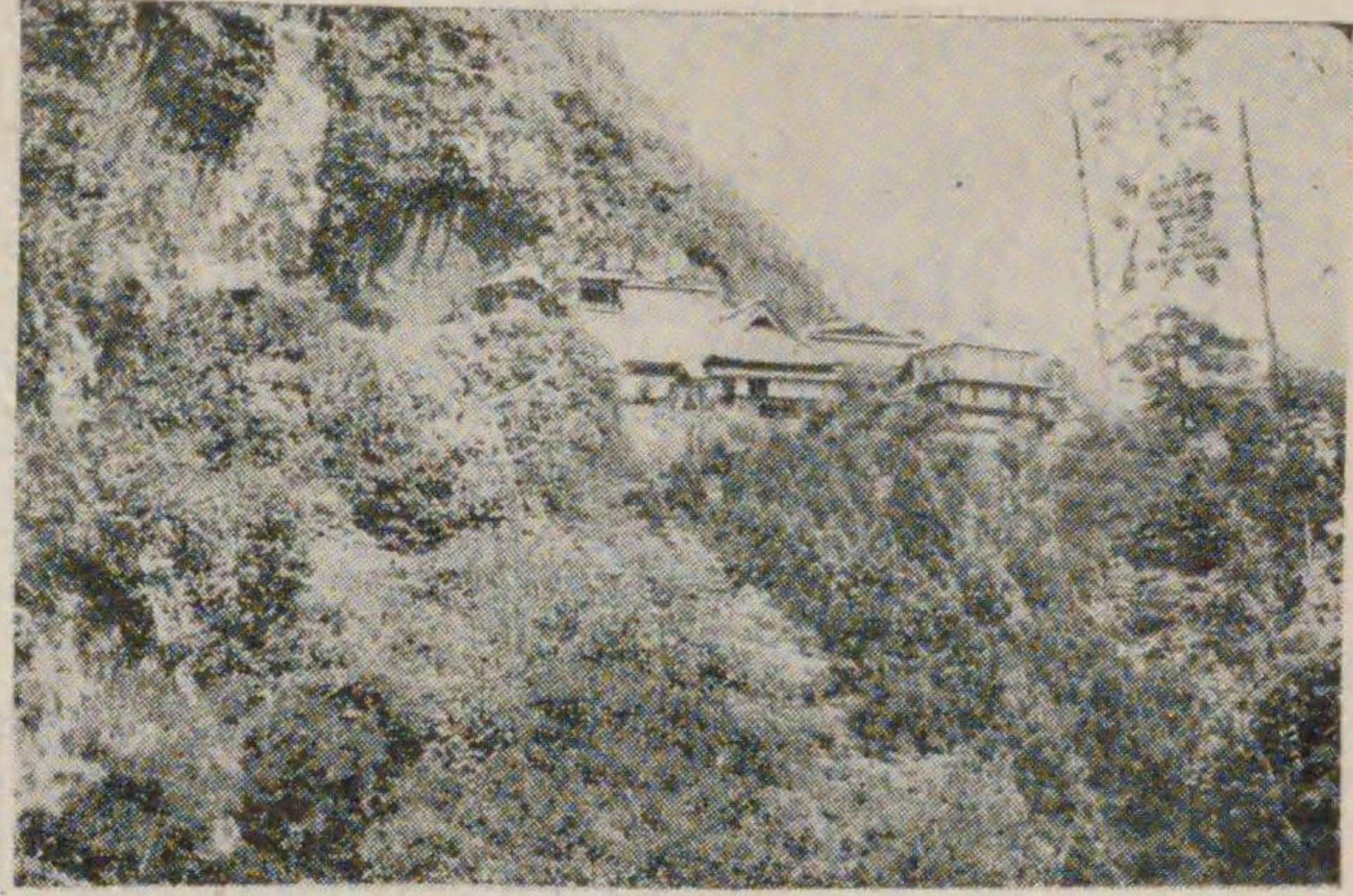


六  
の位置を保つために浸蝕を始めた結果として、傾斜の方向を逆行する川を生ずる場合に、ゆるやかな隆起が永くつゞくと、谷の兩岸が恐ろしく高まつて遂に峡谷を形成することがある。天龍峽は天龍川の中にこれが起つたものであり、惠那峽は木曾川の中にこの隆起作用が起つた結果である。惠那峽は花崗岩峡谷だ。この峡谷を生んだ木曾川大峡谷は、黒部や長瀨と同じ壯年期にあるので、その特色として峽壁が非常に高く且つ急峻であり、水の浸蝕や風化作用によつて作られる磊砢たる岩峭が峽底に轉落し、風化作用は更に烈しく行はれて、峽壁の岩石は益々鋭く削られる。かくて景色は驚嘆に値するほどの不可思議さを現して來るのだが、河床の勾配は急なるまゝに水の勢ひ激しく、大小の岩塊を押し流しながら、その岩塊を鑿の代りに用ひて、河底や崖の横腹を削りぬき削り取る。そこで彼方此方に深い淵潭が出來る理窟である。寢覺ノ床もさうして作られたのだ。V字谷を形成してゐる保津川の急流は、龜岡盆地から嵐山附近に至るまで、大體古生層のなかでも質の堅い角岩や粘板岩であつて、彼方此方に河底を横切つて水の流れを阻止するため、河流は早瀬をなし、深淵をつくり、傾斜の急な岸壁に應じて、この山地に幼年期の溪谷特有の風景を見せてゐる。同じくV字谷を形成してゐる奥多摩溪谷は主として秩父古生層の砂岩や粘板岩や石灰岩の山地を切り貫いたもので、その流域の日原鍾乳洞などは、その古生層中の厚大な

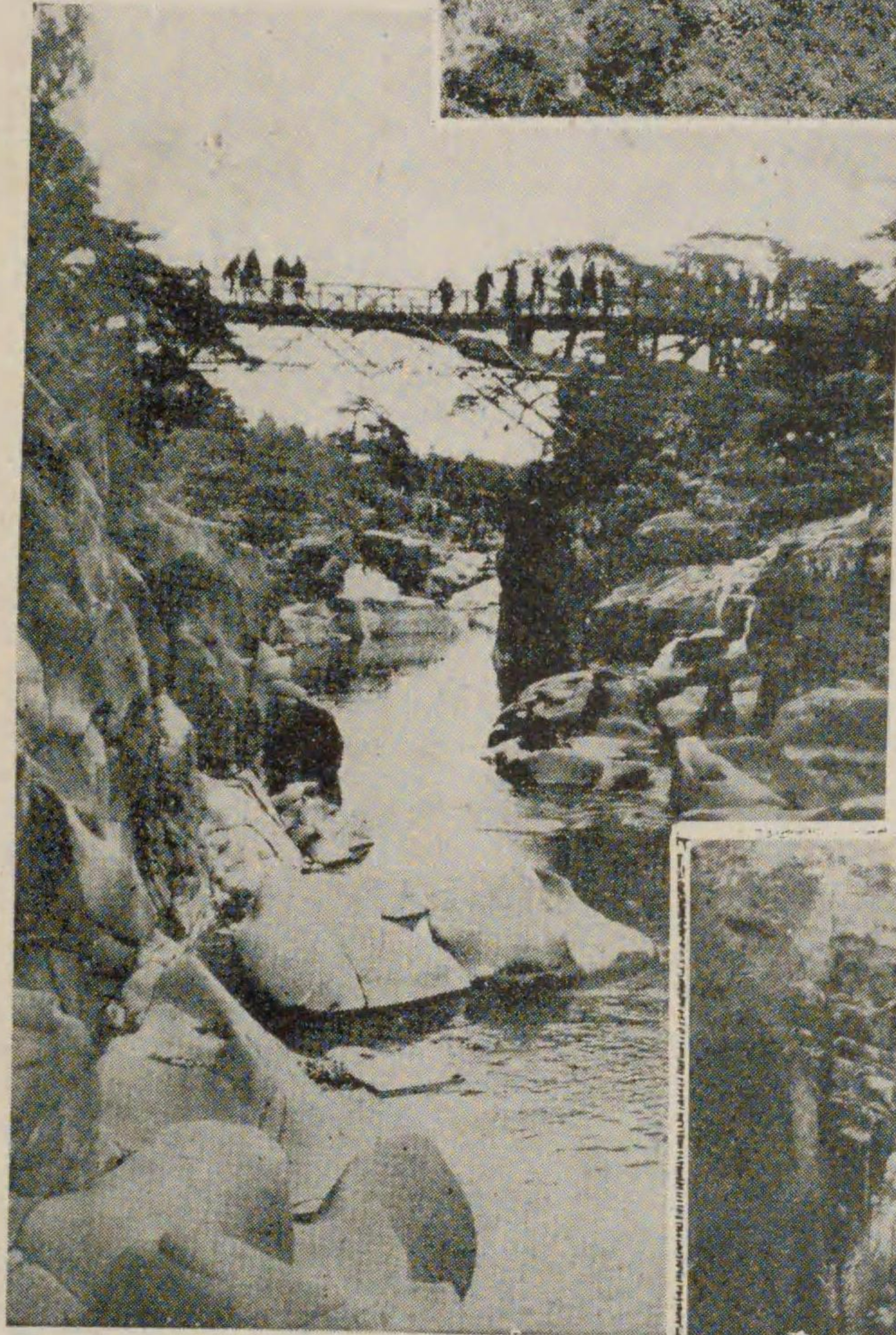
石灰岩より成ること言ふまでもなからう。瀬戸内海の寒霞溪なども小豆島の基底が花崗岩であるから花崗岩溪谷とはいふものの、その表皮は薄い第三紀層をかぶり、安山岩や礫岩を着てゐて、神懸山の高臺をつくつた上に聳立してゐるのである。凡その分類は以上の如きものであつて、猶、これらの峡谷と溪谷とは、それぞれの特色としての植物や礦物や動物などを有つてゐるけれども、それらのものを一人で説明するのは困難なことだから、このくらいにして置いて、峽溪谷に關する博物學的智識は實地について探勝される人々の研究にゆづりたいのである。斷るまでもなく私は峽溪谷の専門的研究者ではない。また日本中の峽溪谷を虱つぶしに探り窮めて歩いたのではない。行つて見ないところも澤山ある。但し此の一卷に收めたものは、私の實地に踏んだ峽溪谷の一部に過ぎない。しかも耶馬溪のやうな有名なるものを編入しなかつたのは、東京を中心とするつもりではなかつたのに、とかく、さういふ形になつてしまつたために、九州の方まで筆を伸ばし得なかつた結果だ。しかし乍ら此處に列挙した有名無名の峽谷と溪谷で、この巻中に採録してないものは、筆を改めて紹介する機會を待つことにしやう。それは管に盛夏三伏の暑さを、いづれに避けやうかと思ふ人々のためのみでなく、一日または數日の閑暇を利用して以て大自然の神秘と美とに接しやうと思ふ人々のために、夏は更なり、春もよし、秋も結構、冬もまた頗る妙で



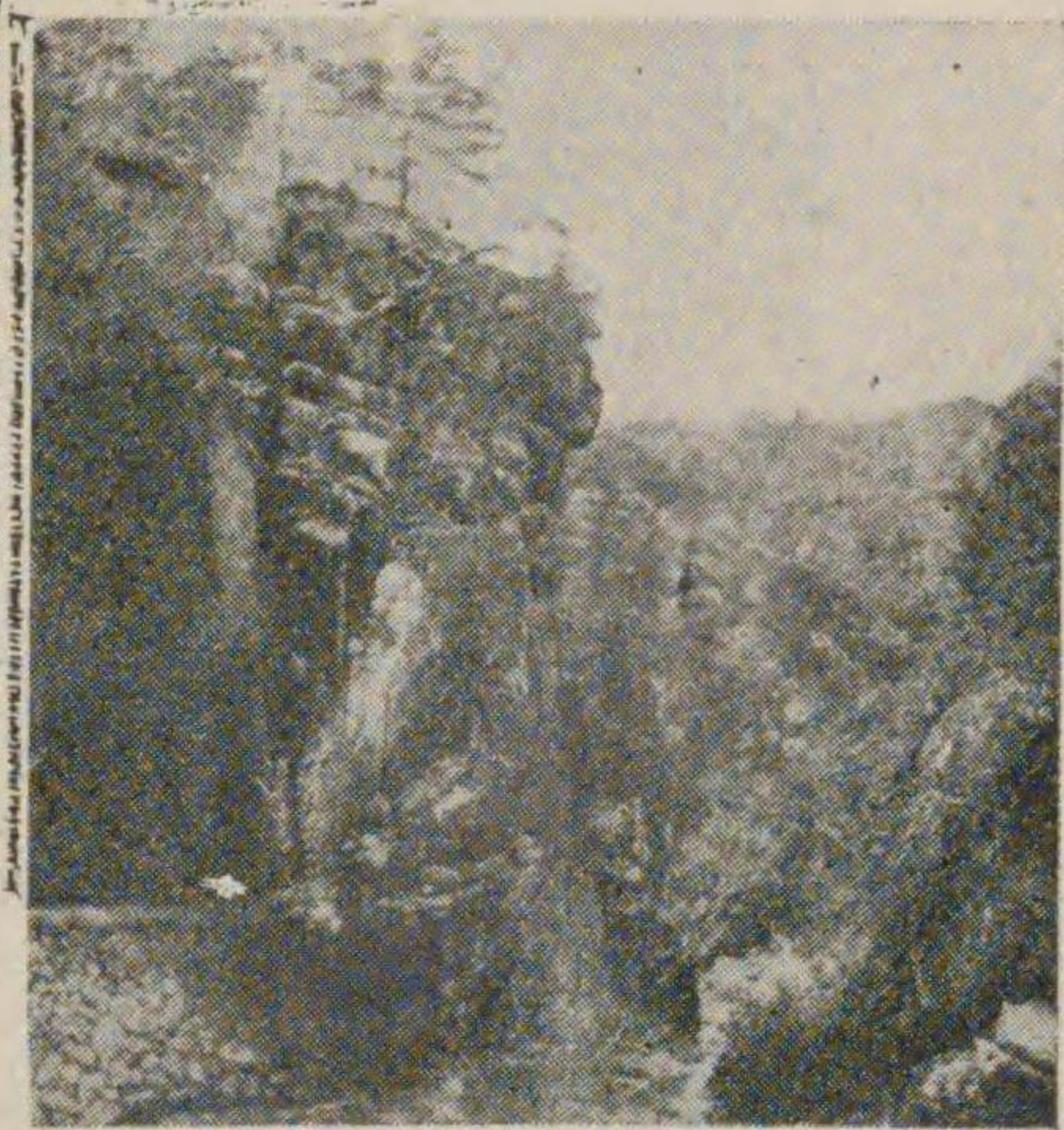
→ 耶馬溪  
(羅漢寺遠望)



← 嚴美溪



溪 家 →



あつて、しかも案内者を必要とせず單獨で出掛けることの出来る深溪幽谷への探勝を勧め、且つ多くの峡溪谷に於て發見されるところの温泉の靈澤に浴されんことを勧め、旁々その輪廓を寫し、道案内の役目をつとめんがための目的をもつて本書の著述は試みられたのである。但し本書を成す記述の大部分は嘗て新聞、雑誌に發表したものであることを附記する。

昭和六年初夏

著 者 識



峡谷の大観

目次

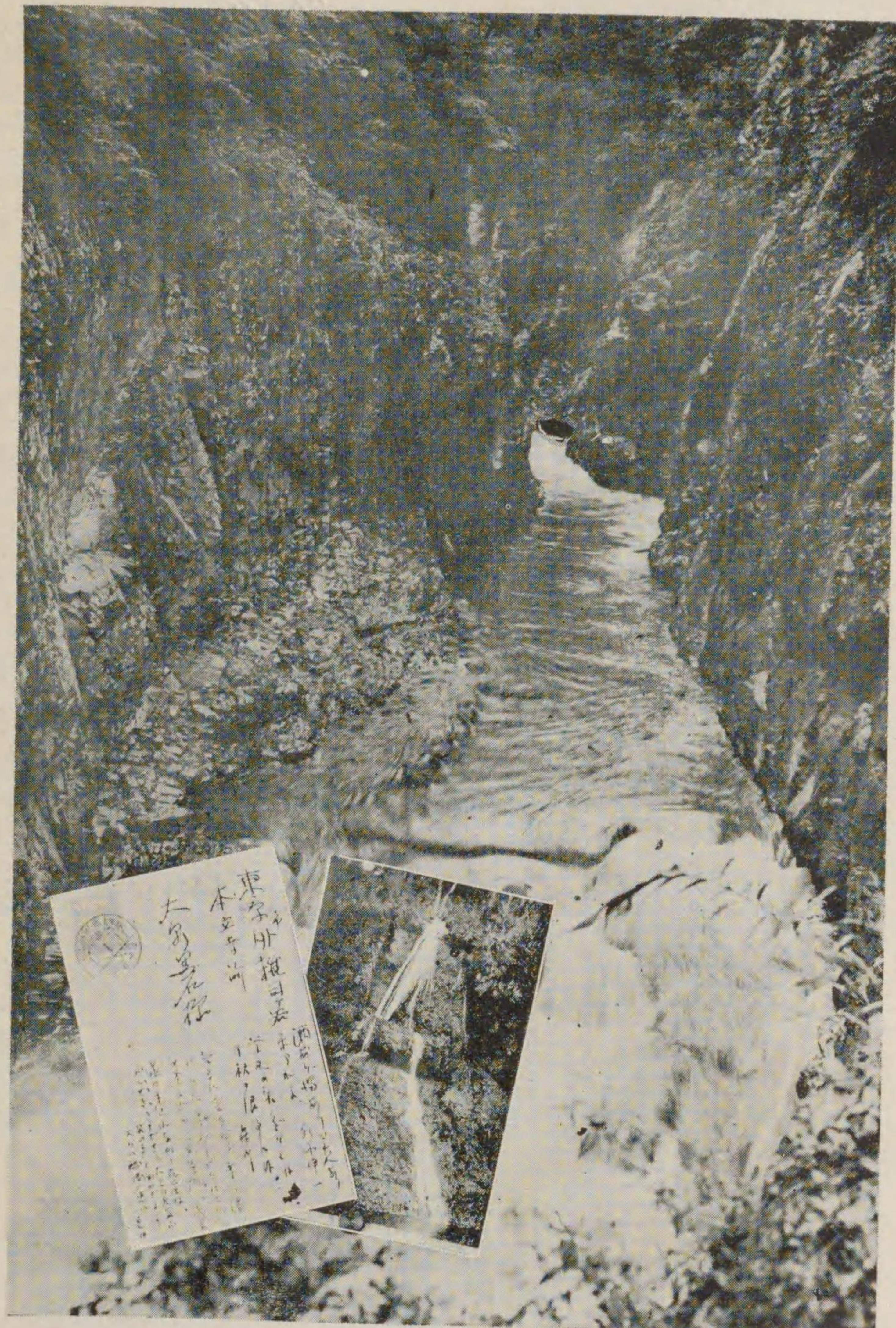
長門峡(山口)  
 寒霞溪(香川)  
 祖谷溪(徳島)  
 大歩危(徳島)  
 小歩危(徳島)  
 耶馬溪(大分)  
 保津川(京都)  
 狛鼻溪(岩手)  
 裾花峡(長野)  
 高千穂峡(宮崎)  
 古座川溪谷(和歌山)

帝釋峡(廣島)  
 層雲峡(北海道)  
 面河溪(愛媛)  
 大谷溪(栃木)  
 嚴美溪(岩手)  
 當樂溪(岩手)  
 奥入瀬(青森)  
 双六谷(岐阜)  
 馬野溪(三重)  
 魚跳溪(三重)  
 豪溪(岡山)



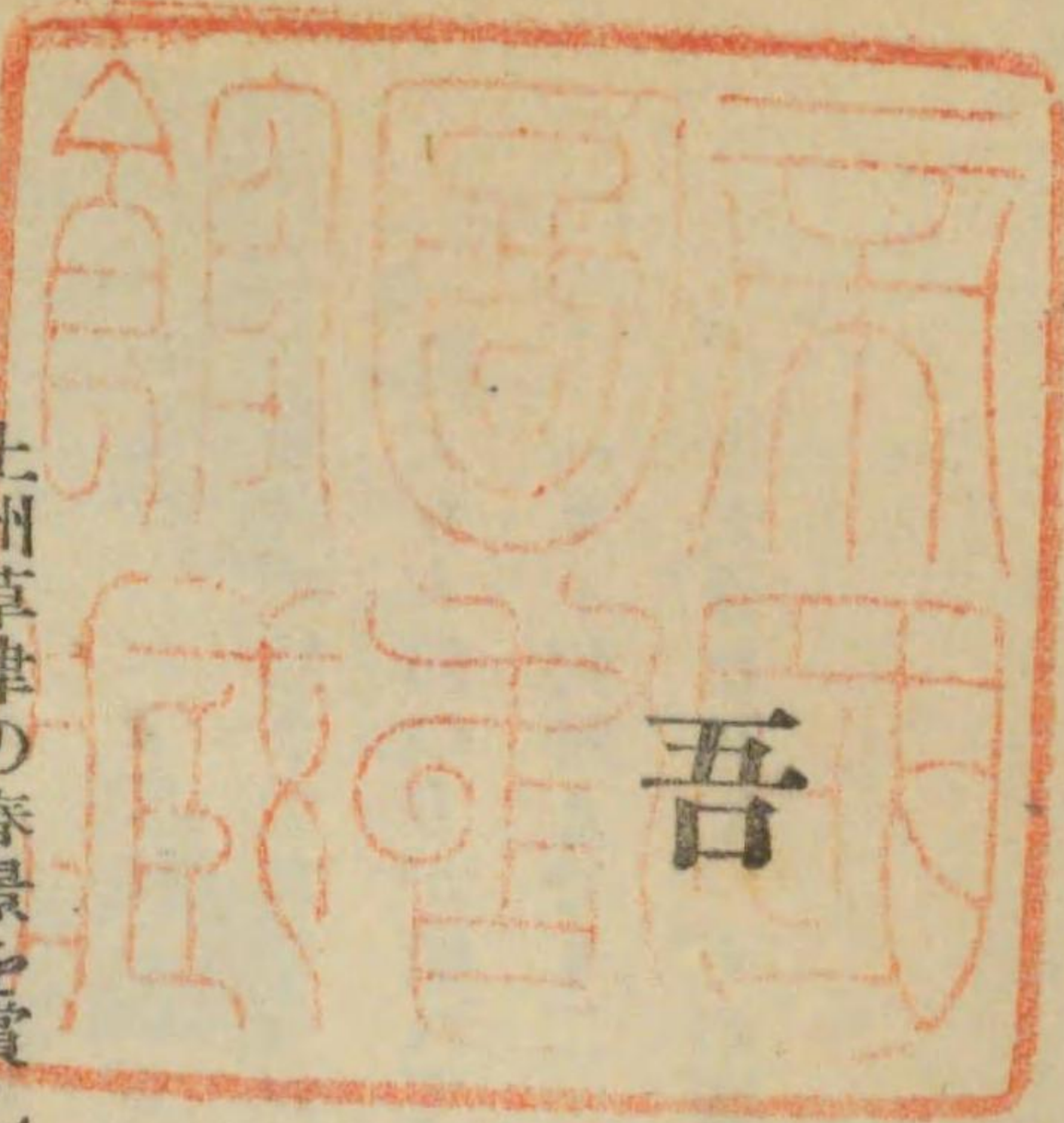






(瀧の糸白とりが暗丁八) 谷 谿 妻 吾





吾妻溪谷

吾妻川上試吟遊 雲巖容奇更  
幽 看盡關東耶馬溪 湯煙凝處  
宿仙樓 圓了

上州草津の春景を賞したるついでに、足を信濃路へ向けようといふ旅である。心ひかれるは澁川より草津に至る吾妻溪谷の風光だ。五月四日正午近く、門を叩いて誘ひに来てくれた東道役の藤田健次氏と連れだつて、池袋から上野驛に馳せつければ、既に同行者の東京日日新聞記者安成二郎。畫家竹久夢二。畫家水木伸一。漫畫家麻生豊。東京朝日新聞記者翁久允。立正大學教授加藤朝鳥といふ顔ぶれが揃つてゐる。この一行の草津見物について、少なからぬ世話を焼いてくれた雑誌「現代」の唐澤武三郎氏などは、わざわざ驛まで見送りに来てをられた。舊知あり。初對面あり。發車時間が迫つてゐるので挨拶も匆々に、澁川までの青切符を求め、金澤行の列車に乗り込んで唐澤氏と別れる、と間もなく列車は動き出したが、高崎までの三時間といふ退屈さを忘れるために始めた俳句の運座が丁度終るころ高崎へ着いた。同行の加藤朝鳥が雑誌「現代」に書い



た紀行文の一節に曰く

「竹久夢二君は「車中雑吟」とノートの紙片にかいて、車内の柱に貼りつけた。相かはらす宗匠らしいことをする。季節も凡々としたもので、若葉、衣更、風薫る、夏山、杜若、老鶯、田打、織などと並べたてた。

辨慶の尻に灸あり衣更

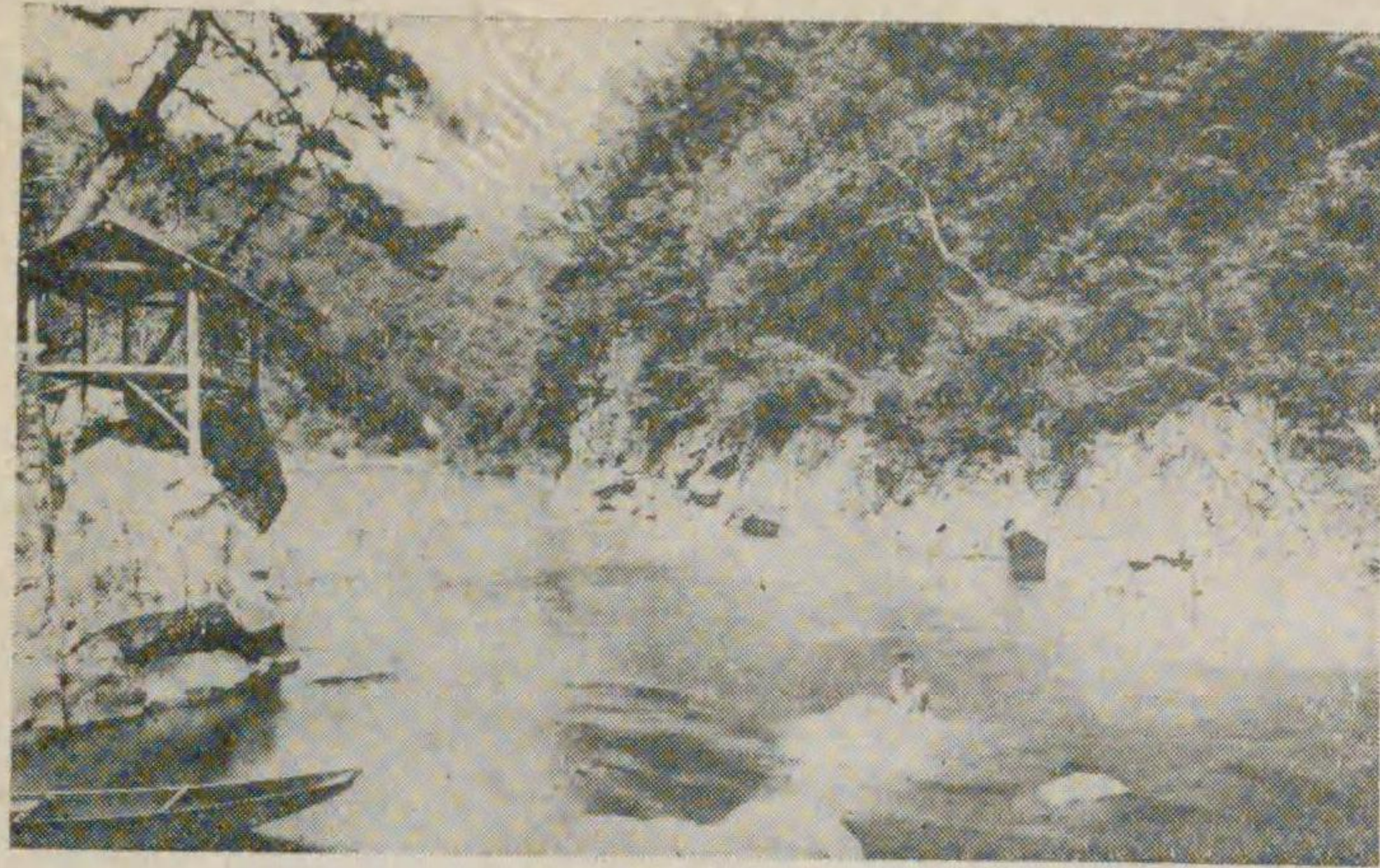
大泉黒石

と云ふのが兎も角も黒石風に出来た句だと思ふ。汽車に乗るがはやいか酒瓶を買ひこんで、彼は獨酌をやつて居る。汽車が顛覆したら早速彼は酒瓶を握つたまゝの屍骸として発見される男であらう。すくなくとも彼にはそんな往生をさせて見たい。

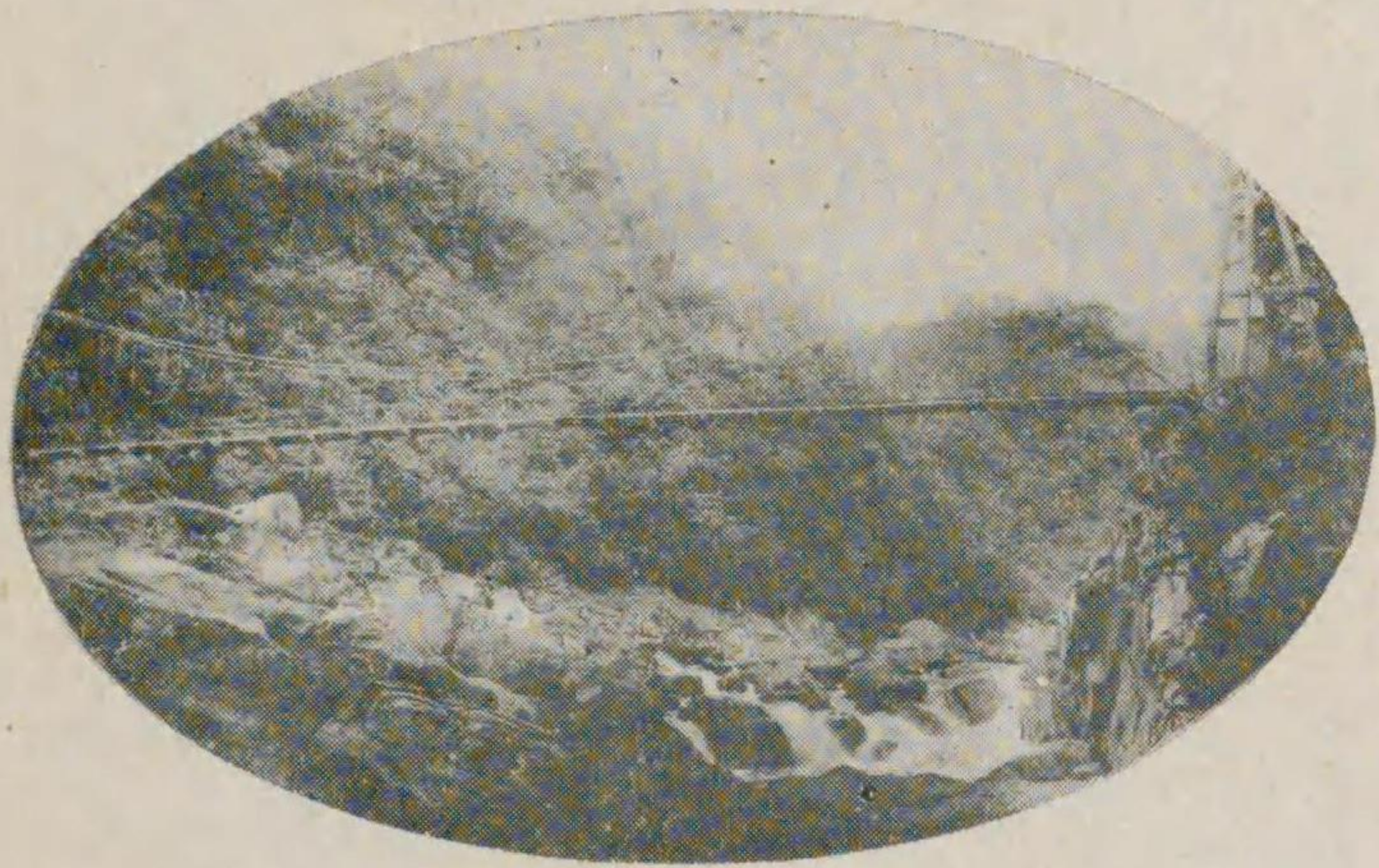
その黒石が、僕に飲めと云つてビールを一本買つて呉れて、紙製コップまでも添へることを忘れなかつたまではよいが、肝心な栓抜きがない。そしてその時、蠻勇傳中の一項目たるに價する一挿話が始まつた。それは猛者詩人藤田健次君が、ビールの栓を齒で抜いて見せると力んだが、栓よりも齒の方が壊れてしまつたことだ。

『オイ何時までも二十臺のつもりで居るなよ』

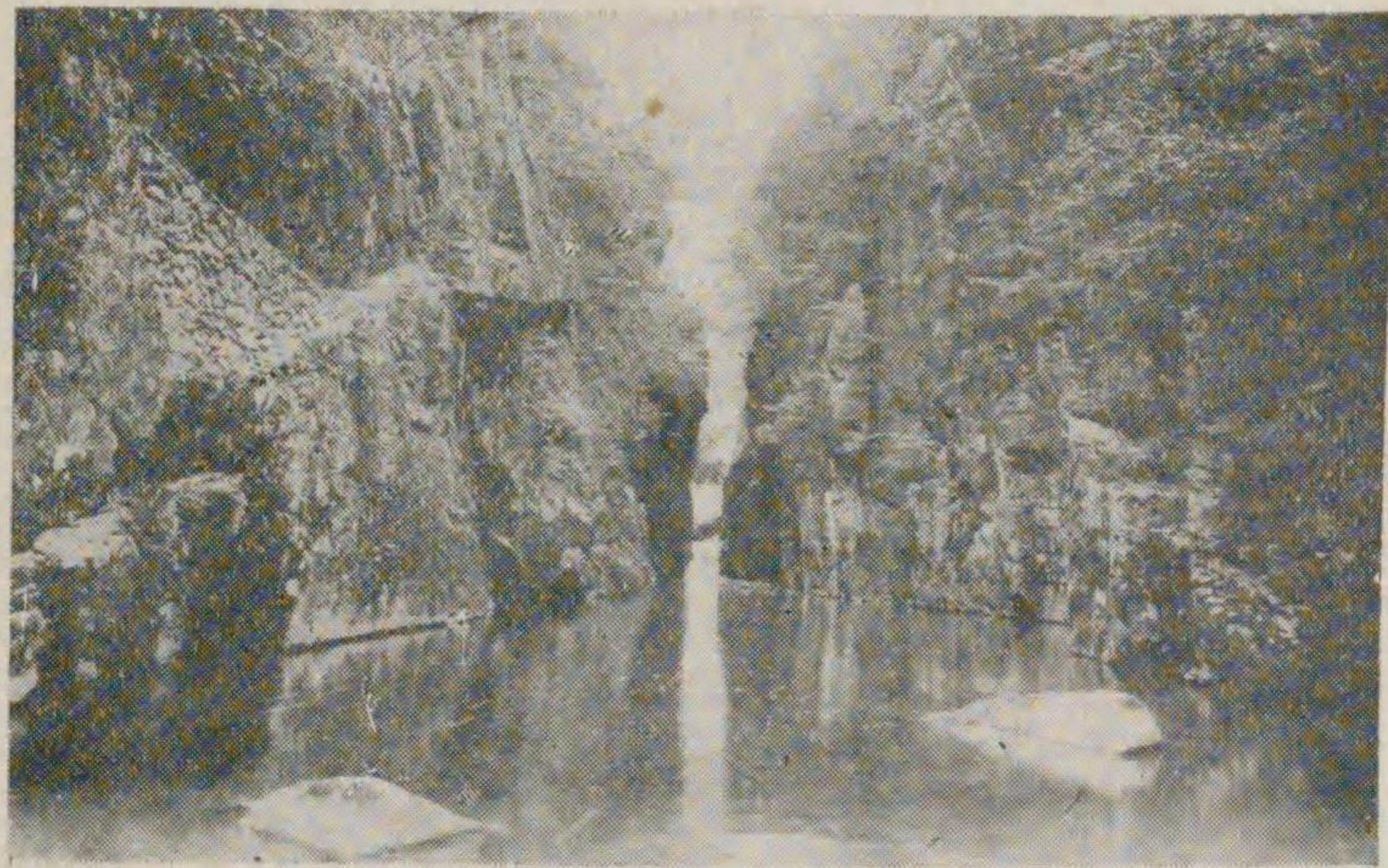
と大きな聲で、その蠻勇振を戒める聲が起つた。聲の主は慥かにノンキなトウサンの麻生豊君



←長門峽(龍宮雌淵)



→長門峽紅葉橋



→生雲溪(暗がの淵)



だつたと記憶する。」

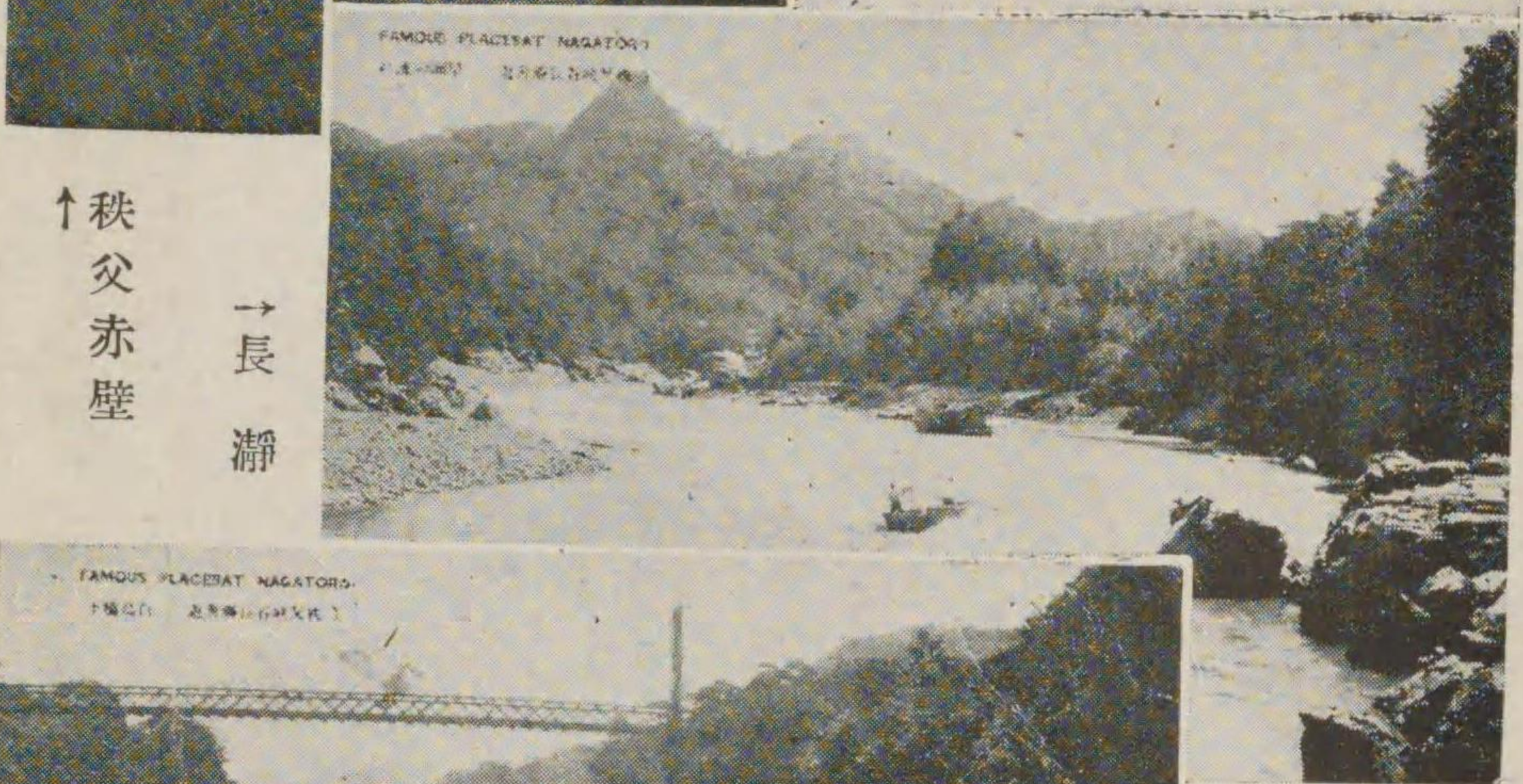
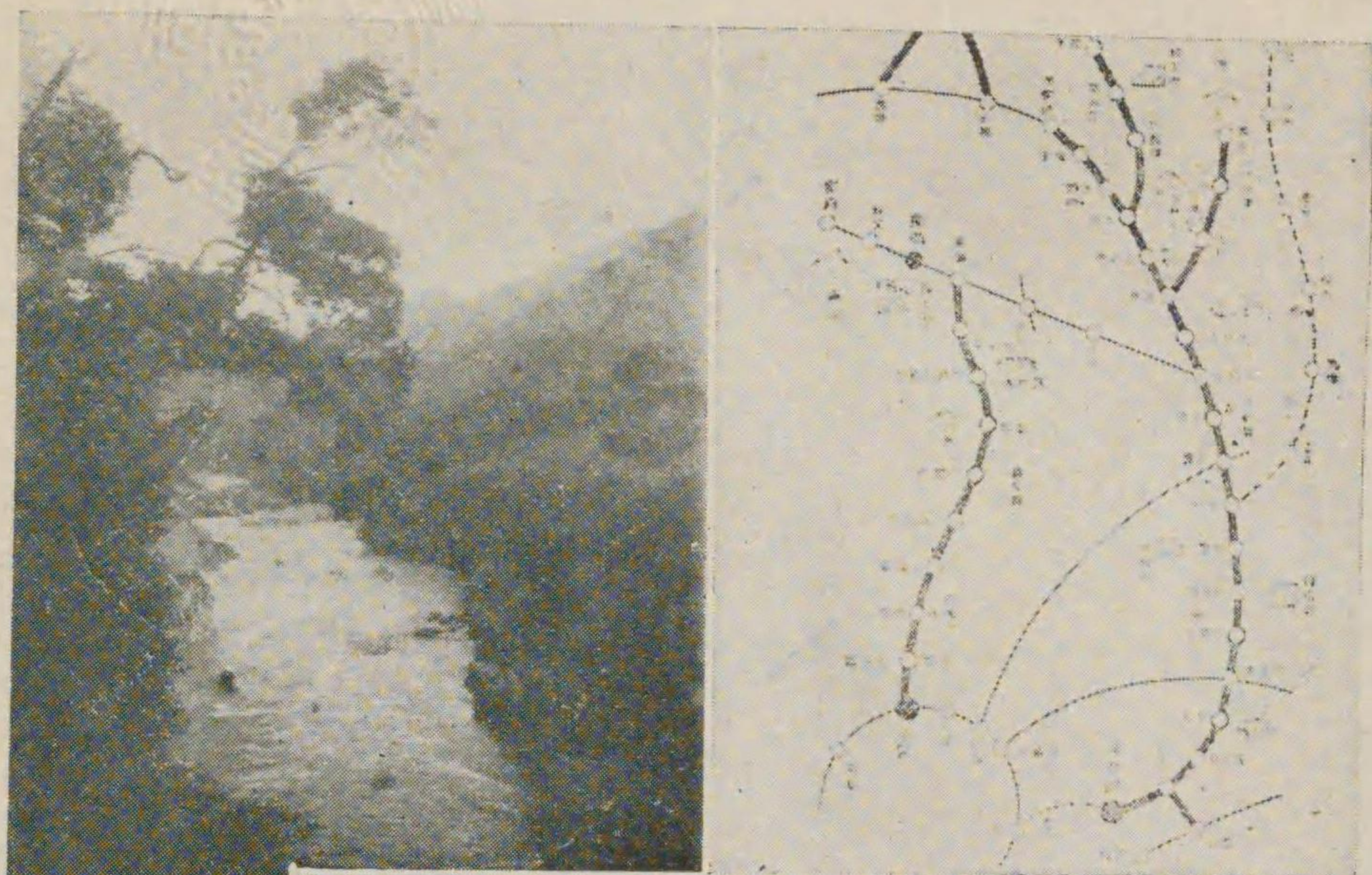
こゝで上越線に乗りかへる段取。二十分ほど時間があるので、歩廊の賣店に立つて蕎麥の立ち食ひをしてゐるところへ、この市の教育會長櫻井伊兵衛氏が、人混みのなかゝら、ひつよ、こり現はれた。私たちと此の人とは、前々月、伊香保へ遊んだときからの知合ひに過ぎないのだ。

それは兎に角、どうして此の一行が、この時刻に此の驛を通過するといふことを知つて來られたものか、頗る不思議に思つたが、後で某氏に聞いて見ると、何でも此の富豪紳士とは伊香保以來非常な親交を結んでゐる夢二から、前以て今度の旅行が通知されてあつたらしい。そんなら自分も一緒に掛けようといふ打合はせになつてゐたのだ。何は兎もあれ、この上州の案内に詳しい有力者の道づれが一人殖えたのは、愉快なことに違ひない。かくて長々し歩廊の北端から上越線に乗移つ一座は、右窓はるかに赤城の雄峰を望み、左手に伊香保の山々を眺め、櫻井氏のお土産といふバナナや南京豆を食べながら前途を語る。「見渡す限り渺々と海の如く茂りたる桑の若葉は、一葉一葉に露を帯び、雨に洗はれ、日光を吸ひ、日光を吐きて、金縁の焔赫々と燃え、晁々と照り、其間には大麥小麥の白金色の穂波をうたすあり。遠き近き新樹の村は、緑より緑を抽きて碧に映り、赤き五月鯉、白き矢幡は遠近にそよぎつゝあり。」と蘆花生が「春雨後の上州」に



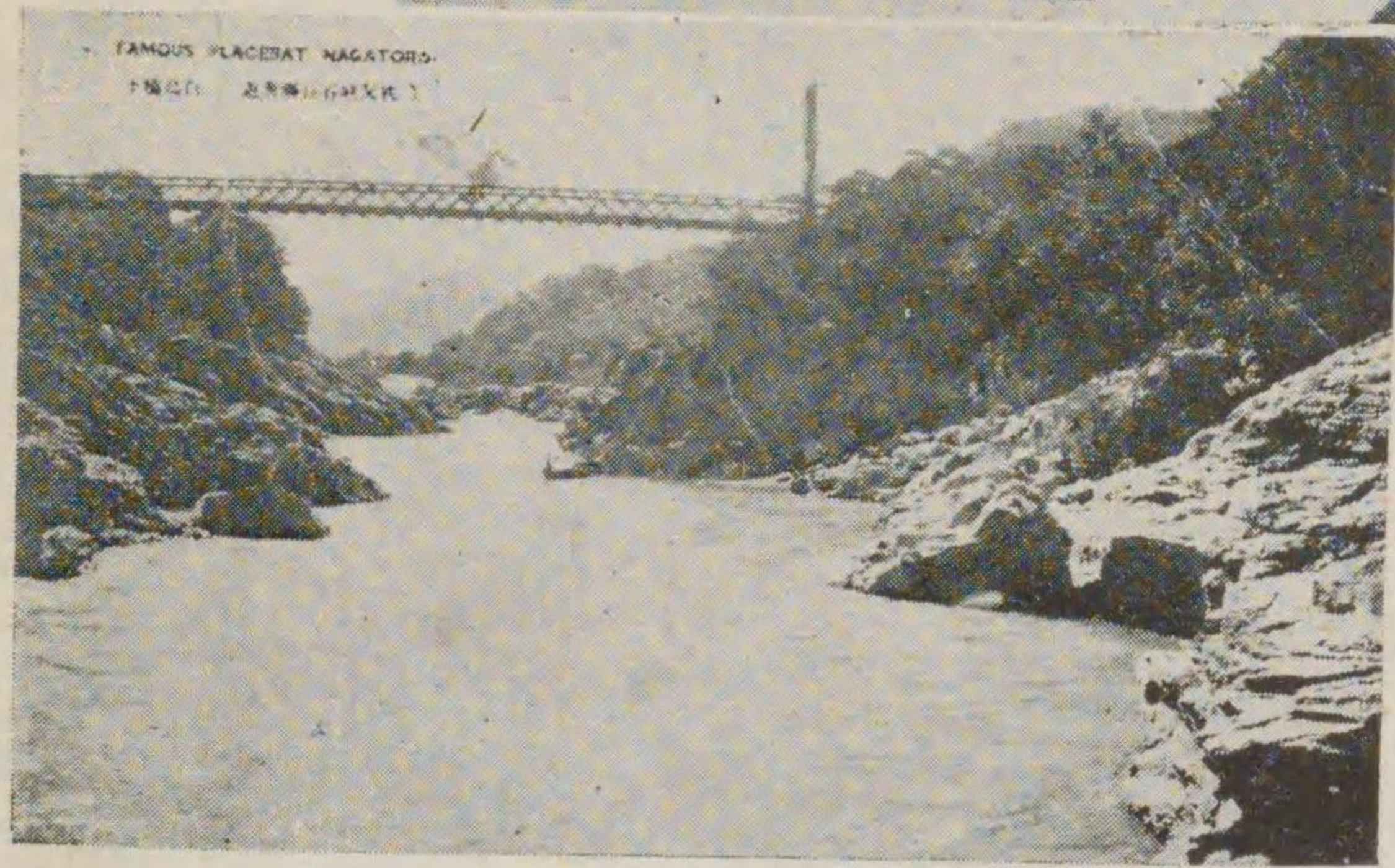
描いてゐるのは正にこの邊である。私たちが東京を離れて間もなく降り出した煙のやうな青い雨は、こゝらで、すつかり上つて寔にこの文章のやうな眩しい景色のなかを、新前橋、群馬惣社、八木原と過ぎ、伊香保と草津への分岐點にあたる澁川驛に入つたのである。こゝから中之條町までは電車でも行けるが、それから先の乗物が覺束ないので、自動車の便によることになつて下車。驛前の喫茶店に小憩する間に、自動車借切りの交渉も済み、仕度も出來たので、二組四五人づゝ二臺に分す乗る。この町はづれから吾妻溪谷に沿ふて十三里の山路を登るのだから、途中で欲しくなつても手に入らないと困るだらうといふわけで、私と安成二郎とは共同で一本の日本酒を瓶ごと煖めて貰ひ、冷めないやうに幾重にも新聞紙で蔽ひ包んで自動車のなかへ持ち込んだ。何ぞ知らんや。この酒のおかけを以て大きに助からうとは！ 自動車が澁川町を後に北西へ向つて走り出してから、ものゝ十分も経つたかと思ふと、俄かに空模様が變つて全く豫期しないほどの厳しい寒さがやつて來たのである。さア驚いた——もつとも山國のことだから、都よりは幾分寒いには違ひない。いくら寒いといつたところで、明日は端午の節句だと高をくくり、私ひとりには春の外套も着ず、合服のまゝで押し出して來た。おまけに自動車の前席に腰かける不運な状態にあるのだ。寒さは特別身に應へてぶるぶる顫へる。これは弱つた。この體たらくで二時間あ

四



↑秩父赤壁

→長瀨



←長瀨白鳥橋



まゝも我慢した日には風邪をひくこと請合ひ。風邪をひいてはたまらないと思つて、股間の酒罎を取り出しては呷り、取り出しては呷りながら、岩井洞の前を突破して、そろ／＼溪谷の姿を見せて来る流れに沿ふた道を驀進に中之條町へ走り込んだ。同行の東京日日新聞記者(安成)は雑誌「現代」にかう書いてゐる。「中の條に接して原町。原町を過ぎると次第に川の風景が奇を増し勝を加へる。それは誠に結構だ。が、それと共に道路も亦奇を加へるのには閉口した。その上、山の寒さは初夏輕装の身に迫つて、手はかじかみ、すでにお酒の無くなつた大泉黒石のみじめさ。危く凍死するばかりである。事ここに至つて初めて補助席の失敗を痛感した。後ろのクツションに地主のやうに坐つてゐるのを何者かと思はれ、翁久允、水木伸一、麻生豊の三人。何れ劣らぬノンキナトウサンで、ひそかに其の話すところを聞くと、小唄幸兵衛を師匠にして小唄を稽古する相談である。そして大泉と私を風除けにして

あゝ、山櫻が咲いてゐる。

山中春ありだね。

瀧が見える。瀧の頭だ。

瀧壺まで見えたら随分高い瀧だらう。



あの断崖の岩はどうだ。まるで蟠踞するタイガーだね。  
や、白樺だ。寒い筈だね。

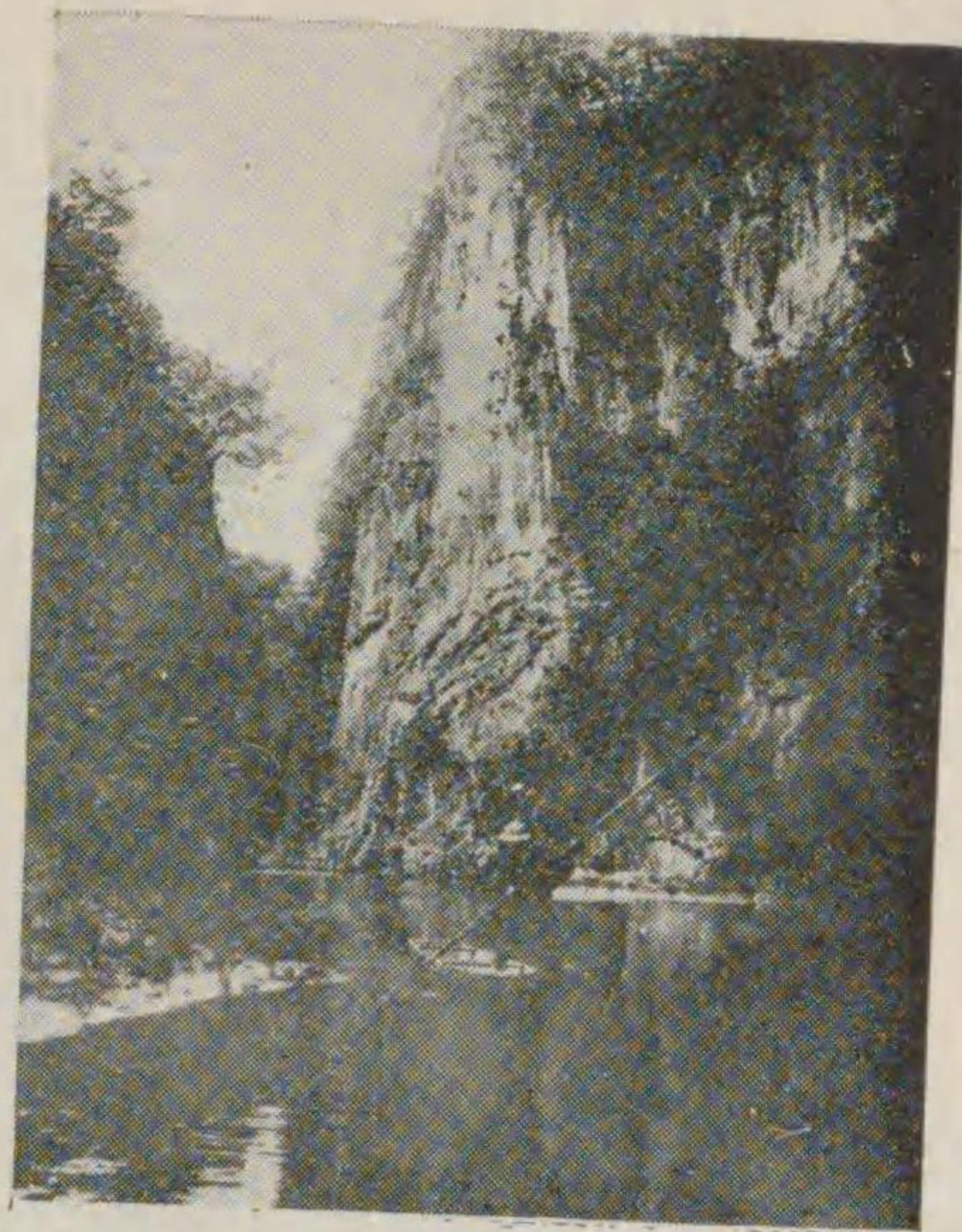
瀧だ。瀧だ。鹽原以上だね。秋はいくらうな。

や、危い。危い。ひどい道だ。

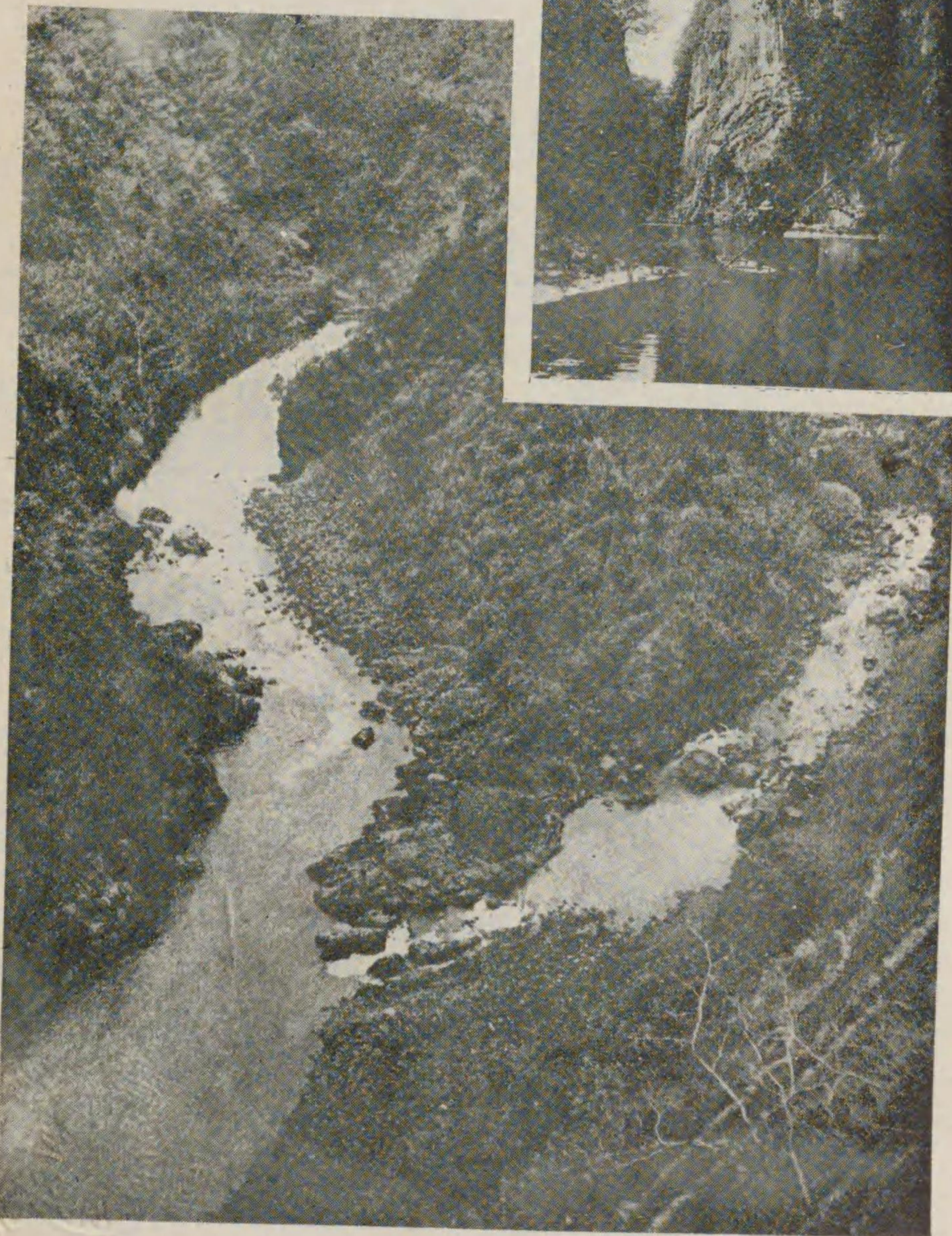
運轉手君、傍見をせずにやつて呉給へ。

などと三人が、貧弱な語彙でうるさく褒め立てるのは、謂ゆる關東の耶馬溪と謳はれる吾妻溪の絶勝である。」云々

中之條町は四萬温泉と草津温泉との分岐點であつて、四萬の方へ行く人は、こゝから四萬川を傳つて北進する。古色蒼然たる澗中の町だが、さて、どうやら雲の色が青味を帯びて明るくなり寒さも少し薄らいで来る様子なので、こいつは有り難いと思つてゐると、この一行に加はつてゐる日本木版會社の田中氏が、私の鬪塞ぶりを見て同情のあまりなのか、不味くて飲めないためか先生、澗川の喫茶店で買った和製のウイスキーを瓶のまゝくれたので、大いに元氣づいた。酒の味はどうでもいゝ。飲んで暖まりさへすれば結構な此の際である。自動車は走る。原、矢倉の村落を駆けぬける頃から、やうやく自動車一臺通れるやうな狭い山路の勾配が急になつて、のろのろ進



→ 貌鼻溪



高千穂溪  
↓

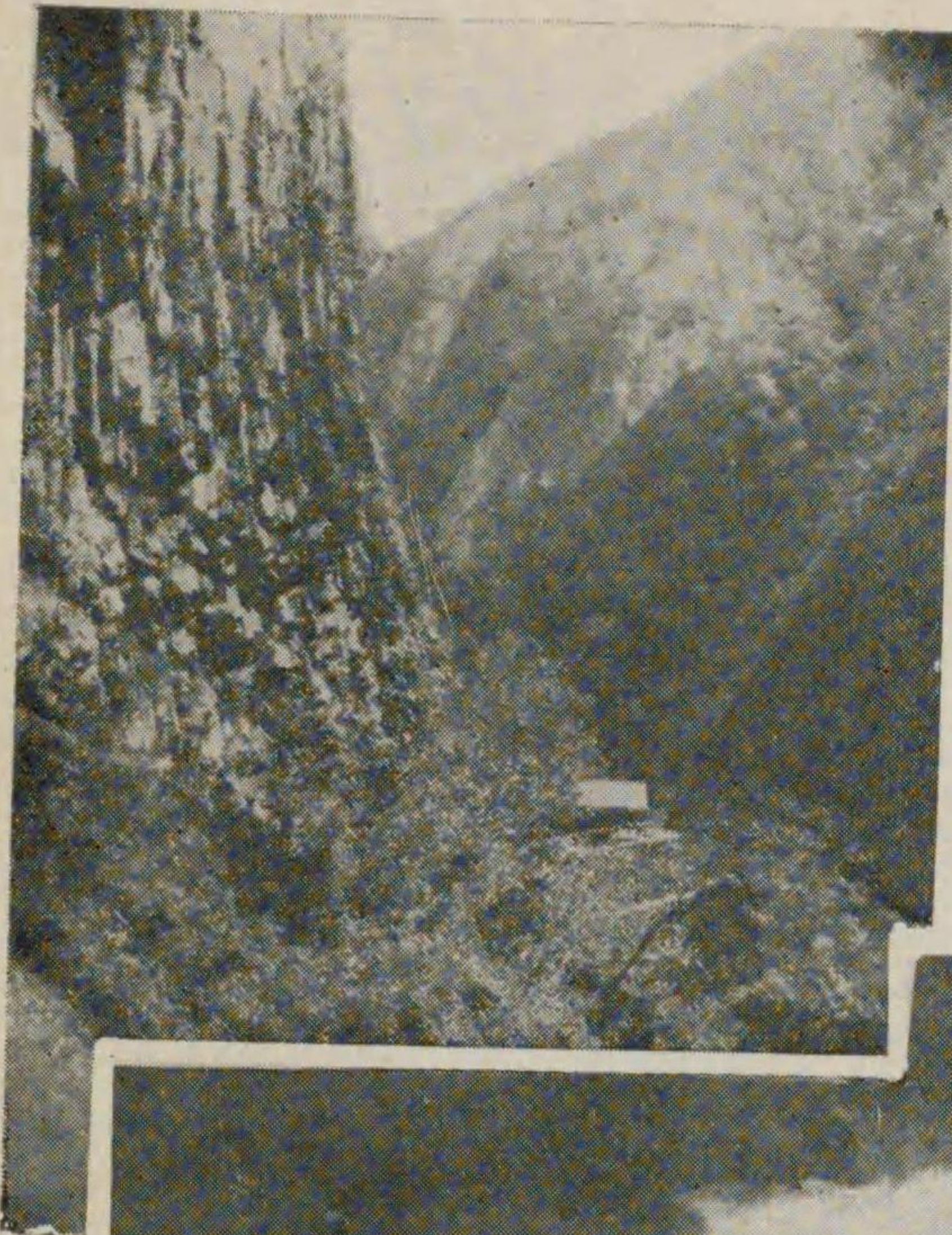




七



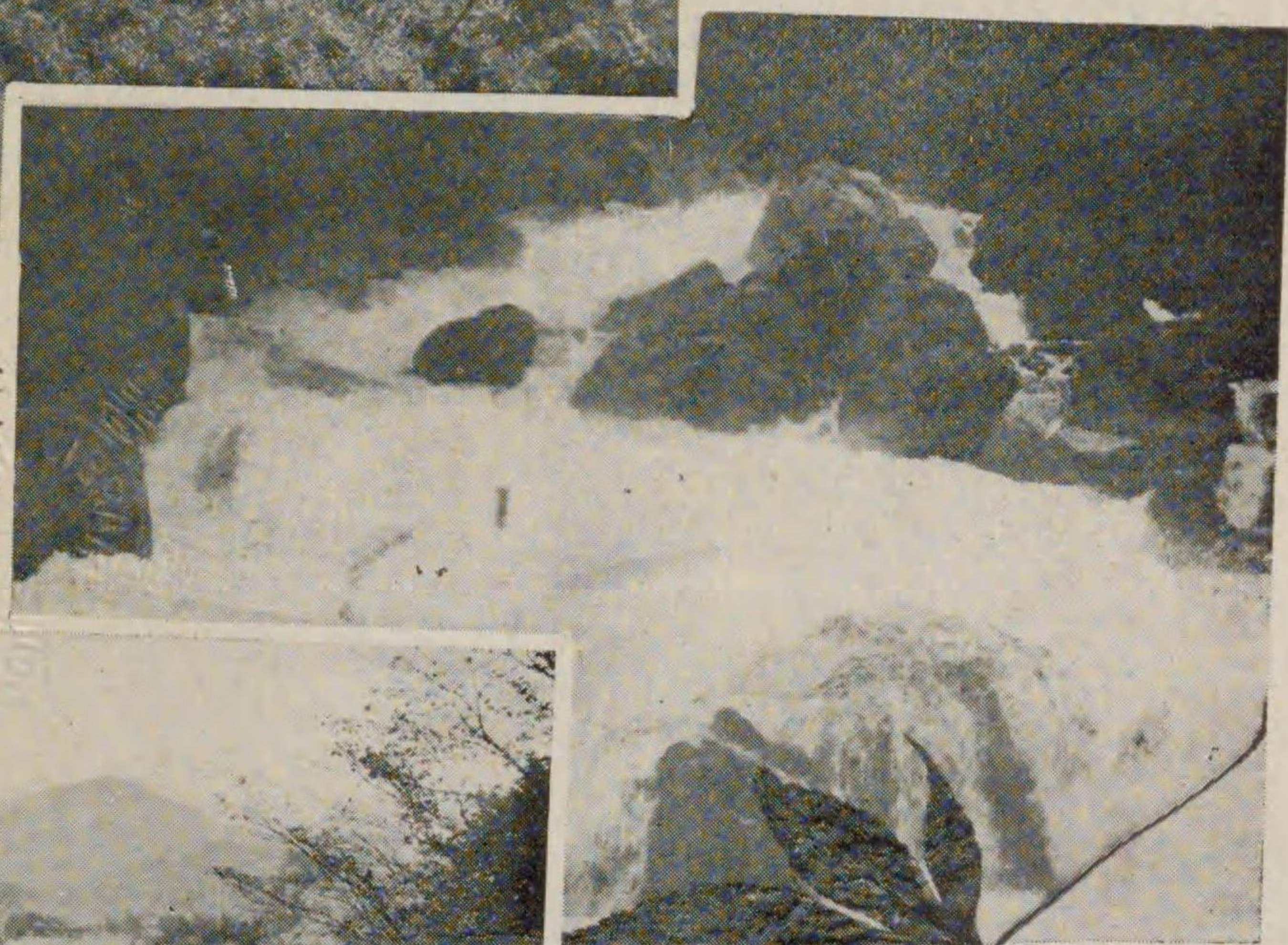




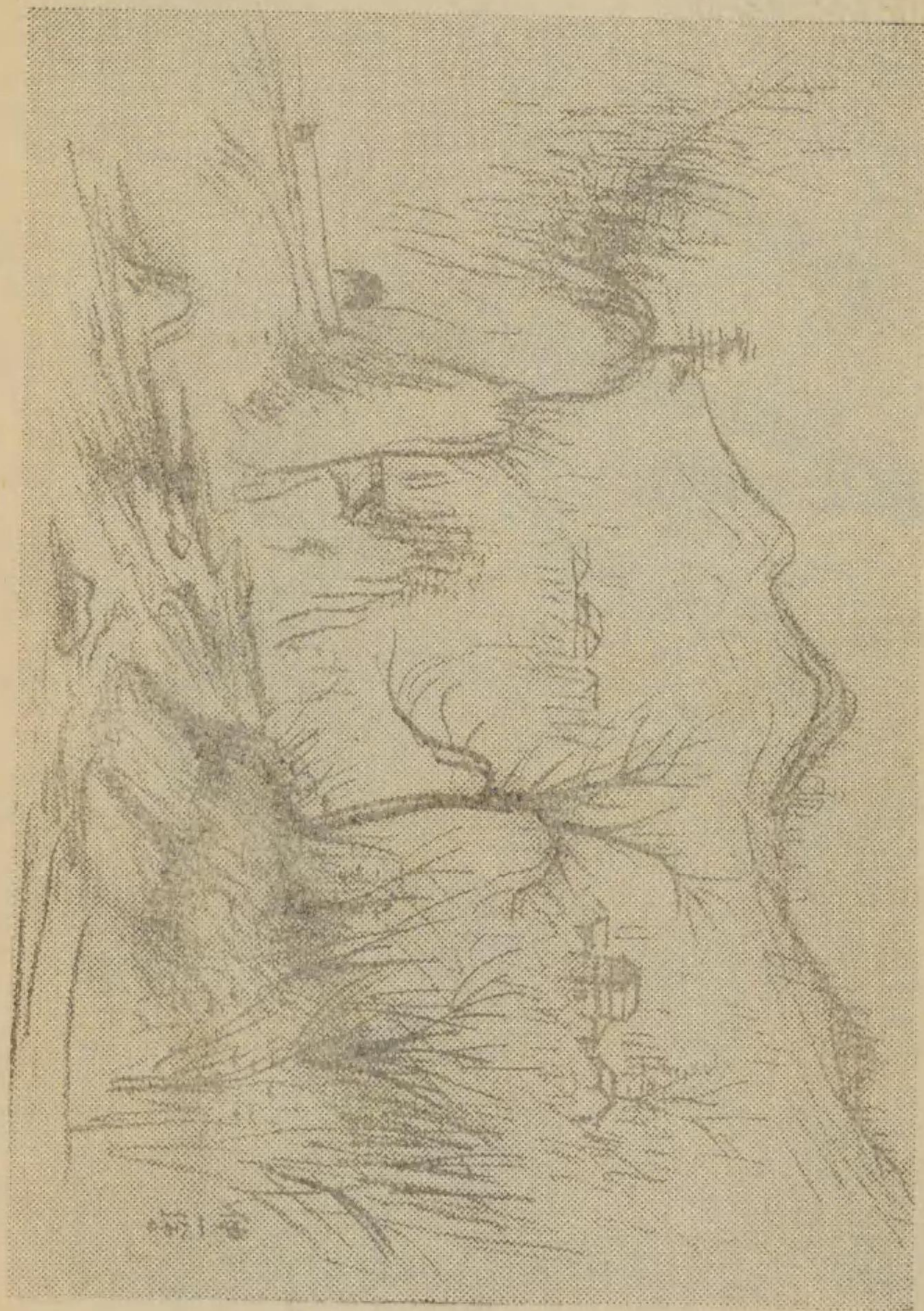
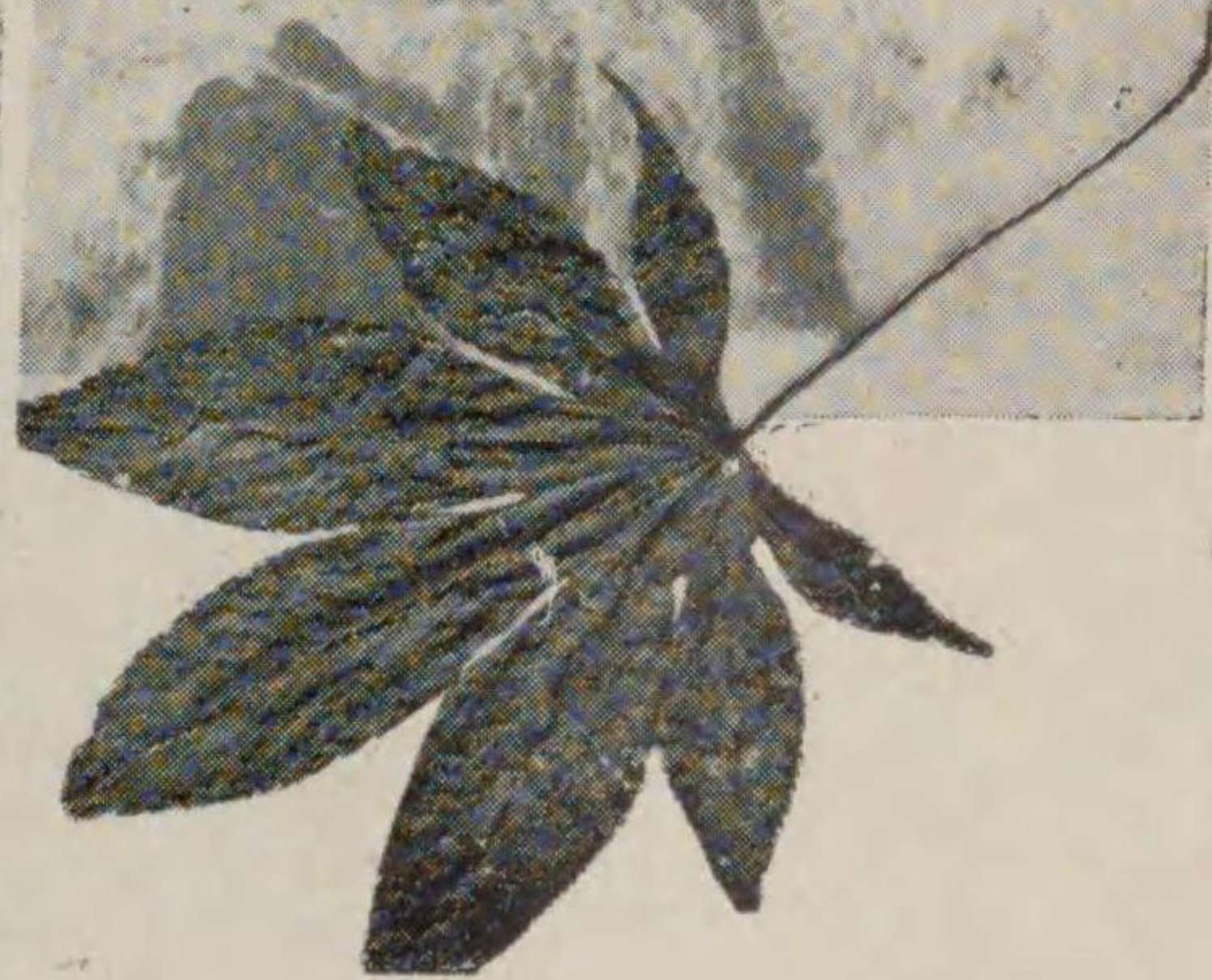
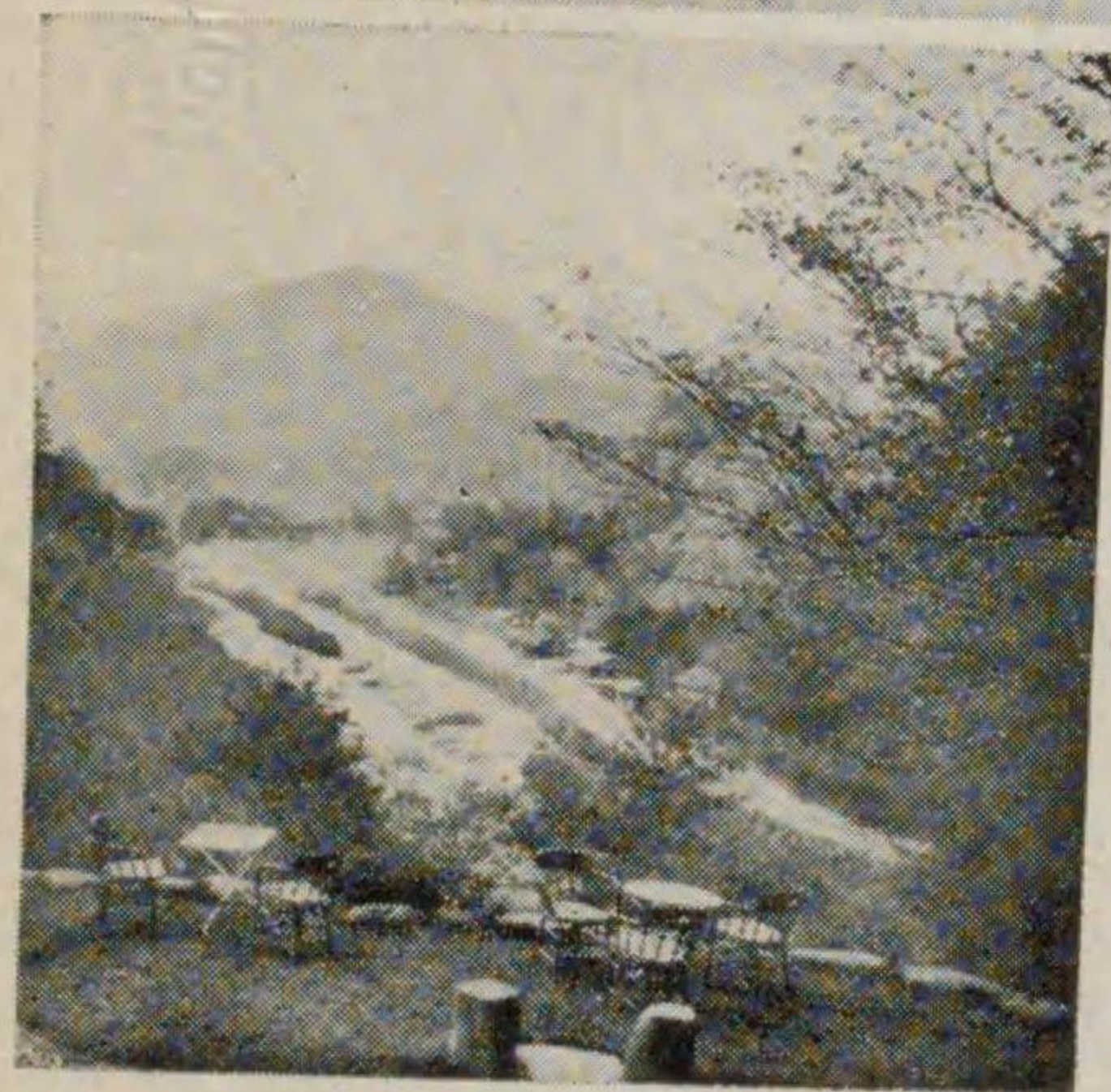
→大谷川溪谷(右なるは著者)  
←大谷川溪谷



大谷川  
湍の谷↓



大谷川  
下流↓





む。それまでは道路と吾妻川の水面の差が餘り違はないほど淺かつたが、このあたりから次第に深まつて、山腹を迂回する山路と溪流とが、ちよい／＼お別れをする、が、また直ぐに出會ふときは、以前よりも格段の深さと暗さを見せるのに驚かされるのである。かくて我が吾妻川は岩島の村落あたりから大溪谷の眞骨頭をあらはすやうに思はれた。この村落より仰ぎ見れば、滔々たる流れを夾んで儼しく相對峙する居鞍嶽と岩櫃嶽とは恰も巨大なる關門の形をなしてゐる。この二つの山嶽は五百年前の古戰場だ。岩櫃山には吾妻太郎行盛の城址があるといふ。建久の昔より降つて永祿年間まで吾妻氏の立て籠るところであつたが、一たび武田信玄の來攻するに及び、恨涕解血哀れ一族は滅亡の非運に陥つたのである。巉々岫立する山壁の中腹には千疊敷。眞田の一本槍と稱する場所がある。苔むし横はる墓石のあいだには、こゝに戦ひし古武士らが、鼓聲衰へ、矢數竭き、弓弦絶ちて双に伏せし名残の白骨。いまは鳥糞にまみれて、ごろ／＼露出してゐるといふ。この吾妻氏の名をとつて此の谿谷を吾妻といふのださうだ。かゝる歴史的事實は深遠なる山姿水態に更に幽悽なる趣を與へてゐるやうな氣がする。日の光は燻つて薄暗く見え、風は霧を孕んで浙々ときこえる。陰にこもつた感じだ。志賀重昂氏は此の谿流の讚美家の一人だが、その耶馬溪とこれとの比較に斯ういつてをられる「耶馬溪は道路と山國川の水面の差異が少



い。然し吾妻川は道路と川の水面の差異が多い。これが著しい相違の點である。これが兩者の景色を全然別趣味なものにしてゐる根底だ。ことに川原湯温泉の附近になると、道路と川の水色の差異が一層甚だしくなつてゐる。仰げば危巖頭上に墜ち來るを見、俯せば百仞の絶壁に紺青色の溪水の躍るを見るといふ處だ。この景色は耶馬溪にはない。要するに耶馬溪は仰ぎ見るのみの景色であつて、吾妻溪谷は仰ぎ見、且つ俯瞰すべき景色である。」と。寔にその通りだ。それは岩櫃山の麓徑を縫ふて道陸神の近くまで辿りゆけば明らかに領ける。あちらこちらに兀然として怪姿奇態の競争をしてゐる峭巖の豊富な岸に密生する樹木。とても美しい新芽を吹き出してゐる裾を洗ひ、涼々たる音をたて、流れゆく碧淵を、十數丈の脚の下に眺めおろしながら、枝もたわわに黄金の花をつけてゐる山吹の叢と岩根の間を徐行する車上の私たちは、その緑衣を纏へる斷崖から、或は綿々たる白布を流すやうに、或は怒れる白龍のやうに、轟々たる響をあげて奔下する瀧と出會ふたび毎に快哉を叫ぶのである。その水の落ち込む深い暗い壑を行くは筏。

「ここいらを八丁暗りと申します。」

運轉手の飯田道喜君が説明する。飯田君は群馬縣第一の運轉手ださうだ。かういふ老練家であれば、こんな場所へ自動車に登らせることは、なか／＼六ヶ敷いと櫻井氏が言ふ。

「一幅の南畫ですな。」

と私。

「全くだ。かういふ景色を手本にして畫の稽古をやりたいもんですな。新緑もいゝが紅葉になる頃も美しい。さつきの瀑布は何でも金鶏の瀧とかいふんぢやないかしらん。この邊には大澤の梅林といふ梅の名勝があります。やあ。川原湯が見える！」  
と水木畫伯。遙かの對岸を指さして言ふ。ポケットから地圖を出して見ると、私たちの右手に高摩山といふのが聳えてゐる。その山腹を走つてゐるのだが、高摩山と溪流を挟んで穹窿に抽んでゐるのが高平山。その山腹に新らしい三層樓の家が小さく見える。

「あれが川原湯温泉ですよ。あの三階建の家が、今年の正月、白鳥君等と一緒に行つて泊つた敬業館といふ温泉宿です。川原湯では一等大きい。」

「成る程。あの時の寄書は、あの家から出したんですね。」

「はつはつは。」

實はその寄書の連中——水木伸一。白鳥省吾。霜田史光——と共に雪を冒して此の温泉へ出掛け、る筈だったが、家事の都合で行けなかつた。そのとき連中が繪葉書に寄書して送つて寄越したこ



とがあるのだ。曰く「酒あり。湯あり。美人あり。來られよ。」(水木伸一)。「谷間に雲まだら尊く湯に浸る。久しぶりにて大兄と逢はざりしは遺憾」(白鳥省吾)。「遂に來られなかつたことはヨクセキの事でせう。大兄の元氣な笑ひ聲を聞かざること、大いに酷惜に思ふ」(霜田史光)云々といふのだが、あとで聞いて見ると、その美人なるものが世にも大變な代物であつたさうだ。この敬業館のほかにも三四軒の温泉宿はあるが、敬業館が最もよく識られてゐると見えて、名勝案内にも「敬業館最も大なり。草津温泉に浴したる後の糜爛を治癒するに効あるが故に、概ね此の温泉に歸途二三泊をなす例なり。」とある。

「われわれも草津の歸りに彼方へ寄つて見ようぢやありませんか。とにかく吾妻溪谷の絶勝ともいはれる景色は、あの川原湯の近くにあるんだから、こゝまで溯つて來て、彼方へ行かないといふのは嘘ですな。」

と水木畫伯がすすめる。時間さへ充分にあれば訪ねて見たいものだ。わざわざでも足を運ばねばならぬ、見るべき價値のある處らしい。山と水との變化に奇を盡し妙を極めてゐるのは、たしかに此の川原湯附近である。信濃と上野の國境は海拔四千五百尺の鳥居峠に源を發し、蜿蜒十里の長溪を北へ北へと流れ來れる水は、大渦小渦をまきながら洶々として此處に到り、濬潤に欽立蟠踞せ

る危礁險巖に激突殺到して俄かに亂れ、崩れ、凄まじき逆浪を起しつゝ驚瀾狂濤互々に牙を交へ、齧殺叫喚沸乎暴怒し、鬣鬣をふるつて空中に龍卷き上る末は、滄渤たる烟霧となつて、この勢ひに打ち震へる樹々の色あざやかな翠翼のあひだから濛々と立ちのほる。湍崖の眞上を走る自動車のなかから首を出して覗くと眼がまひさうな、驚魂動魄の爽烈な活劇である。山と水との格闘である。五月の今は肌を粟を生ずほど悚々するが、夏はさぞかし涼しいだらう。その凄冽なる嵐氣に潤ひながら、谿上に架けわたしてある長い釣橋の前を通りぬけた。これを渡れば川原湯へ出るのだが、私たちはその温泉村を左に遠望しながら久森の墜道を過ぎて次第に車輪の回轉を速めだす首をめぐし、轟々たる谿聲を隔て願れば、黄昏の蒼靄につつまれたる敬業館の高樓。青巒のふところ影を没せんとして夢のやうに淡く見ゆる。幽韻縹渺たる風致と逸趣とは、正に沈南蘋の畫であり鄭谷の詩である。山水の神は迫り來つて我が胸中に入るの思ひがした。行く手にあつて岩松に蔽はれ、形、堂宇のやうな大きな岩があらはれた。堂岩といふのださうだ。それからナポレオンの帽子みたやうな山が見え出した。これが丸山とつて、その昔、篠原女蕃なる武士が、山上に砦を築いたといふ話。今もその址があつて、紅白の撫子に飾られてゐる山上の小沼には、山椒魚などが棲んでゐるさうだ。吾妻谿谷の一奇と稱する辨天橋も此の沿道近くにある。それは谿流

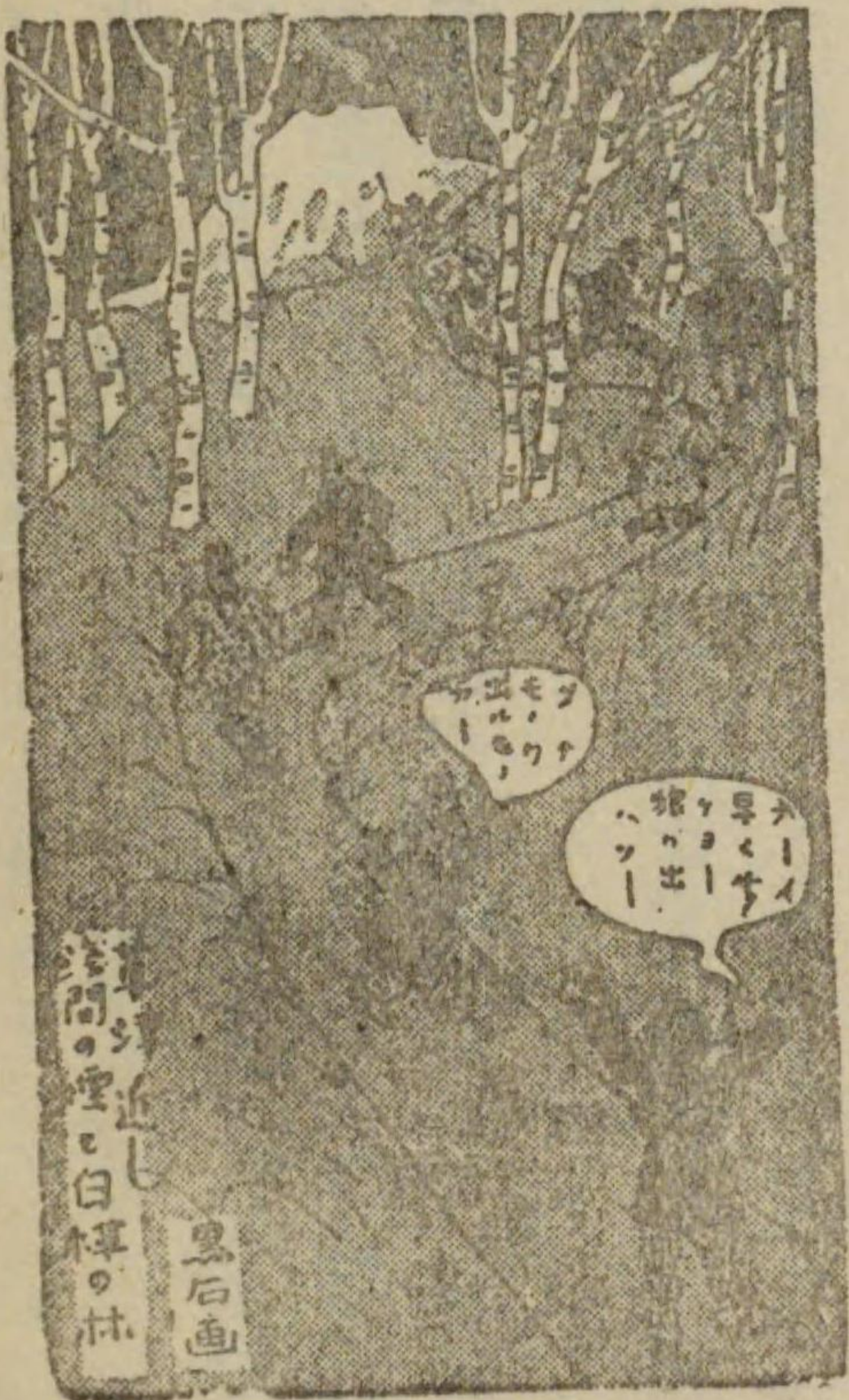


の中央に聳立する峭岩をピイヤとして長々と架けわたした雲橋である。川原湯から一里半。林の里を経て私たちは長野原へ着いた。鄙びたる静かな町である。前には岩櫃山の古戦場があつた。こゝには「窟の観音」といつて、河流に面して屏立せる巨大な岩の洞窟がある。傳ふるところによれば、元起天正の戦亂時代に、こゝの豪族と武田信玄の兵とが鎬をけづりあつた古跡である。佛像を安置した岩窟は、海野長門守幸全が城砦の址だ。この町で私たちは小憩することになつた。草津温泉まで三里半といふ。登り下りの山路をも厭はで、私たち一行を草津へ招いてくれた温泉町の有志が、わざわざ出迎ひに来てをられたからである。遠路の旅の疲れを犒らふ彼方の挨拶と此方の謝辭との交換が終ると、もはや双方どちらも舊知のやうな寛ぎやうだ。朴訥ぼくちつけに見ゆる老人が、五月節句の鯉職や、お粗末な武者人形などを齧いでゐる一軒の家に入つて澁茶を啜る。氣を利かせた振舞酒に、私は暖を取つて勇氣を鼓舞する。路傍に白く匂へる梨の花蔭。寫生帳スケッチブックをひろげる畫家もあれば、寫眞機を持ちまわる者もある。が、十分の後には出迎への人々と共に、漂ひ來る夕闇のなかを、草津へさして自動車に搖られてゐる私たちであつた。山路は右折して白樺の間を須川溪流に沿うてゐる。乃ち吾妻溪谷をなす本流と私たちとは此の長野原町でお別れをしたのだ。谿谷の上流を探るには此町から草津へは行かず、嬭戀つまこひの方へ向はねばならぬ。ここから草津までの道

中を同行の安成は「現代」にかう書いてゐる。

「吾妻川に別れて、我々は愈よ草津への山路にかかるのである。而して山路愈よ峻、川原湯から草津まで六里に二時間を要する。草津へ五六町といふ所で、肥大漢加藤朝鳥の乗つてゐた先頭の自動車が泥にはまつて了つた。道が狭くて後の車も通れないので、皆な上りて歩く。暮色の中に草津の町の灯が見える。寒い筈だ、こいつが生へてるんだと、車が出るといきなり、大泉黒石が落葉松林を見つけて胴顛どんたんひしながら叫ぶ。後ろに淺間、前に白根が眞白に雪をかぶつてゐる。―それでも春だね、雲雀が鳴いてゐると、民謡詩人の藤田健次の言ふのをよく聞いて見れば、鶯の笛鳴きであつた。―

笛鳴や白根に降りし春の雪 二郎  
一旦消えたのに、その朝また降つたのだといふ。一行は修學旅行の中學生のやうに、疲れて寒さに顫へ、温かい温泉に飛び込む期待に勵まされながら





物も言はずに急いだ。三月の伊香保行以來入浴しないと云ふ大泉黒石を先頭にして。

一六

温泉の匂ふ餘寒の町に入りにつけり

二 郎

町長山本與平次氏。前町長細野館主人細野停氏。山本館主人黒岩誠一郎氏。望雲館主人黒岩忠四郎氏。草津旅館組合副組合長野口袈裟雄氏その他有志の方々に迎へられて、我々一行は湯の煙騰々たる草津町につくと直ちに大東館に靴を脱いだ。これは町長山本氏の經營にかゝる三層樓の大閣である。

旅装を解いて着物に着替へ、温泉に浸つて寛いでみると、我々の歓迎會をやるといふので料亭へ引張り出された行つて見た。そこの大廣間の兩側に有志家一同ズラリと控へてをられる。我々の着席を待つて型の如き歡迎の辭が叙べられたので、こちらの方からは一行の異彩たる立正大學教授加藤朝鳥が立つて一場の挨拶をやる。次いで先方からは草津温泉研究所長兼石田病院院長の石田醫學士が徐ろに起つて「草津温泉の化學的性質と治病的特色」とでも言ふべき内容の豊富な研究的報告に移り、能辯をふるつて曰く

「私どもは、この温泉は下等な病氣をもつた人々が、こつそり行くところであるといふやうな頑迷固陋な世間の偏見誤解説をくことに努めてゐるのであります。願はくは皆さんもさういふ間違

つた先入觀念に囚はれて、この素晴らしき靈泉の恩澤に浴し得ざる人々に、この温泉の實情と真相を明らかにされ、誤解を一掃されることによつて、自然の美景に將また温泉の効力に於て世界無比と申しても過言ではないと信ずる我が草津を、天下萬人の一大樂園たらしめることにお力添へを願ひたいのであります」と結んで着席すれば拍手急霰の如し、石田氏は愉快なお醫さんである。それから酒宴になつて、湯の町の唄女たちの湯揉み唄や草津踊（？）が出る。あけびだからあけびだかの葉を、くるくゝ巻いて白胡麻をふりかけた「こども」と稱する野菜料理も珍だが、こんな山ふところに海魚があるのも不思議に思はれた。

閉會したのは十二時過ぎだ。大東館へ戻つてまた一浴。安成。藤田。櫻井。翁氏と枕を列べて寝た。水木伸一は一晚中行衛不明。但し翌朝あらはれた。

さて草津温泉のことについては同行の藤田氏が「現代」に書いた一文を借りることにしよう。「西で有馬、東で草津と云はれる程草津の温泉が靈泉であると云ふことは、かねて聞き知つてゐるところであるが、百聞は一見に如かずとやらで來て吃驚。先づ温泉の効能あらたかなことはベルツ博士も……『日本全國にその比を見ず云々……』と激稱してゐる位だから事あたらしく云ふ迄もなからう。ところでその風光に至つては文字通りの山紫水明その明媚なことときは、い



つかぬ物事に感心しない我々一行でさへ思はず嘆聲を漏らさずにはゐられなかつた程である。何しろ海拔四千五百尺餘の、高山地帯なので梅に桃、櫻に躑躅が季を同じうしての花盛りと云ふ奇觀その上周圍の山々は落葉松と白樺、千本杉におほはれた緑林なので、空氣の清新さは申す迄もなく、曉かけて啼く時鳥の聲にも温泉情緒がしのばれ、温泉川に遊ぶ河鹿の涼音もそよりに旅情をそよりたてずにはゐない。

のらくらが與太の旅寝や時鳥 健 次  
麥青くそよぐ夕日の淺間かな 同

遠く遙かに望む活火山淺間の雄姿は、正に神秘そのもので、蜒蜿と立ち昇る噴煙は太古さながらの雄大さである。

又近くの山々には珍しい高山植物の數々があつて旅人の心を慰めてくれる。その高山植物の妙にそゝられてか、何時も紳士面の翁久允が草を分けての採集ぶりには微笑せざるを得なかつた。そして手も足も土まみれになつた翁の、仙人苔を一杯かゝへて『持つて歸つて植ゑるのだ』とえびす顔でほく／＼してゐるのを見て急に羨ましくなつた夢二畫伯と私は、早速採集に出かけて行つたが遂にはたさず。ホテルの主人黒岩誠一郎氏の厚意で、その名もなまめいた姫石楠の一株づつを分けて貰つて納得したなど、いささか微笑ものであつた。

雨戸くる人なまめきて若葉かな 健 次  
何鳥か鳴き群れて飛ぶ若葉かな 同

水も滴らんばかりの緑の景趣に、白根山まで杖をのばす豫定であつたが、生憎の雪風に妨げられてはたされなかつたのは、遺憾千萬であつたが、然しそのおかげで草津の由來を知る事の出來たのは、かへつてよい收穫であつた。

お醫者さんでも草津の湯でも、惚れた病は癒りやせぬ —— 草津の湯もみ唄 ——

といふ湯もみ唄が、昔から普く人口に膾炙してゐる如く草津の歴史も又古い。口傳によれば、その昔日本武尊が御東征の砌、草津に足を止められた折、尊が畑の里芋の莖に躓かれて胡麻の木で目をさゝれたといふのが源で、以來草津では里芋と胡麻とは決して作らないといふ風習が生れ、それが今日に至る迄守られてゐると言ふことであるが、朴訥な土地の人々の心情が窺はれて面白い。その他日本武尊が碓氷嶺に着かれた時、遙かに東方を眺めて、皇妃橘姫の上を追慕され「吾妻はや」と宣うたと云ふ古事が日本書記に收められてゐることは、既に人の知るところであらう。後、建久四年八月鎌倉の覇者源頼朝が遊獵の際、この靈泉を發見し、ひろく温泉地として發展



させたいとの意から、土地の豪族細野幸久に吾妻郡一帯を與へて永遠に守らせる事にした。以來草津の湯は歳と共に世に知られて行つたのであるが、今日世界に誇り得る靈泉が、一代の武將と仰がれた頼朝程の人によつて發見せられたと云ふのは愉快なことである。當時頼朝が來浴したと云ふ事實は、曾我物語や東鑑にも見えてゐて、頼朝の入浴した湯は『御座の湯』と稱へられてゐたさうであるが、現在では『白旗の湯』として残つてゐる。

次いで文祿年間には豊太閤も來浴の意があつて『豊太閤温泉行先觸』などといふ先觸まで村々に掲げられたのであつたが、果さなかつたと云ふ事で、今も尙その先觸なる文書が残つてゐる程である。その後文化文政年間になつて、草津千軒と云はれる位に、繁昌を極めたもので戀病の外は癒らぬものがないと云ふ程に、その名聲が天下に響いたものであつたが、明治二年の大火災があつてから、後世に誤傳されてゐるのは、靈泉の草津としては遺憾であると云はねばなるまい。そして草津を知らぬ人が、草津とさへ云へば、直ぐに悪い方へ考へを走らせたがるのは、全くの誤解で、實際は草津特有の温泉情緒と云ひ、雄大な自然の風光と云ひ、まことに幽雅極まりなきものがある。だから一に温泉地としてに止まらず、避暑地としても輕井澤等に比して劣らないだけの嵐氣の儲かさがあるのである。

さて草津で最も興味深く思はれるのは何と云つても時間湯であらう。私も一度飛び込んでみたものだと思つて、先づ温泉の温度が一體どの位あるのかと、湯長とやら云ふ浴客の世話人に伺ひをたてゝみたら

『さうですな。熱の湯、鷺の湯で平常百四十七八度は結構ありますな』と云ふ話に吃驚。とても私のやうなのほせ性には、はいれさうにないと諦めたが、せめて見ておくだけでもと思つて、無理に頼んで時間湯の浴場には入つた。浴場に集つてゐた浴客は、合圖の鐘に肌着一枚となつて湯長の號令を待つ。やがて湯長の『オウーイ』と云ふ號令に、浴客一同でんでに持つてゐる板で節面白く湯もみ唄を唱ひながら、三十分以上も湯をかき廻すと、漸く百二十一度位の熱度に下る。そこで湯長の『オーイー』の號令に、各自手早く裸形になつて、爪先から一分ずりに湯槽には入るのである。さうして頸まですつほり身を沈めてから入浴時間が三分間。それより長くつかつてゐると體がたゞれてしまふのださうだ。それは酸性の硫黄泉なのだから無理もない事であらう。その上百二十一度の熱度ときてゐるので、全く貧乏ゆるぎも出来ない熱さであらうと思つた。ところが、私と共にこの態をみてゐた酔顏朦朧の黒石先生。いきなり

『俺もは入るよ』と云ふなり、どぶんとばかり熱湯の湯槽に飛び込んだものである。その無鐵砲



さには流石の湯長も度膽を抜かれた態で目を白黒。浴客のだけれども、あまりの事に呆然としてゐたが、ひとり黒石先生だけは、頗る上機嫌で『チョイナ、チョイナ』とうなつてゐる。『熱いでせう』と云へば、

『やあ、いゝ氣持ですよ』と、すましてゐられるので、その元氣には如何な私とても、到底足下へもよりつけない。全く元氣旺盛な鬚のヲヂサンだと敬服してしまつた。

しかし、かうして規則正しい湯長の號令の下に、一日三回乃至四回の入浴を續けてゐると、大抵の病氣は退散してしまふと云ふ話であつた。何にしてもその入浴ぶりがユーモアにとんでゐるので

「揃つて三分。改正の二分。などと湯長の熱い世話」などと云ふ都々逸が生れる程だ。なか／＼印象深いものである。

扱て我々一行でこの熱湯にとび込んだ豪の者は黒石先生只一人であつたことを明記して此稿を終らう。(藤田)著曰く。私を先生よばはりしてゐるのは藤田氏一人、他の者は呼び棄てにしてゐる

### 湯 も み 唄

春はうれしや降る淡雪のはだに湯花の香が高い

草津よいとこ夏來て見れば軒端近くに四季の花

錦おりなす野末を見れば晴れた淺間に煙立つ

冬が來たとて寒さを知らわかつしやひねもす湯に浸る

案じながらに草津に來たがお湯のきゝめで氣が替る

最初時間湯は涙で出たが今ちや湯長さんに手を合す

調子揃へて聲はり上げて板に合はせて唄ひませう

草津へ來た時やしほれて居たが今ちや時間湯の元氣者

右の唄は何れも來浴者によつて作られたものだ。

私達一行が泊つた旅館は前に記した通り大東館であつたが、こゝには同温泉細野館(前町長細野停氏經營)の規定を掲げて、草津へ遊ばんとする人々への便宜としやう。(以下は「草津の葉」に據る)

### 【宿泊料】

宿料は一人一日壹圓五十錢より參圓五拾錢迄の範圍で、別に一日十五錢づゝの湯錢を町役場へ納むる定めである。右は三食共單に飯と汁のみの計算で、副食は好みによつて別に調進すること



になつてゐる。副食の原料は山中と雖も草津鐵道の便に依る海鮮にも乏しからず、牛、豚、鶏、兎、川魚類、野菜類などで、水菓子類、菓子類も大抵ある。西洋料理店、球突等の設備は出來てゐる。盛夏の季もセルカネルの單衣用意の事。春と秋とは綿入の用意を願ひたい。

(地藏の湯元—細野館)本年細野館は自炊滞在客の便を計り間貸一人一日金五十錢位(食料を除く)

【温泉の効能】

(一) 劇症の粘液漏(例へば流漏性アブセス骨髓炎、脊髄カリエス、骨結核、骨膜炎、骨手術後の肉芽發生不良、腔膿漏、尿道、膀胱、氣管、食道の諸漏病涙漏、耳漏、痔瘻、糖尿病)(二)慢性加答兒(例へば各關節、粘液囊炎、淋毒性尿道炎、子宮内膜炎、卵巢、喇叭管炎、子宮周圍炎、辜丸炎)(三)梅毒性潰瘍、コンジローム等(四)頑固の潰瘍(例へば病院脱疽、子宮並に腔の癌腫性潰瘍、狼瘡、水瘡、肉腫馬鼻疽性潰瘍、一般壞疽皮膚結核性潰瘍等)(五)腺病ルイレキ一般身體軟弱等(六)惡液(七)粘膜樹の弛緩より來る下痢(八)慢性皮膚病(九)其の外ランドリー氏麻痺の後邊症、神經痛、リヨマチス、神經衰弱、ヒステリー、虛性出血書瘧症、偏頭痛、遺傳性小兒病、共働機障害、小兒麻痺等に有効である。(細野館)

【交通機關】

一つの線は東京上野驛乗車澁川驛下車澁川から中之條まで電車。草津まで馬車(三圓内外)で御越になるもよろしく、此道路には關東の耶馬溪と申す絶景がある。此道にも自動車が運轉する。又信州澁温泉よりする路もあるが、七里の峠は困難で、駄馬か駕籠の外はない。然し風致はなかなか面白く、途次白根の噴火口を探るも興味がある。また信越線輕井澤驛にて、草津輕便鐵道に乗換へられるならば左の通りである。

| 乗合自動車     |     |          |          | 電氣鐵道              |           |
|-----------|-----|----------|----------|-------------------|-----------|
| 上越線       |     | 信越線      |          | 信越線               | 輕井澤       |
| 澁川着       | 草津着 | 澁川着      | 草津着      | 後                 | 前         |
| 前         | 前   | 前        | 前        | 五、三、二、〇、八、七、五     | 五、三、〇、〇、〇 |
| 一〇、七、二、〇〇 | 前   | 七、五、三、〇〇 | 七、五、二、〇〇 | 五、三、二、〇、八、七、五     | 五、三、〇、〇、〇 |
| 後         | 後   | 後        | 後        | 九、六、四、二、二、〇、九     | 九、五、一、四、八 |
| 一、二、三、〇〇  | 後   | 九、七、二、〇〇 | 二、二、三、〇〇 | 九、六、四、二、二、〇、九     | 九、五、一、四、八 |
| 後         | 後   | 後        | 後        | 五、三、一、一、〇、七、五     | 五、三、〇、〇、〇 |
| 一、二、三、〇〇  | 後   | 一、九、〇、〇〇 | 五、三、〇、〇〇 | 五、三、一、一、〇、七、五     | 五、三、〇、〇、〇 |
| 後         | 後   | 後        | 後        | 九、七、五、三、一、一、〇、七、五 | 九、五、一、四、八 |
| 六、〇、二、〇〇  | 後   | 四、〇、〇〇   | 七、五、〇、〇〇 | 九、七、五、三、一、一、〇、七、五 | 九、五、一、四、八 |
| 六、〇、二、〇〇  | 後   | 二、〇、〇〇   | 二、〇、〇〇   | 九、七、五、三、一、一、〇、七、五 | 九、五、一、四、八 |
| 六、〇、二、〇〇  | 後   | 二、〇、〇〇   | 二、〇、〇〇   | 九、七、五、三、一、一、〇、七、五 | 九、五、一、四、八 |



# 千曲川

私達はこの山の湯の町草津を去り、草津軽便鐵道によつて、輕井澤へ出たのである。この道中記を同行者の翁久允が雑誌「現代」に次のやうに書いてゐる。

「白根の山雪を寒風が、烈風が、ひつ掴んで來て草津の頭にふりまくと言つたやうな、これが五月五日の桃の節句とも思はれぬ朝だ。大東館の庭の松の樹の下に池があつて、その真ん中から松の枝が滴りにぬれてゐる。その滴りが氷柱となつて垂れさがつてゐる朝だ。なんと合着の旅行者にとつて不幸な寒さだつたらう。が、「草津はいつもこんなぢやありません。今年は二三日前からこの時候で、どうも折角お出で下さいましたのに、どうも、いやはや」と有志の方達から慰められ、こちららは、何アに却つて印象が残つて佳いなんで、虚勢を張りながら停車場についたのは午後一時半。

『この軽便鐵道が烈風で顛覆したと言ふ記録はありませんか？』

全く吹けば飛ばやうな鐵道である。これに乗つて朝つばらから酔つてゐる大泉黒石。重量の點で聊か顛覆の危険に對して意を強うせしめる加藤朝鳥。さし向つての一升罎だから萬一死なば、も

ろ共の意氣。吹きまくる風に見

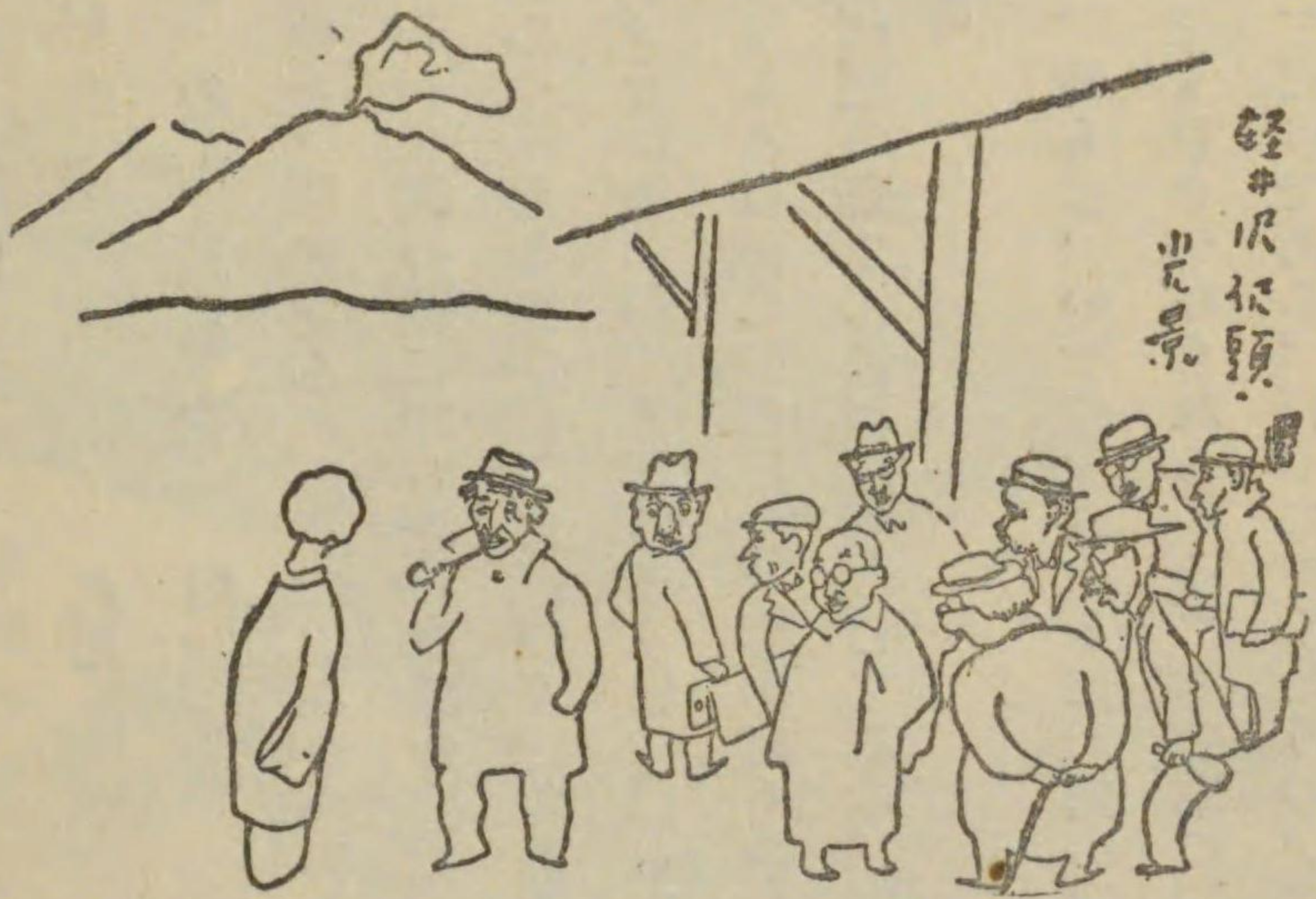
送りの有志男女の裾も露はだ。

『もう澤山ですから、どうかこれ  
れはお別れとしませう』

がた／＼の窓硝子を外して、

左様ならと言つても律義な人達は中々立ち去らない。粉雪が横から空間を撫でてゐる。

とう／＼左様ならで、動き初めた軽便鐵道だ。これに揺られる四時間半のこれからが思ひやられる。群馬の高原から、信州の高原へと走りゆく、この前世順々に虹の焔だ。伸一までがローマンチストだと言ひ出す。彼は然しながら車窓から瞬間の風景



紀の大蜥蜴かなんぞの

やうな怪物の中に、夢

二を中心に色つほい思

ひ出話が、野次半分に

飛び出す。

『僕はローマンチスト  
でね』

なんて眞顔で、そして夢二式微笑で、波に揺られる船の中のやうに、腰をがつくり／＼させながら、大泉黒石の方から廻される盃を



をスケッチしてゐるのだ。烈風はもう止んで、唐松の林が漸く黄色い芽を出して高原を走る。走  
る。のろくと走る。山櫻が丘のあちこちに。

海を抜く四千尺の山櫻

久允

浅間山の裾の農家の木瓜の花 同

夕陽が妙義の刻まれた姿に色を塗る。櫻井さんは高原の山を野を谷を説く。黒石は三等室の空  
なるにつけ込み、そこで横はる。やがて軽井澤に來ると、高原の文化町が遅々たる永日の薄暮の中  
に浮いて來る。と、停車場で孔雀のやうな美婦が夢二に近づく。北國の橋犬のやうなあとの九人  
の男達、まばゆしげにロマンチックな繪畫の側でも通るやうに、薄ら寒い高原の停車場の方へ。  
やがて四十分の待合せに向ふの横丁のそば屋に飛び込む。蟻の残りをひつ下げて來た、これは黒  
石でないかと寫らない。それが、そば屋の婆さんにお燗を命じてゐる。美はしい人への紹介が初ま  
る。夢二の言葉は千曲川のやうだ。

長野ゆきの二等車は空いてゐた。彼らは、いや僕達は、まだ何處へゆくかわかつてゐないやう  
な心もちで、何かまたるゝ運命にでもひきつけられるやうにその車に飛び込んだのだ。  
ゆくところを知つてゐるものは夢二だけである。行つてどうなるのか、それもわかつてゐない。



← 白根山噴火口

↑ コマクサ

→ 戸倉温泉

浅間山 →

→ 千曲川



「われはたゞ、ゆかんが爲めにゆくのだ」

西の詩人の歌つたやうに。

と、隣の三等車室から、ちん／＼どん／＼の鉦や太鼓の響き。ドアを隔て、ちらつく。田舎婆さん達の一行が騒いでる。同勢二十人餘りの善光詣りと見受けた。

黒石は千鳥足をそこに向けると間もなく話がついて、婆さん達が二等車にのり込んで来る。千葉の銚子のおのほりさん達だ。三四人の婆さん達が聲はりあけて唄ふと、面を冠つたのや、手拭の姉さんや冠りの五六人の婆さん達が、手拍子足拍子そろへて、こらく／＼と踊る。跳る。

三等室から、どや／＼と見物人が来る。唄ひ好き踊り好きの水木伸一は、婆さん達の鉦の音に拍子を合はせてるのも面白い。一杯機嫌になればチャールレ斯顿を踊り出す麻生豊も、相手が相手なので飛び出さない。わが黒石は有頂天になつて手を叩く、感嘆詞を投つける。夢一の寫生が初まる。

汽車が小諸に来る頃、夜は信州を捲き初めた。お城の邊り、晩春のなやましげな灯の色も旅情に逼る。歸りには藤村の詩碑を見てゆかうと安成二郎が言ふ。いつの間にか姿を失つた高原の孔雀婦人は、知らぬ間に沓掛で下車したと、あとから聴かされる。(著者曰く。久允のしよけくやつたら!) 戸倉の夜だ。八時だ。温泉笹屋ホテルからさし向けられた自動車で、「このさきは川中島」だと



古戦場を教へられながら長い橋を渡る。山國の道を通る心もちが通る。

笹屋ホテルの入口からして、何となく都に近いと言つた感じの、その明るい庭さきで、靴を脱いた時、長い旅を終つたと言ふ喜びがわれらの疲れを忘れさせた。

温泉に浸つて、そして赤いお膳に對して、戸倉美婦の手のさきから流れ出る黄金色の温かい水を、飲み渴いた喉につき込んだ時、大泉黒石がぬけた齒の奥から迸る笑ひ聲も春めいて來た。

戸倉禮讚！　そして戸倉踊りだ。あとは竹久夢二の筆に譲るとしよう――。

岩間逃げ水　ひそく／＼小みちヨ

木の根草の根　わけて來て

さゞめき合へばヨ　うわさ末廣千曲川

ホイのくくく／＼ヨサホイのホイ　シヨコホイ／＼／＼

○

宵のむつ言　ほろく／＼河鹿ヨ

戀のすがたの月見草

湯の町戸倉ヨ　うわさ末廣　上山田

湯の香日暮れて　さら／＼流れヨ

浅瀬渡立つ　戀はふち

身も更科にヨ　うわさ末廣　月田毎

○

千曲河原の　すい／＼ほたるヨ

湯の香く／＼つて　また光る

川中島にヨ　噂するひろ　越路まで

○

戀のかけ橋　ほそく／＼ともしヨ

千曲渡れば　湯の香まち

わき立つ思ひヨ　噂するひろ　年々に

○

千曲河原の　夜な／＼戀路ヨ



わたしやむだには 通やせぬ

更科手古奈ヨ 噂するひろ 戀は意地

○

たぎる湯水は ひそく地底ヨ

湯みちつくまで わきやせぬが

燃え立つ戀はヨ 噂するひろ色に出る

(不如丘氏作)

さて戸倉温泉の翌日と翌々日のことを、同行の竹久夢二は次のやうに「現代」に書いてゐる。  
『それぢや失敬するよ。よく眠つてゐるなア』うつらうつらと千曲川の堤を歩いてゐるやうな心  
持で、さう言ふ聲を遠くに聞いた。早立ちして東京へ歸る翁久允と麻生豊の連中だ。こちらはま  
たうつらうつらとやつてゐる。ゆふべ三時頃、東京へ歸るから車を呼べの、細君に逢ひたくなつ  
たのと駄々をこねてゐた大泉のことが氣になつてきて、うつらうつらを中斷して、顔をあけて見  
ると、大泉は腹ばひで空になつたチェリーの箱を振つてゐる。

『やあ、素晴らしい天氣だね、今日は』

『おはよう』と上機嫌で彼が答へてくれたので安心する。水木伸一が眼をさまして

『加藤君は?』と昨夜の話から思ひついてきく。

『長野市へフロックコートを着込んで出掛けたよ。ははは』

『講演會の交渉か? 講演はいやだな』

藤田、安成と起き出て今日は五人。

笹屋ホテルの若主人修ちゃん、静かな室へと言つて庭の見える離座敷へ、湯から上つた一行  
を招する。

『長野市の講演はお決りになりましたか?』

『まだ決らない。みんな戸倉が氣に入つて動きたくないらしい。長野の方は斷るつもりだ』

『それは結構です。いま戸倉村青年會の會長小林君が來まして、青年會と處女會のためにお話を  
して頂きたいと言つてますが』

『大泉君どうです。處女會のために産兒制限論でも一席辯ずるか』

『ウン信州の青年は盛んに自然科学の本をよむさうですね』

『さあ、南信の方は思想的なものが入つてゐるらしいんです』

そこへ小林君がきて『座談の夕』をやることにきめた。同勢散歩に出かける。



『どうもこゝの景色は纏らない』さう言つて水木は寫生帳を擴げてゐる。

『さうだね。この堤なんかまさに森田恒友だね』

『さうだ。自轉車に乗つた人物と百姓が立話をしてゐると言つた風なところがね』

『姨捨山はあれだつたかしら』と、ほくが鉛筆で指す。

『さうです。この前正木不如丘先生といらした時、あの麓を通りました』

『あゝさうだつたね。あの時の婦人に輕井澤で逢つたよ。正木君も輕井澤であの人に逢つたさうだが、偶然といふものは小説ばかりぢやない。實生活にも偶然がふんだんにあるものだね』

『何だか込入つた話らしいね』

『正木不如丘作小説「千曲川」の實説なんだから込入つてゐるんだよ』

大正橋詰で鮑を捕るところを見にゆく。實は數日來の寒さのために、半尾も網に入らなかつた。網を入れる前の漁師の、あの姿勢と氣合と、そして眼つきの鋭さは收穫だつた。

『網を入れる前の眼を、傍で見ると、まるで魚が見えるやうだね』

『見えやしないが、感でわかるよ、居るかゝるかい』

魚が居ないと知つても、遠來の客のために氣を入れて網を打つてくれた漁夫の心ばせは愉快で

ないか。

すぐ夕方きた。人の前で鹿爪らしい話をするこの好きでない此の連中は『座談の夕』の間がくることを、内心幽鬱に感じてゐた折なので、あんまり早く『座談の夕』が過ぎたのだ。

『ほくはアナキストの話しようかな』

『辯士中止になるやうな話はしない方が好いよ』

『だつて、まさか忠君愛國の話をする柄でもあるまい』

『先生は何か女の流行の話でもして下さい』

笹屋の若主人がいふ。

『流行の話だつて、こいつもほくに話させたら矛盾だらけで、結局社會組織云々までゆかないと話はまとまらなくなるよ。斷髪の娘もほくは好きだし、農民手藝の縫取をしたお高祖頭巾の娘も好きなほくは、帝政時代へ時代を返す主張をするだらうと思ふ。忠君愛國の話は安成二郎君に譲つて、ほくは旅の話でもするよ』

『ほくは食人種の話をするつもりだが、どうだらう？』大泉黒石はノオトと酒徳利を前に据ゑてゐる。『どうもかう急なことでは困るよ、田舎の青年だつて馬鹿には出来ないからね』



『案外ほく達は正直者だね。どうかすると田舎の青年達の方が、世ずれてゐるかも知れないね。こんなことで幽鬱になるなんて』

『さうだよ。これが政治家とか教育家とかなら風向き次第な教訓談を平氣で話すだらうが、うそは言へないし、本當のことも言へないし、ね』

『馬鹿らしいよ。幽鬱になんかならないで、將棋でもやらうよ』と水木伸一が安成に水を向ける。  
『よし、まだ一時間ある』

『君にはまだ一時間でも、ほくにはたつた一時間だ。夢さんもう一本こいつを貰つても好いかしら』と徳利をほくの方へ持ちあけて見せる。氣の利いたお藤さんが徳利を持つて入つてくる。

『やあ、お藤さんは純真で好いなあ』

すぐに『座談の夕』がきた。迎ひの車で會場の小學校裁縫室へ来る。集るもの無量二百數十名。僅か三時間ほどの間の宣傳としては大成功だ。

ほくが皮切りで『旅の話』だ。まづほくは會場を見渡して

『こんなに席の前の方が空います。お嬢さん方もつと前へつめて下さい』といふ言下に、娘達は直線のやうに立つて、ぴちりと空席をつめた。まづほくはこの訓練された運動に勵まされ、

豫定の十五分序曲を四十五分話してしまつた。それほどまた自分ながら話が愉快だつた。しかしそれほどまた自分を語りすぎ、あんまり本當を話すぎた。つまり他人の事のやうに身の上話をしてしまつたことをして聴衆と共に笑つた事が恥しくなつたものだ。安成、水木、藤田の順に信州の文人の話。老子の話。なんにも話さない話を終へて、大泉の食人種の話だ。

『かうい講演會は初めてで有益でした』

と小林君のいふのは本當だらう。なんしろ、つまらない話だけれど、これほどみんな本當のことを言ふ講演會はないだらう。宿へ歸つて青年有志の招待で簡素な、しかし篤實な宴を催して夜の更けるのも忘れてゐた。翌日は楓の影が疊へ落ちる頃、靜かな朝餉をして、東京へ歸ることにした。知己へ繪葉書を書送る。ほくも一枚自分の家へ而も自分に宛てて書く。『あんまりお調子に乗りすぎるなよ。田舎の人は金は大事にするが時間を粗末にすると、お前は言つたが、お前も田舎者になつたぞ。山も好きが街の仕事を忘れるな』と。

一行は藤村翁の詩碑を知らないといふので小諸で途中下車。小雨の中に山櫻が散つてゐる。懐古門の傍の、茶店の少年畫家を一年ぶりに訪ねる。そこでまた繪葉書のよせ書き。汽車が妙義の



山峽を過る頃の山の美しさ。子供のやうに窓から喜ぶ。東京が近づくに従つて幽鬱になつたのは、ほく一人ではなささうだつた。

「俺は家へ歸りたくないな」とほく夢二。

「どこか東京の街へ泊る？」と安成。

「それも考へりや怡しくはないしね。まだ君達のやうに厄介な細君でもある方が好いよ」

讀者よ。こんな私情に渉る文章を許したまへ。とにかく我々一行は東京へそれぞれ歸つた。(夢二。)

千曲川戸倉温泉

黒石

信濃路や鶯老いて丙穴魚賣り  
嫌はれて花になりけり野芹哉  
俳詣の味はこれかや草のもち  
静けさや湯壺にうつる朝の月  
この宿のふるまひ酒や露の臺

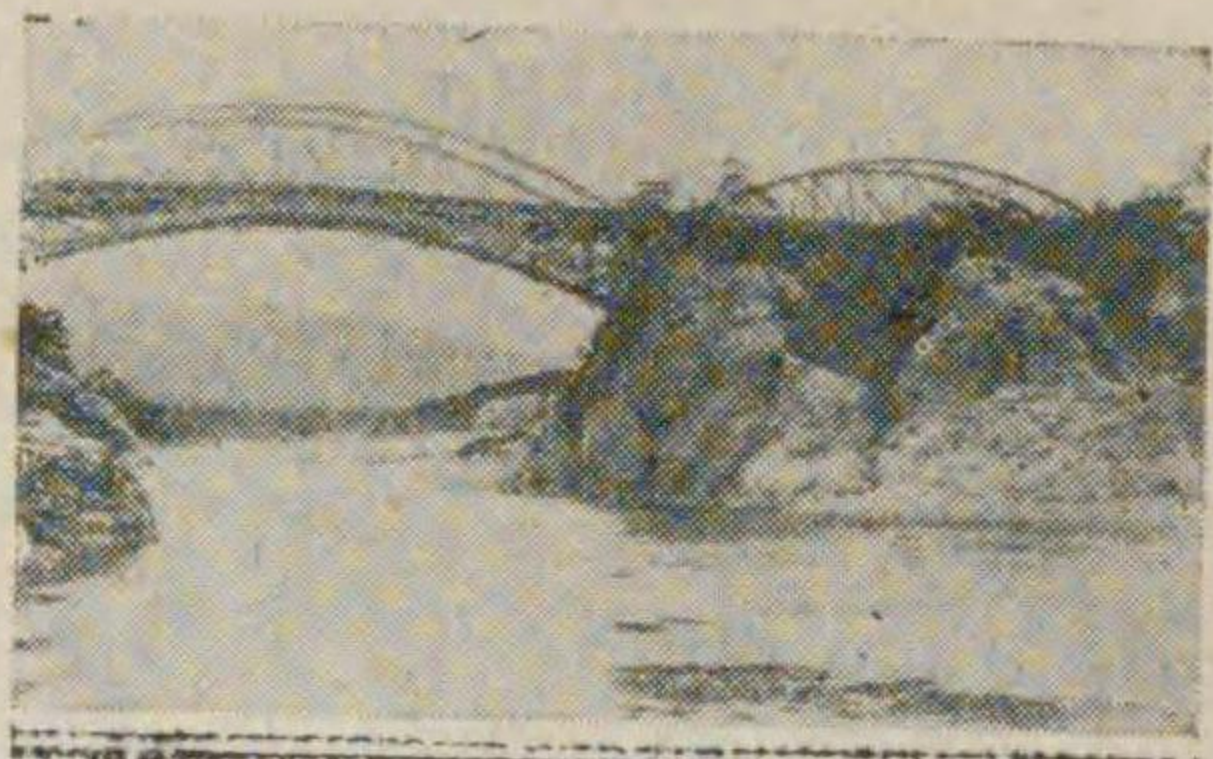
光琳のゆめや霞のわかつくし

(菅屋ホテルにて)



# 鬼怒峡谷

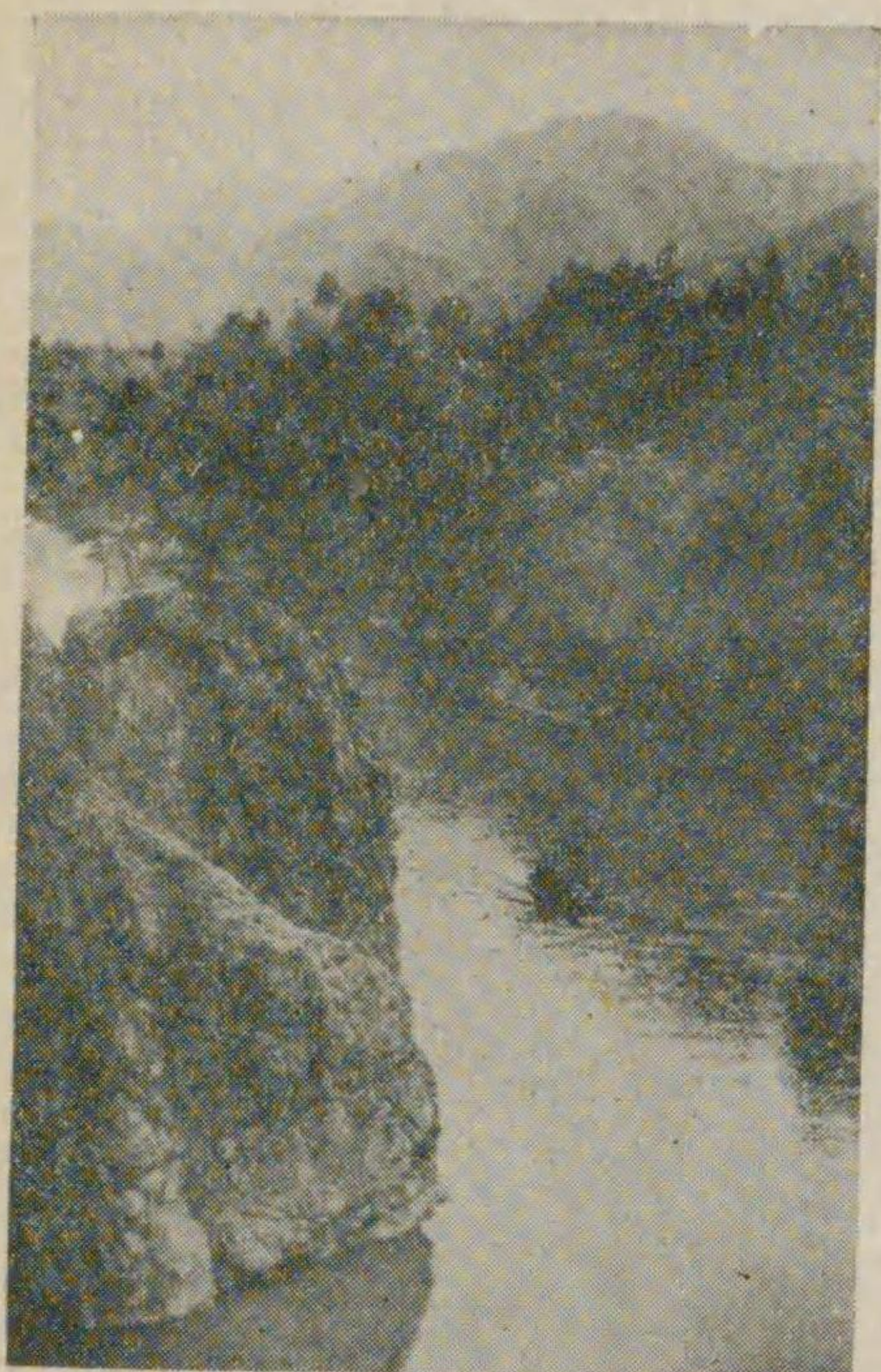
正に十一月十一日の眞晝なりけり。日光は小倉山麓に横たはる松屋敷の松の蔭より、二臺の自動車に分乗して繰り出したる同行七人、及び自動車の持主であるところの金谷ホテル主人・ミスター金谷。御大禮のお祭りで、わっしょ、わっしょの今市町を貫ぬいて掛る會津街道杉並木。颯たる秋の風を眞向に喰ひながら、倉ヶ崎の古戦場を掠めて、大桑の宿落を突きぬくれば、遙かの霧降瀧より馳せ来る水あり。乃ち板穴川といふ。那須山脈を背に負ひ、日光連峯と高原の支脈に圍繞されてゐる鬼怒沼に源を發し、十里の谿谷を流れ下るもの。世に『下野の耶馬溪』と申す鬼怒川峡谷は、もう此の邊から、そろそろ、姿をあらはさうといふのだ。此の板穴川を渡つて中岩驛を過ると、いきなり出會した碧い潭、その中央にひねくれ曲つた矮松の髪を蓬々と生やし、魁然と頑張つてゐる巨巖。こいつ、六七十尺もあらうか。それを足場に二連の長橋が架かつてゐるのだ。その橋を渡りかけて、自動車の上から溪流を見おろすと、正直、眼もくらむばかり深い



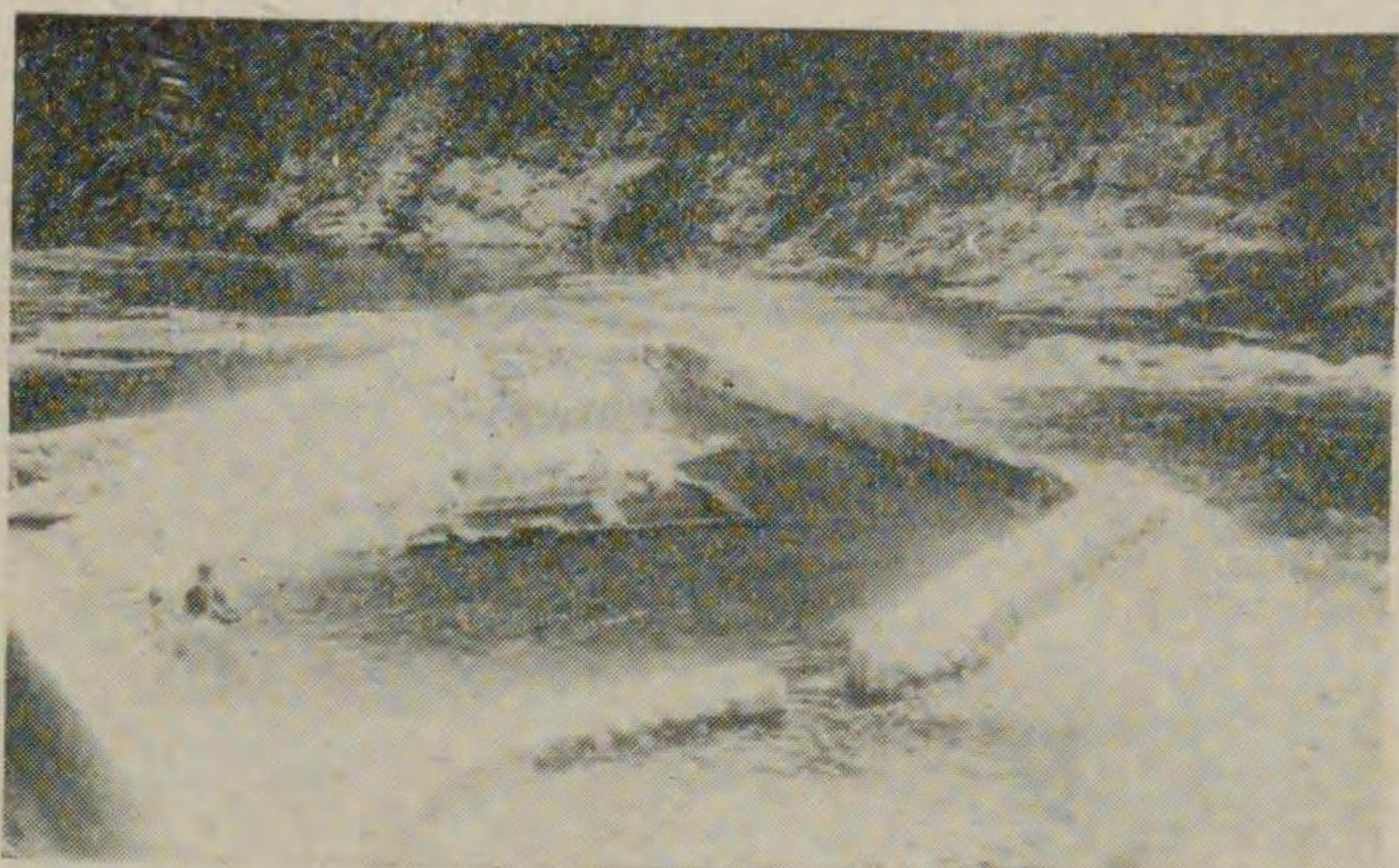
→中岩橋



→虹見瀧



↑鬼怒溪谷



→鬼怒峡中の温泉(下瀧)



壑をなして、兩岸にそゞり立つ絶壁の脚を洗ひ行く水。微瀾の影。靜かに秋光を含み、壁を沈めて、悠悠迫らざる趣がある。いかにも幽麗だ。後で聞くとところによると、これが中岩といふ鬼怒の一奇勝でこの橋から下が、即ち關東平野を蝸りまはる鬼怒川。支那人の、いはゆる江水東流萬里長しといつた理窟になり、この橋から上の方に於て、わが峡谷はその眞骨頭を天下に示す寸法になるんださうだ。『鱒と鮎が獲れます』と案内書に謳つてあるのは此の邊らしい。つまり此の『中岩』が峡谷の關門にあたるのである。さて此の邊から舟を泛べて溯るなら、眺望に申し分はなからう。また徒歩でも妨げないやうに思はれるが、しかし乗物で行くと、對岸の高徳驛からは溪流に沿ひながらも林間の砥道に入るので、折角の妙景もちよいちよい眼界から逃げ去る。逃げ去つてはまた飛び出すといふ風だ。つつかゝりの小佐越の吊橋から『美しの松原』へわたる界限を『鬼怒の長瀨』なる名前で呼ぶ。『清涼溪』のやうに、流沫輪をなして遙々と下るのが、松や雑木の間から、ちらちら見えるだけでは口惜しい。けれども此の林間を縫ふて走るにつれ、道の左右から岨まり逼る山巒の風光に至つてはまた格別であつた。澄明な秋宵に割線を描いて連り聳える山や峯が、たゞ一色の赤ではなくて、霜に焼けて行く樹々の種類により、處斑に朱を纏ひ、紫に染まり、茶を繚かんで恰も紅焰を飛ばし、黄霓を吐くやうな異彩を放つてゐる。山一めん峯一ぱ



い絢爛たる文身を以て濃厚に飾られてゐるのだから、みんな呀といった。驚かずんばあるべからざる異観！

『やア、どうだ。あの複雑な肌の色彩は！』

と蒼然たる鬘をふるつて、愚老庵の目を丸くすれば、傍らの福田正夫子が車の上に跳び上つて絶叫すらく

『絨氈でもオツかぶせたやうぢやないかッ。』

『つゞれの錦だ！眩光煥發！處々に肋骨が露出してゐるのは、さらに奇絶だア。妙々！』

骨ばかりの福田蘭童子が横合から手を拍つて喜んだやうな有様だつたが、骨といへば、その骨がくわつと燃えたつ葉炎の中から、稜々とあらはれてゐる『楯岩』の怪姿を、水車ノ瀧の向岸に見つけたとき、骨好きな蘭童子の歡喜は、宛ら百年の知己に巡り會つたやうだつた。その楯岩の風貌骨格が九州の耶馬溪で例の法螺吹き先生が、手に持てるところの筆を擲つて、三嘆九嘆したといふので筆投げの松と稱する巖に酷似してゐるのも面白い。餘計な心配をするやうだが、これは何う見ても餘り楯らしくない恰好の岩だ。楯といふ字は立岩の立といふ字が轉訛したのではあるまいか？ 恰度そのほとりの山の天頂から、電氣を起すべき水を、山嶺の水漕から放下する數

條の大鐵管が段々に屈折して直下したものだ。自動車の青襟子に伺ふと、この手前にも先にも同類の發電所があつて、六千餘りのキロを出し、東京市の軍車を毎日走らせてゐるんださうだ。さては此奴が時々東京の電車を止めて、勤人を泣かせるのかと思つてしみじみ仰ぎ見た。『近代文明の根幹をなす科學の根據地たる地の利を占め、あらゆる型式を網羅して數ヶ所に數萬馬力の大發電所を有し、これが見學研究もまた徒爾ではありません。』と案内書には辯じてある。くれぐれも承知してゐる。尤もなお説だが、どうもその科學と自然美とは反が合はないと見えて、一向ぞつとしない。かゝる仙環の風致にとつて、寧ろ目ざわりになること夥しい代物だ。それは鬼に角、こゝから三四丁ばかり登ると『風穴』へかゝつた。

會津街道に面する崖の横つ腹に洞窟があつて冷風放出すとある。夏は非常に愉快ださうだが、今は冷風でもあるまいから、そこへは立ち廻らず、眞つ直ぐ下瀧温泉に向ふべく鬼怒川温泉驛で自動車を棄てた。乗りつゞけても行けるのだが、こゝから谿底へ下れば湯が涌いてゐる。湯に浸つて、われわれは又、日光へ引返さうといふ段取だ。そもそも日光見物の旅客といへば、日光を觀てしまふと十人が九人まで、もはや杖を曳く處がないものゝやうに宇都宮方面へ引揚げてしまふ。それが常例だ。いづくんぞ知らむ。日光より四五十分でお目にかゝれる場所に、かくも雄魂



神秘の大谿谷と、この下瀧の温泉に始まる幾多の温泉郷があるのである。曰く。川治。曰く湯西川。曰く。川俣。曰く。八丁の湯。曰く。湯元。その間に『幽翠峽』観音瀧。虹見瀧。材木岩。兎跳ね。五光岩。白岩。『紅葉峽』削岩橋。出土瀧。赤川瀧。而して世界唯一といはれる噴泉塔のあるに於てをやだ。(章末参照)これらの仙境と靈泉とは古來から知られてゐないわけではなかつたのだが、如何せん、交通の便よろしからず。道路險惡であつて、宿屋の設備も充分でなかつたために、こゝへ訪れる者は此の附近の人その他一部の旅行家に限られてゐたらしい。が、この峽谷沿岸の道路に手を入れて、下野電鐵會社の電車が通じたり、自動車が行つたりするやうになつてからは、宿屋の方でも面目を改めて來たので、峽谷の名は次第に有名になつて參つたわけだ。春はよし八汐のつゝじ。椎茸。夏はそれ舟を泛べて流れに釣らむ。秋の風物は只今の通りで、冬の趣向は専ら山鳥小鳥の獵や雪見酒などは優しいが、熊狩りは勇ましいやうで怖い。既に世界的の公園日光を前に扼し、鹽原温泉を後に控へて、しかも是ほど壯麗な山姿水容を持つてゐるからには、必ずや近い將來には民衆的大温泉郷となるに違ひないと思ふ。われわれが此處に押出して來たのは、己の快樂を食らうがためのみでない。ここに御覽の通りの美しき大自然が横たはつてゐる、といふことを遍く天下に吹聴せんがためだ。誰に頼まれたわけでもない。道樂だ。御

苦勞さまな話だといはれても道樂だから仕方がない。たゞ、われわれは是から日光。湯元。宇都宮から鹽原へ廻ることに決つてゐるので、折角の溪奥まで溯る時日に乏しく、この下瀧から退却せねばならんのが恨めしい沙汰である。されば、霧の雫にしつとり濡れて深い老樹の色づきたる苔の小徑をだらだら下る。途中に恐ろしく高い鐵橋がある。橋欄に凭つて瞰下する谿底や大瀧の景は就中印象の深いものだと思ふ。歸途には此の橋の上で油繪を畫く紳士と、その間にイめる妙齡の美人がゐるので、そちらに氣をとられて觀なかつたし、往は駈けぬけの、一散に岸向ふへ渡れば、山は忽ちにして巡り、道は轉じて幽邃な林のふところから颯と落つる瀧の飛沫！

跚めき進む突當りに麻屋と申す湯の宿ありけり。われわれが一休みしようといふ家だ。右は谿谷。ぎりぎり決着斷崖の腹に翼然として孤立せる百尺の高樓とある。われわれに先立つ一步。宿の玄關に立てるは下野電鐵の今市營業所長金子留吉氏であつた。こゝに到來する我々に一餐を供したる後、同會社の電車で今市まで送るべく待つてをられたのだ。「やア。私が大泉です。足下が金子さんですか？此度は大層御厄介をかけまして」云々。一應の挨拶が面々に片づいた處でホツとする。と、俄かの寒さ。疲れた五體に鬱氣迫つて、肌も冷え冷えするのだ。風邪でも引いては往生といふたもんだらう。何は兎もあれ、一浴び浴びて温もるに如かず。宿の温袍に着替へ



て、ぞろぞろ、と旅亭の畔から懸涯の急徑を危つかしく、蹠めて谿へ下れば、さても奇なる哉。そんな景色。峻嶮きはまる灰白色の岩と岩とが、肩を怒らし、肘を鋭くして相闘ふさまの凄じく、呀がとばかり、あちらにも此方にも數限なく崢嶸してゐるのである。その岩に打ツつかり打ち碎けて流るゝ碧湍の色。紅葉を映して愈々美しい。ここに虎豹の蹠る態。巉巖の間から、もやもや立ちのほる湯氣の香の怪しげに靡き漂ふて仄かに鼻を撃つ。天然の浴槽は千人風呂といふのが、それだ。面白い場所に噴出したものだと思ひながら、石上に温温を棄てゝ足を浸けると少しぬる加減、だがまゝよ、滑らかな石に尻を沁らしてジャブリと入れれば底は砂地だ。續いて一行の藤田健次子が割込む。湯の苔をかぶつて、ぬらぬらした岩縁を枕に横臥さりながら、湯氣の彼方に目をやれば、いづれ、この山峽の者に違ひない。岩陰の窪たまりに、頓まで漬つてぐうぐう眠つてゐる爺さん。その傍らに、孫娘らしいのを抱いて悠々と茹る婆さんがゐた。この閑朴氣樂な光景を眺めながら、翁六溪子と竹久夢二子と相列んで考へてゐる。翁六溪子の曰く

『微温さうだね？』

『何。暫く浸つてりや。體の芯から暖まつて額面から汗が出るんだよ。早くお入りよ。』

『まあ止さう。旅宿の内湯は熱いさうだから、その方にするわい。』

と六溪子。夢二子は漸く引揚げる。藤田子の曰く。

『微温くつても暖まるのが温泉の靈妙なころサ。あの婆さん、赤くなつてゐるのが證據ぢやないか微温いのが問題ぢやないんだよ。』

『違ひない。あつはつは。』

と愚老庵わたくし。果せる哉。しばらくすると、これも此の山中の住人らしい。樵夫の娘か。いや、何うして、さやうな品でない。十八九の『峽間の姫百合』が、忽然と天降り現はれて、羽衣を脱いで岩に打ちかけ、どぶりと踊り込んだのである。いや。これはしたり。湯の中の石の上に、ふわりと人魚のやうに、のしかゝて腹這ふやら、びちりと湯沫を跳ねて寢返るやら。遂には、すらりと立ち上つて、桃いろに色づいた豊艶無双の驚ろくべき肉體を、白日の光にさらしながら、はるか青空を打仰ぐ天真爛漫の姿をあらはしたのである。高原山の猿も見物に來た。何條！旅亭の浴湯の格子窓から、この體を見て、わつと地團太ふんで口惜しがつたのが、他でもない翁六溪子を筆頭に夢二子。麻生豊子。いゝ氣味だ。

『な。な。何だ！おい娘。何故もつと早く來ないんだ！』

『失策つた！微温くても入つてりやよかつたね。』



『おゝい！ 姐さん。此方を向きなよウ。』

悲鳴は谷神が夕睡の残夢を驚かし。湯漕の中は大海嘯の、すつたもんだ。よほど残念であつたと見える。湯あがりの爽快な氣分で、馳走の酒が始まるまでも、この六溪子ばかりは、未練たつぶり、忌々しい顔つきで、二階座敷の欄干にのしかり、谿底の湯を瞰下してゐた。名物は藕つづみの甘煮とやら。菊花の酢の物。椎茸の汁。主客ともに陶然、饒舌ること一類。獨り愚老庵やうらくの立つて、醉顔を峽山に向くれば、黄ばめる、紅づける深い樹蔭の險阻な路を、一人の乙女が背に薪を負ふて登る。その後から一人の樵夫が、頭には檜笠。腰には山袴。荒繩の帯をしめ、鉈刀を差して、攀ち登る姿が微かに見える。寂なる鳥の聲。

『あれは何ですか？』

『山鳩でございます。』

と、傍から、お房さんと申す、この宿にはチト勿體ない十六七の女中さんが教へてくれた。この一行が今市へ引返したのは夜だつた。

【附】 下瀧温泉より上流の沿道にある名勝史蹟を鬼怒川保勝會で編輯した案内書によつて此處に記すならば左の如きものである。

【大瀧】 鬼川温泉驛より約七町。鬼怒川本流中に在り。危岩兩崖に聳峙し、飛湍の狀恰も半月形をなし水聲簌々として飛沫四邊に散亂し衣袂爲に濡ふ。岩に攀ちて之れを見れば一大壯觀である。

【太閤下しの瀧】 新藤原驛より二十町。箒澤より四五町。直下七十尺。觀音瀧とも稱し春は山櫻雪の如く之を彩り西岸の八汐花之に映じて秋の紅葉の美と共に瀑布を裝ふ。

【鶴遊ばせの瀧】 新藤原驛より十五町箒澤より一町、直下六十餘尺「虹見瀧」とも稱し、對岸八汐の花と紅葉の美とは峽谷屈指の觀賞地點である。

【藤原公園】 新藤原驛より約三町。設備未だ充分ならざれど鱒鱒化場ありて散策によし。

【清隆寺】 新藤原驛より二町。藤原村宇宿の内に在り。文永二年日蓮上人此地に駐錫し自ら坐像を刻し六字の曼陀羅を書して殘す。

【兎跳の奇勝】 新藤原驛より二十町箒澤より四五町。鬼怒川の兩岸巨岩蜿蜒起伏する十數町。蓋し急流の浸蝕著しきもの其の最も狭き處を兎跳と稱し廣さ僅に丈餘に過ぎず。

【五光岩】 兎跳の下流四五町に在り。内空虛にして四五十人を容るゝに足る。落日斜に洞口より岩壁に映じ、其の光輝五色の美觀を呈するを以て此名ありと云ふ。

【高原山】 海拔六千尺の休火山にして日光連峰との間に鬼怒峽谷を挟み、關東平野の一角に聳



立す。藤原より山頂迄約三里半山腹を過り湯本温泉に至る約五里、山麓一帯の地は有名なる狩獵地にして、小鳥、山鳥、雉子、兔、鹿、熊の獲物がある。

【鬼怒沼】川俣温泉より約三里。鬼怒の積に或は林道に瀑布奔湍深淵激流を避けて進めば途中官設の小屋を有する八丁の湯があり日光澤温泉の遺跡がある。かくて傳説に富む鬼怒沼の南端に達する。四圍は針葉樹の密林に包まれ二十内外の池が點在する美しい濕原である。礫石楠花、姫菖蒲其他お花畑の美觀は言ふを要せず、浮島の固定せるもある。池水は何れも淺く清く平素は互連絡なきも、大雨或は雪解に際し順次下方に流溢し、原の南端から鬼怒川の源流なる日向恐し澤にの急瀨に落る。

【湯澤噴泉塔】川俣温泉より八丁の湯に至る中途一溪流を南に進むこと數町(鹽谷郡栗山村大字川俣字湯澤)に在り。炭酸石灰を含める温泉噴騰し、其噴出口の周圍に沈澱物堆積して石筍の如き形狀を成す。高さ七尺世界有數のものと稱せられ近時内務省より天然記念物に指定せられてゐる。

【旅館と交通機關】旅館は清潔本位、親切第一を標語とし、懇切丁寧にして、最近温泉組合の組織成り、宿料、晝食料、其他諸物價に至るまで統一され(宿泊料金壹圓五拾錢以上晝食料金七十五錢以上)安易なる逗留を爲し所謂家族的に温氣泉分を養ふに足るべく團體客、家族連れ

の清遊客を特に歓迎する。

從來の旅館及建築の完成したるものを列擧すれば左の通りである。

|       | (位 置)           | (浴 場)        | 自炊設備 | (交通機關)            |
|-------|-----------------|--------------|------|-------------------|
| 近 江 屋 | 下野電鐵、新藤原驛より二里   | 家族湯          | 有    | 今市より六里、電車自動車、乗合馬車 |
| 麻 屋   | 下野電鐵、鬼怒川温泉驛より二丁 | 内湯、貸切湯千人風呂   | 有    | 今市より四里電車、自動車      |
| 大 瀧 館 | 同 一上丁           | 内湯、貸切湯林間瀧の湯  | 無    | 同 上               |
| 星 野 屋 | 下野電鐵、鬼怒川温泉驛より二丁 | 内湯、貸切湯河床天然浴場 | 有    | 今市より四里電車、自動車      |
| きぬ川館  | 同 二上丁           | 内湯、貸切湯河床天然浴場 | 無    | 同 上               |
| 柏 屋   | 下野電鐵、新藤原驛より二里   | 浴場建設中        | 有    | 今市より六里、電車自動車、乗合馬車 |

前記温泉旅館の外旅館營業者左の如し。

(藤原所在) 井桁屋旅館、朝日屋旅館、桶屋旅館、  
(高原所在) 豆腐屋旅館、新泉屋旅館、榊屋旅館

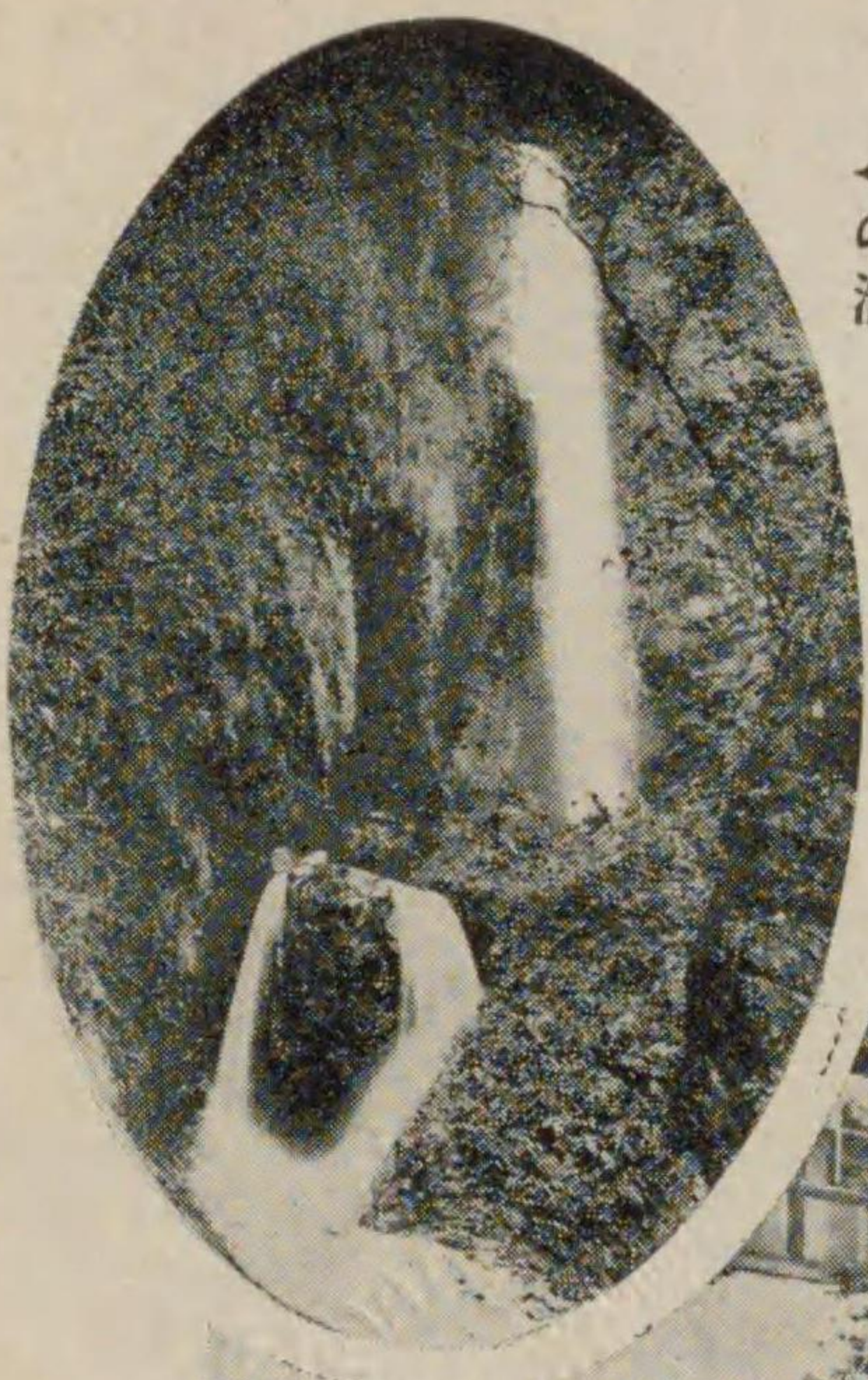


### 交通機關及賃金と時間(注意 省線上野、日光、白河方面と下野)

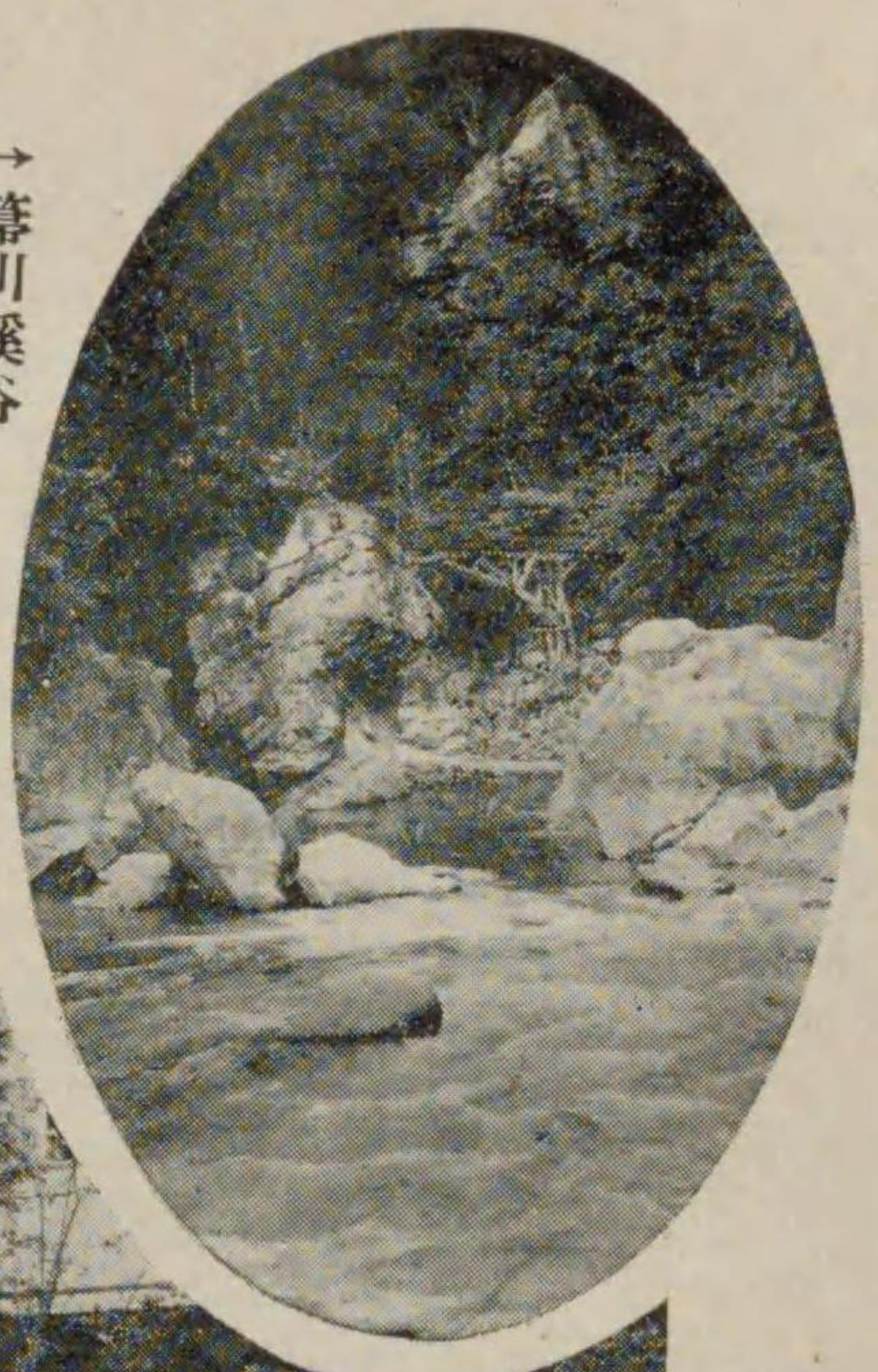
|              |                |          |        |
|--------------|----------------|----------|--------|
| 上野より鬼怒川温泉驛迄  | (汽車、電車)        | 金貳圓五拾參錢  | 四時間半   |
| 日光より鬼怒川温泉驛迄  | (汽車、電車)        | 金六拾參錢    | 一時間    |
| 新今市より鬼怒川温泉驛迄 | (電車)           | 金五拾錢     | 五十分    |
| 今市より鬼怒川温泉迄   | (乘合自動車)        | 金九拾錢     | 三十分    |
| 上野より新藤原驛迄    | (汽車、電車)        | 金貳圓六拾貳錢  | 四時間半   |
| 日光より新藤原驛迄    | (汽車、電車)        | 金七拾貳錢    | 一時間二十分 |
| 新今市より新藤原驛迄   | (電車)           | 金五拾九錢    | 一時間    |
| 新藤原より川治温泉迄   | (乘合馬車)         | 金七拾錢     | 一時間半   |
| 乘合自動車        | 今市、箒澤間(川治温泉手前) | 金壹圓拾錢    | 五十分    |
| 貸切自動車        | 今市、鬼怒川温泉間      | 五人乘 金六拾圓 | 一時間    |
|              | 今市、川治温泉間       | 同 金拾圓    | 一時間    |

(連絡) 汽車と電車、乘合自動車及び電車と乘合馬車は、汽車、電車發着時間に連絡す

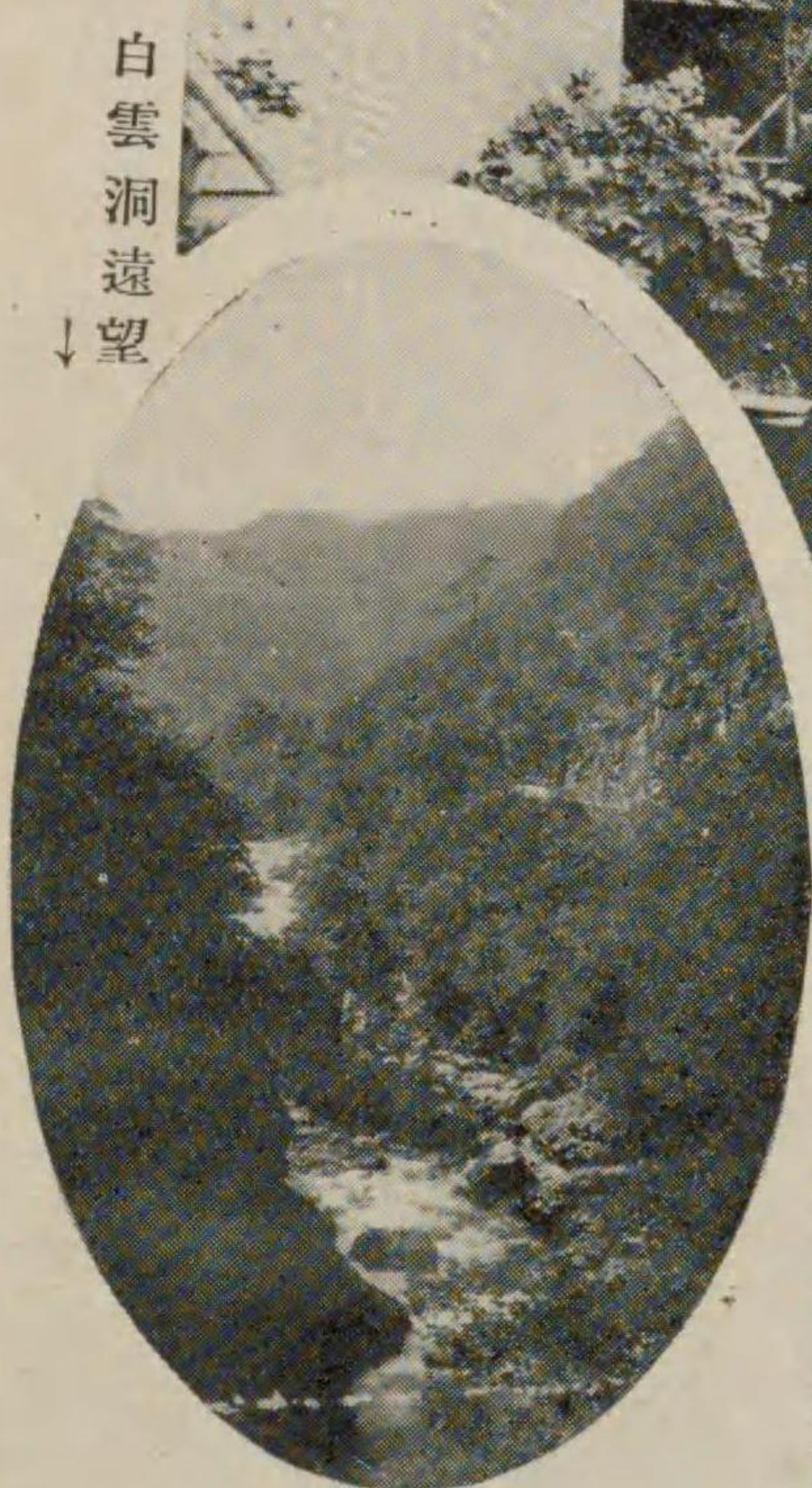
川治高原温泉行



→ 箒川溪谷  
紅葉橋遠望  
箒川溪谷瀧化  
← の瀧



稚兒ヶ淵↓



白雲洞遠望↓



探勝者一行——右より竹久夢二。泉濠太郎。藤田健次。福田蘭堂。福田正夫。中央前方は著者 (和泉屋旅館の庭)



## 箒川谿谷

鹽原に遊ぶこと三度。箒川の溪谷は回顧瀧下の碧流から遡つて、鹽原温泉の入口ともいふべき布瀧の下の深潭にいたるところの山貌水色に比類なき幽玄邃冥の特色をもつてゐることを知つた。東北本線西郡須驛から鹽原口までは電車がある。それから先は自動車もあれば馬車も通ふ。歩くのもよからう。そこから入勝橋を渡つて白羽坂を登り切ると回顧橋だ。淙々たる水聲におどろいて右盼すれば、則ち箒川の奔湍を挟んで岫立する層峯のふところから三十尺の水龍が躍り出してゐる。回顧瀧はこれだ。これが瀧のはじまりで、道轉じ山めぐるに従ひ、仙髻瀧、冷々瀧、猿臂瀧、聯珠瀧、龍化の瀧、布瀧と殆んど應接に違がないほど、瀧づくしで、この深溪の風格は一變し鹽原温泉福渡となる。溪谷の眞面目眞骨頭は此處まで來るあいだに遺感なくあらはれてゐるのである。福渡附近を以て溪流は天工の極美を示しつつしてゐるやうだ。それから上流へ溯るにつれて、だん／＼風致は平凡になるやうだから、この溪谷を探らうとする人は、福渡の温泉にでも陣取つて、そこから上の方もよからうが、しかし、そこから下の方へ杖を曳くならば、箒川



溪谷が持つてゐる獨自のもの。天下一品といひたい眺望を恣にすることが出来ると思ふ。晩春から夏にかけては殊にいゝ。濃艶のいろ眼を奪ふ翠巒と翠巒と相迫り、杳として窺ふべからざる深潭の、碧玉を沈めたやうな水が白雲の閑影を呑んで、緩かな輪紋を描きつゝ悠々澇々と流れる。それは樹と水と相映する林壑の幽寂な特色だ。その密樹の緑を美しく綴彩する野草や灌木の花。そこに朗らかな河鹿の妙韻が湧きいでやうといふ詩味ゆたかな景致をもつてゐる。澗水宛轉として芳甸を遶る。江潭の落月復西に斜く。月もよからう。この巒峰が炎ゆるやうな紅繡の衣を纏ふて姿を水に染める秋の美観はまた格別である。凹願瀧から福渡までの沿道に大網。斷崖を二丁ほど谷底へくだると、溪流とすれぐれの礫に、石を疊んで温泉が混々と湧いてゐる。石間の湯。河原の湯がそれだ。その上方に押し寄せて来る奔流が兩岸の巖巖に映まれて、どつと飛沫をあげながら切つて落ちる。こゝから上流には魚も溯れないといふ魚止の瀧はこれ。四丁ばかり行くと屈折してゐる岩壁を巉嶮に勢ひを阻まれた激流が漸くおさまつて微瀾しづかな深窈の澗をなす。いはゆる稚兒ヶ淵だ。昔美しき稚兒をつれた一人の僧がこゝへ浴泉に來たといふ。僧はこの童子を寵愛すること一應でなかつたが、間もなく一童子の更に美しいのがあらはれるに及んで、僧は深くこれを愛して、さきなる美少年を顧みなくなつた。前の美少年は僧の愛撫の衰へたのを恨み悲しん

で此の深淵にとび込んだといふのが名の起りだ。この箒川溪谷には、かういふ因縁の淵がいくつもある。曰く普門ヶ淵。曰く小太郎淵。曰く朝仙ころがし。これは朝仙と申す人の過つて谷底へ墜落したのだが、身投げの名所の多いこと。私は知らぬが、このほかにもあるかもしれない。その稚兒ヶ淵から三丁ばかりの岨路に、むかし、鹽原家忠——源三位頼政の孫有綱の味方をした豪族——が那須資隆の兵を打破つた古戦場がある。白雲洞へ通ずる極めて狹隘な險路だ。資隆の兵は右に負うてゐる箭入れの鞆が、右手の峭壁につかへて進めない。そこで左へ負ひ直して辛と通つたといふところから、この細道を左鞆と稱するが、今は、むろん自動車馬車が樂に通る。通り過ぎると寒棲橋だ。こゝで右折して鬱蒼たる密林のなかの崕路を五丁あまり登つて行けば風擧の瀧や鹽溪七瀑の一といふ龍化の瀧が蛟騰鳳起する壯觀に出會ふ。怒沫をあげて争ひくだる長流を脚の下はるかに眺めて橋を渡りきると、たちまち嵐氣をふくんで肌寒き白雲の大洞が暗い巨きな口をあけてゐるのだ。この洞門は對山からの遠望が最も佳いといふ。洞をぬけると龍ヶ鼻。右に材木岩。左の溪澗に布瀧が落ちてゐる。かくて福渡温泉に入るのだが、私の讚美したい箒川溪谷なるものは、つまり此處までだ。私は鬼怒溪谷から日光湯元に遊んでの歸るさ。一行のうち翁久允他二名の漫畫家と宇都宮にて袂を分ち、残りの四人。尺八の名人福田蘭童子。畫家夢二子。詩人正夫。民



諸作家藤田健次子と共に、この福渡の民謡作家泉濠太郎さんに招かれて来た。濠太郎さんは此處の舊家泉屋旅館の若主人である。福渡に着いて碧雲樓泉屋奥別館の二階座敷に疲れた足を投げ出したのは、秋の山氣身に泌みる夜であつた。この日は福娘といふ酒の問屋が小賣酒屋を大勢つれて都から遊びに来てゐたので、泉屋は本館も別館も客で一ぱいの盛況を呈してゐた。われわれがやつて來るといふので二室だけ明けてあつた。寒さと疲れで意氣地のないほどいぢけてゐるが、宿の内湯に浸つて暖まり夕餉の一二杯で更に温ると元氣は恢復したが、何しろ時刻がおそいので、今夜は靜かに寢ようとあつて、五人おとなしく枕についた。福田の恐ろしい鼾に眼を醒した時には、崇嚴な朝の光が部屋に漲り流れてゐた。満員だつた前夜の客は引揚けてしまつたらしく宏い家の中は森閑としてゐる。手拭をさげて浴室へ出掛けた私が、澄明な秋の光のなかを泳ぐやうに、翩々と舞ひちりつゝ浴室の硝子にあたる紅葉の音を聞きながら、青白く澈んだ美しい温泉に身を沈めて爽々しい氣分を味はつてゐると、みんな揃つてやつて來た。濠太郎さんの御馳走で、今日は箒川溪流に面してゐる本館の二階座敷に陣取り、曲水流觴の風流を學ぼうではないかとある。但しそのまへに、溪流の上に溯つて山村水廓の風物を見てはどうかといふことになつて、朝飯がすむと散策の仕度にかゝつた——時間があつたら、對岸に出て鹽の湯から雷

霆・霹靂・咆哮・雄飛の瀧を観るのもよからうといふことだつたが、遂にその方へは行かずにしまつた——さて和泉屋の若主人。濠太郎さんが案内してくれることになつて一行六人。和泉屋のまへから田舎馬車に乗り込む。今どき見たくも見られぬ小さい汚い古風な代物で、揺れること夥しく尻が痛い。こんな窮屈な思ひをしなくても歩いた方が餘つほどもしなんだが、これも旅の一興だとあつて、竹久夢二が呼びとめたのである。瘦馬に曳かれてごろ／＼軋り出す。右は白倉山から傾いて來る層巒の一端、面を壓するばかりの懸崖となつて轟然と劍立するもの、これ天狗岩だ。左は箒川の溪流が小波をたてゝ落ちて行くところに、その昔、蒲生氏郷が東征のとき野立ちしたといひ傳へる野立岩が巨きな姿を横へてゐる。それと紅葉橋を一つ隔てゝ七ツ岩といふのが見える。これは此の土地の人が福渡以西の奇勝として自慢のものらしい。さまざまの形をした七つの火山岩が稜角を鬪はせながら一群となつて、涼々たる湍面に相倚り相離れ攢蹙踞立してゐるのだ。遠く雷霆の瀧の方からやつて來る溪水が、こゝで合併し、さらに四五丁上の鹽湧橋附近で、ずつと奥の、小太郎淵の方から下つて來る溪水と出會つて、箒川の中流がつくられてゐるので、それから上へ溯ると、この溪谷はあまり深くないやうだ。谿谷としては此の界限が山と水との奇趣に富んでゐるやうに思はれる。その鹽湧橋のほとり。鹽釜温泉まで揺られて行くと、



われぐは馬車を下りた。こゝは鹽の谷の郡といつて、山から掘り出す鹽を焼いて貢いだ跡ださうだ。鹽湧橋の兩岸から高熱の湯が湧いてゐる。福渡戸の内湯などは、この邊から木樋で導いてゐるのだ。こゝに馬車を止めたのは、例の遊女高尾の塚に哀悼の意を表するためださうで、道路から一寸入つた場所に三尺あまりの粗末な石碑があつた。「男が好うて金持で、それで女が惚れるなら、奥州仙臺陸奥守、なぜに高尾が惚れなんだ」と俗諺に唄はれた江戸吉原の名妓高尾の塚とも思はれぬほど寂しい。この遊女の襦うまかひが小松内府重盛の姨にあたる妙雲禪尼の開基鹽原妙雲寺に保存されてゐるといふ。また彼女の筆になる一卷の軸は、今尙和泉屋旅館に秘藏されてゐるといふ濠太郎さんの話だ、碑の兩側と裏面には山本北山の文が刻まれてゐる。

「これが萬治年間江戸吉原の三浦屋で美貌を天下に謳はれた名妓高尾の、ほんたうの塚だらうか？」

といふと、傳説研究家藤田健次氏が首を傾けた。

「怪しいですね。伊達綱宗に落籍されたといふ高尾ではないでせう。或は二代目か三代目の高尾かも知れませんね。しかし普門ヶ淵に高尾の弟の普門が陥つて死んだといふ事實や、普門が筆をとつて、今、妙雲寺にある釋迦の涅槃像の巨きな畫をかけたといふ事實は、いろんな古畫に徴

て疑ひないものゝやうに思はれますね。とにかく高尾のことは、この土地の人も眞偽のほどは知らぬらしい。普門が水死したのは寶永四年とあります。」

といふ説だ。普門ヶ淵は二三丁先にあつた。畑戸の下入口。坂路に沿つた崖の下の深い淵だ。普門といふから坊主かと思つたら畫家ださうで、身投げをしたのかと思つたら、實は酔つぱらつて陥り込んだといふ話だから興が醒める。この畫家の釋迦像を秘藏してゐる件の妙雲寺は、それから四五丁上の温泉場である門前にあつた。溪流を隔て、七絃瀧と向き合つてゐる古刹。案内書に曰く「本尊は毘首羯摩の栴檀香木を以て刻みたる三國傳來の靈像なり。本朝三釋迦の一。壽永の一敗に平氏一族四方に流亡し、その臣筑後守貞能、妙雲尼を伴ひ、靈像を負うて、宇都宮朝綱をたのみ下野に下り、初め藤原に隠れ、後此の鹽原山中に草庵を結び、靈像を安置し、妙雲尼逝くに及び法名を以て寺號とす」云々。お寺の縁起はなかく古い。高尾の塚を見て再び馬車に乗つて此の寺のまへを通つたが寄らないでしまつて、眞つ直ぐに會津街道を、木の葉石で有名な化石園に向つた。八幡の逆杉の畔で馬車を棄て、橋を渡れば二三丁。蕭颯として肌を寒くする秋の澤風に曉鬢をなぶられ、炊煙斜めに這うてなる霞の小路を辿り、鮎などを放ち飼ひにした古池の澁から化石茶店に入つた。こゝは後ろにひるが、岳を控へた丘陵の麓だ。木の葉や草の葉。昆虫や貝の化



石が店内狭きまでに雑然と列べてある。思ひ／＼に好きなのを選<sup>ま</sup>つて買ふ。私も手頃の化石と子持石（大黒石）とを求めて、徘徊數刻の後に元の道へ引返す、と待ちわびてゐる馬車で、古町温泉場へ入る少し手前から右折して丘の中腹の鐘乳洞へ登つた。一に源三窟ともいふ。源三位頼政の嫡孫。伊豆冠者有綱とその臣の渡邊某といふ武士とが、鎌倉兵に打ち敗られて逃げ來り、この洞窟の奥に潜伏しながら、ひそかに再擧の計をめぐらしてゐたが、發覺した／＼めに事成らず、こゝに於て戰死したといふのが洞窟にこびりついてゐる傳説だ。滑らかな坂路を登りつめた猫の額のやうな平地に一軒の掛茶屋があつて、澁茶を嚙ぐ傍ら、この洞窟に入る人々へ白無垢の上つ張りみたやうな着物を貸す。むろん料金を取るのだ。尺八の先生、福田蘭堂子と連れ立つて洞窟の入口へ降りて行くと、掛茶屋の娘が躑いて來る。江の島の岩屋を小さくしたやうなもので、石灰岩が水に浸蝕されて出來上つた洞穴だ。大きな螺の殻を覗くやうな形状に奥へ奥へと迂曲してゐるが、前壁の凸處に安置してある苔むした佛像が仄かに見ゆるだけで、奥の方は聞寂として黑白もわからぬほど暝い。いかにも陰濕凄愴な感じがする。そこを燭火をたよりに、潜りぬけて行くと、掛茶屋の裏の別口の穴へ出るやうな仕掛けになつてゐるのだ。

「入つて見ようか。」

と私が言つた。

「蝙蝠に引つばたかれやしないかな。」

と蘭堂子が氣味わるがる。

「蝙蝠が飛び出したら、あべこべに叩き落してやるさ。入つて見よう。」

「ぢや入つて見よう。」

首をちぢめ腰をかぢめながら危なつかしい急勾配の石段へ一步足をかけると、掛茶屋の娘が慌てゝ後から呼びとめた。

「あゝ。もし。そのまゝで窟にお入りなすつては不可<sup>い</sup>ません。お怪我をなさいます。手まへどもに貸着がありますから、それをお召しなすつて下さい。怪我をしないやうに、お淨めがしてあります。」

「あの白い衣かい？」

蘭童子が振りかへる。

「ぶうです。」

「冗談ぢやないよ。あんなものが着られるかい。見つともない。」



「でも、そのままお入りなすつては困ります。」  
 「そんなら止さう。」

蘭童子は私を引つばつて逃げるやうに洞外へ飛び出した。連の人々は、もう掛茶屋の坂路を下りて、螢谷の池畔へついてゐた。こゝに名物「片葉の蘆」といふものがあるのだ。泉濠太郎さんの説明によると、この附近に住むお花といふ娘が、一人の旅僧に想ひをかけて、夜な夜な蘆笛を吹いた。旅僧はこの戀慕の笛の音に向つて、悪魔退散のお経を厳そかに念誦した。不思議やお花の姿は見る見るうちに骨白を化した。神秘的な匂ひのする傳説だ。その旅僧こそは諸國巡錫中の弘法大師であつた。そのお花が戀の片想ひに、摘みとつた蘆は今も片葉であるさうだ。古池の縁に茂つてゐる蘆を見ると、なるほど莖の片側にしか葉をつけてゐないから妙だ。この池のそばから往來へ出たわれ／＼は、和泉屋の主人の心からなる歓迎の宴に赴くべき約束の時間なので、古町温泉場を素通りして福渡戸へ向つた。途上畑下はたぎにて例の「金色夜叉」旅館を見た。塩原の溪谷は總じて女性的である。物凄くはない。妍美だ。

二度目にこの溪間の湯の町を訪れたのは、翌年の秋のくれで、同行者は水木伸一と早田廣の兩畫家であつた。このときは泉濠太郎さんの案内によつて、君子嬢と申し侍る塩原美人とその仲間との六人連れで、おきまりの馬車にゆられながら、塩湧橋を渡つて十町ばかりの鹽の湯へ出掛けた。塩湧橋からこゝまでの道中も静かでないが、この温泉境は殊に落着いた深味をもつてゐると思つた。鹿股の谿流にのぞみ、四方を山にかこまれてゐるために暗い感じはするけれども、福渡戸や畑下戸や門前などから見ると、こちらは餘程幽棲な趣致を保つてゐる。海拔千六百尺。夏などはどんなに涼しいだらうと思つた。和泉屋の焼印のついた下駄をぬいで、私たちが上り込んだのは、鹿股の谿流に相對して最も佳い位置にあるといふ玉屋旅館の客室であつた。蓋し温泉は谷間の水滸みづぼに湧いてゐるので、宿の下方はるかにあるわけだが、そこまで降りて行く廊下や階段の長いのは驚いた。温泉には冷の湯、中の湯、岩の湯の三ヶ所がある。私たちが入浴したのは岩の湯であつたかも知れない。湯壺は崖足の洞窟だ。そこに豊富な温泉が涌いてをり、見るからに素朴な裸の人々が湯に浸つてゐる光景、いかにも原始的であつた。殆んど人工を加へてゐないやうに思はれるところが私には面白かつた。二人の畫家もこれだけは氣に入つたらしい。あたたまりながら鼻の先を走つて行く谿流を眺める心地は何ともいへない。一浴して引揚げると、夕食の仕度が出来てゐた。六人。膝を交へて盃を傾けながら、眼の前に聳ゆる山を見てゐると、山さへ見れ



ば登りたがる癖の私、急にその癖が出てふらくと宿屋の玄関へ飛出した。そこに番頭のやうな面を晒してゐる男に訊いた「谿流を渡つて向ふの山に登りたいんだが、どうでせうな？」

「橋がありませんよ。ぶつと上流へ行かなくつちや。」

「橋を渡らずに行けませんかね？」

「歩いてゐるか？ 渡れないでせうな。」

「そんなに深くはないやうだが。」

「はゝゝ。まあ、渡れたら渡つてごらんさい。」

人を馬鹿にするやうな白笑を浮かべながら、もつと詳しく物を探ねようと思ふのに、さつさと引込んでしまつたので癢に障つて、何のこれしきの浅い流れ、渡れないことがあるものかと高をくゞり、例の長の廊下づたひに長い階段を降つて湯壺へ出ると、着物の裾をからげて、流れの彼方此方に頭を出してゐる岩石へ飛び移り飛び移り川の中程まで渡つた。そこまでは足をぬらさずに行けたが、それから先は足場がない。あつても滑りさうであぶない。仕方がないから、水に浸つて行かうと思ひながら、着物の裾を一層高くからげて片足入れた。入れてびつくりした。見かけはさうでもないのに、水勢、おそろしく速くて川底はつる／＼。おまけに水の冷いことゝいつ

たら一分間も浸つてゐられさうでない。折角こゝまで来て、手の届きさうな對岸の崖に取りつけないといふのは残念だ。どうしたもんだらうと思案しながら空を仰ぐと、頭の上遙かに見ゆる宿の座敷の欄干から、三つの顔——二人の畫家と漾太郎さん——がこちらを向いて何か言うてゐるのだが、涼々たる水聲に打消されて少しも聞えない。おしまいは欄干の上に半身のり出して、おいで／＼の手招を始めた。引返すのも業腹だが、さりとて渡れさうもない。岩の上に蹲うつくまつてゐると嵐氣身に迫つて寒くなつて来たから、とうたう宿へ退却した。先刻の男衆が「どうです。渡れましたか？」といはぬばかりの眼つきで、尻をまくつてゐる私をじろ／＼見てゐるのだ。あとで聞くところによると、對岸に渡る便宜はいくらもあるといふ。このくらい不愉快なことはなかつた。三回目の鹽原訪問のときは、こゝに來なかつた。來る機會もなかつた。

(作歌 泉 漾太郎)

◆鹽原街道

五里の街道 自動車とばしや

うれしや鹽原 湯のほひ

◆紅葉

紅葉見るなら 鹽原へおいで

お山ア紅葉で まつさかり



◆福 渡

谷で啼くのは 河鹿の聲か

夏の福渡 二日月

◆鹽 釜

いとしや鹽釜 高尾の塚に

八汐つゝじの花が咲く

◆鹽の湯

お湯の効能と 鹽ノ湯の梯子

なんほ數へても 數へきれぬ

◆畑ノ上・畑下

畑ノ上から 畑下見れば

いつも普門淵 渦がまく

◆門前・古町

東ア門前 西ア古町を

霧にまかれて だまつてる

◆野立岩

山は時雨か 野立の岩よ

ないてくれるな 川千鳥

◆七ツ岩

七ツ七ツ岩 三夫婦とひとり

せめて八ツ岩に して欲しい

◆七絃瀧

瀧の七絃 もつれて落ちる

中のひとすじア はぐれ水

◆片葉蘆

月に宿かす 片葉の昔の

葉にも涙の 露が浮く

◆鹽原名物

あいの蓬萊橋ア 見て暮す

◆新 湯

寒や尾頭山 はや雪つけた

新湯姉さま なにしてよ

◆回顧瀧

いよゝ別れか みかへり瀧の

水も涙の 雨となる

◆稚兒ヶ淵

稚兒ヶ淵では 啼く初河鹿

遠い昔が しのばれる

◆龍化瀧

霧かしぶきか 龍化の瀧よ

谷間姫百合ア 袖しほる

◆天狗岩

天狗岩でも 霧まく日には

こゝの名物 蕨に石伏魚

でんぶ、きやらふき 粟ようかん

◆大 網

ほんに大網 極樂天地

お湯につかつて 釣魚をする



# 秩父峡谷

六八

紀州熊野の瀨八丁は天下の奇勝として昔から有名過ぎるほど有名であり、瀨溪が有する美景の代表的なものであるが、この種の風景を東京近在に求めるとしたら、埼玉縣の長瀨よりほかにはあるまいと思はれる。秩父峡谷は瀨八丁を小さくした縮圖ともいへるであらう。單に峡谷といふ點から言つても東京近郊に於て、一泊若しくは日歸りの探勝と清遊とを求めて得るものは、この荒川最上流の長瀨である。長瀨驛前一帶がいはゆる「秩父赤壁」の奇勝。溪が怪岩を抱いて流れて居る。對岸百尺の懸崖は石の屏風を立てたる如く、流水岩に遮られて深潭をなすこと三丁。東京近郊では見ることの出来ぬ山水美に富んだところである。長瀨から波久禮まで四里。輕舟に棹さして下れば蘇軾が赤壁の遊も偲ばれて興が深い。上野を朝早く立てば舟遊びしても日歸りの出来るので便利だ。

東武鐵道で池袋驛より僅に二時間半で寄居に着き。それより三十分で長瀨驛に着く。また上野驛から信越本線によつて熊谷驛で乗換へ、秩父鐵道に揺られ長瀨驛まで三時間。秩父驛まで三時



秩父峡谷の上流



間半でこの溪谷の景勝地に着くことが出来るのである。新緑滴る翠山。長瀨から奥秩父へのピクニックや家族連れには最も應しい。若葉のなかの躑躅。黄金色の山吹。この季節から秋にかけて、黄と紅と紫と陽光に交錯する情景が清流に反映して、心ゆくまで慰安を與へてくれる。汽車の便もよく、殆んど一時間毎に池袋及び上野驛を發車してゐる。長瀨驛に着けば、その東南方五町に寶登山がある。寶登山驛からは温泉の白煙ゆるやかに立ちのほるのが見え、左方に當つて長瀨の溪水が望まれる。この山はまた躑躅花山の名を以て知られ、花は關東一の名花と稱へられ、樹數も二萬餘本に達するさうだ。寶登山、寶登山社の四圍には山藤、山吹の花も時を争つて咲く。

秩父遊園地より長瀨遊覽乗合船あり。荒川溪谷の兩岸の美。秩父赤壁。白鳥島、岩石園、天神山城趾を眺めながら下流波久禮驛下まで水路二時間餘りで下ることが出来る。舟を傭うて對岸へ渡つて見ると絶壁から細い瀧が蛇のやうに迂曲して落ちて居るところがある。青葉が陽光に光つて白く見え、水の上に影をひたして居るところがある。舟は寂靜な溪の上をすべつて、對岸に着く。舟中から躍り出て、岩の上い跳びあがると、そこには名工が細工したやうな奇岩が續いて居る。この邊は四季の風光に富み、溪谷一の變化をもつて知られてゐる。(遊覽料金は、乗合船で一人二十錢。遊園地發船所より長瀨下りは船夫付貸切り十人乗り一艘が三圓。また荒川下りは



船夫付貸切八人乗り一艘が八圓とされてゐる。この僅少な料金をもつて清流を下るのもまた興味深いことである。長瀨驛より上長瀨をすぎ、秩父驛に至る邊、荒川運動場、古墳、十二天山、金崎神社、秩父遊園地、植物園その他の名所も多く、遊子は飽くことを忘れてこの樂園に足をとどめることであらう。その邊の各旅館もまた多くは水邊に望んでゐる。欄に靠れば清氣一入だ。乃ち秩父遊園地に養浩亭あり、長瀨驛より僅かにして、秩父赤壁、白鳥島を對岸にして長生館あり、その他、寶登山亭、大正亭、秩父館等（一泊二圓五十錢より三圓）養浩亭は一泊寢具料五十錢食事一品二十五錢以上の安價をもつて、短日の旅客の便を計つてゐる。

この景勝地は晩春新緑の碧流に影を落す季によく、連山紅の火と燃ゆる紅葉の秋にもまた好適の地である。平和な溪流と嵐氣とに身心共に慰安され、清められてゆくのである。都會人にとつてはまたとない清涼劑ともなることであらう。

秩父驛に至れば、翠山をなす武甲山の登山口となる。山頂の眺望はまた絶佳、廣々とした武蔵野の平野は眼前一望のうちに展開され心氣は自ら爽かとなるのを覺える。

武甲山麓にある奥秩父の景勝もまたよく旅する人の心を喰る。

秩父神社、琴平神社、秩父園等々あり、秩父橋、荒川橋の上流に三峰山を望む。海拔三千六百

尺の鬱蒼たる森林中に三峰神社鎮座し、前方に聳立する妙法岳もまた美觀を添へてゐる。三峰山麓數百尺の深崖もまた長瀨に比し絶勝の地である。深山の影は冷氣をもつて人を襲ひ、碧流の爽快さ、峻崖を割つて變轉し巨岩の間を碧水は溪を被ふ新緑の蔭に踊りつゝ下流する。また奇景である。

料亭は大輪、吉田屋支店等があり、山麓亭等もまた一泊一圓五十錢より三圓をもつて宿泊の便を計つてゐる。その四圍の深潭や岩壁、紅と黄と紫の色彩に飾られ、秩父溪谷一の美觀を出現し風致を飽滿し、深妙境を彷徨ふが如き夢を結ばせるに充分である。

荒川橋、八幡橋、金龍橋等、清流の上に架橋され。金藏落し、不動ヶ淵等の景勝の數多く、これより更に上流すれば、荒川水源地とも云ふべき中津仙峽に至るのである。

奥秩父の幽谷神秘境はこゝにある。冷氣肌に迫り、兩岸いよゝゝ狭く聳立し深潭絶壁を被ふ原生林の翠巒と相連り、言語に絶する美は繪の境地にまで人を誘つてゆき、遂に恍惚境地に至るのである。未踏地の如き幽氣を感じ、深山の靈氣満ちてゐる。

奇形なる岩石また頗る多く、鷹岩、瑠璃ヶ淵、三高山、大滑小滑、名殘岩、玉露の瀧等々、神秘の物語を深く藏してゐる如き風致。また一層感を深める。





射山溪 (御嶽神社參道)



射山溪

中津仙境の入口である鶉平、鹽澤より徒歩にて二時間を要するところにこの景勝地の妙味はあることであらう(著者口述)



## 射山溪

射山溪とは奥多摩溪谷の一部に與へられた名稱である。大體多摩川は東京市の水源地であるにも拘はらず、何處にそれが源を發し、どんな道を辿つて流れて來るのか知らない市民が多い。かくいふ私もその一人であつた。一つは世間一般に廣く知れ渡るやうな行届いた宣傳や紹介に缺けてゐたためであり、一つは世間一般が迂濶過ぎたためだ。武州御嶽山に參登する人が隨分ある割に、その御嶽山の西奥にかゝる幽邃の溪谷があるのを知らなかつた向が多いのだから、迂濶といはれても仕方があるまい。而も奥多摩の溪流はその南畫的な趣致に於ては、九州の耶馬溪をすら凌ぐほどの變化を持つてゐると言はれるくらいである。私が出掛けて行つたのは、その後の探遊を勘定に入らずに、たつた五年まへのことだが、それでも、まだく今日のように一般の注意を惹くほど讚美されてゐる様子は認められなかつたくらいだ。奥多摩溪谷といふ文字が、新聞や雜誌に散見されるのは極めて最近のことであつて、これは一部の専門登山家と、この溪谷の水源地帯で仕事に従つてゐる人々の紹介と宣傳とが、登山熱とキャンピングの流行と相俟つて、こ



の溪谷を俄かに有名ならしめたやうに思はれる。かくて昨年、東京日日新聞社主催の日本八景選定には、長門峽、三段峽、惠那峽、祖谷峽、裾花峽その他の峽谷と共に、日本百景の部に選入されることにもなつたし、また、昨年などは電車の中の掲示廣告にまでも宣傳ビラとなつて盛んに其の名があらはれるやうな勢ひで、夙に世に遍く知られなければならなかつた奥多摩溪谷は東京に最も近い探勝地として絶佳の部に今漸く入つたやうな形である。今年は此處に向つて杖を曳く人の増加を見ることであらう。二度目に出掛けたのも、翌年の衣更への季節。雨あがりの憂鬱な空の微明りと青葉のいろとが眩しく眼を射る重苦しい日であつた。朝飯を晩くしまつて家を出ると、ステツキ代りの洋傘を打ちふりながら、目白驛で品川まはりへ乗り、新宿で松本行の中央線に移つて立川へ出たのが午後一時過ぎ——極く最近。省線電車が立川まで開通したから、これによつて立川へ出る方が便利なることを俟たず——立川で青梅鐵道に乗り替へて青梅についたのは二時まへであつた。ほんたうならば、この青梅から宮ノ平、日向和田、樂々園を通つて二俣尾で下車すべきだが、私は青梅町に少し用事があつたので、こゝで電車を棄てたのである。普通は二俣尾で下車して三里十町ほどの道を氷川村まで漕ぎついて一休みといふ段取りになる。それには途中の棚澤まで自動車の便もあるのだから骨は折れない。さて私だが、青梅町で用を達してか

ら電車で二俣尾へ出ようか、或はこゝから自動車にしようかと迷つた揚句。どちらも廢してしまつたのである。多勢の道づれがあれば致しかたがないから、おつきあひに自動車へも乗るんだが、たつた一人で自動車のなかに納まつて、何のことはない、風のやうに突疾疾驅してしまふのは斷じて妙でない。棚澤までの自動車には乗つた經驗がないから、どのくらいのスピードを出して沿道の景色をチラ／＼させるか知らないが、他の屢々の失敗に鑑みて自動車の方は御免を蒙ることにした。揺れかたが酷くつてお尻も痛い、むしろが、た馬車の方が面白い。成るべく風變りに行きたいのだから、おきまりの喇叭を吹きながら悠々と軌り行くと、た馬車は、そこらにゐないものかと思ひ、燻し銀のやうにきらきら光る怪しげな空の下をしばらく迂路ついで見たが、そんな古風なものは見つかりさうもないので、どうしやうかと思案してゐるところへ、手拭ひ、頬冠りの馬方が勝沼の方から空の荷馬車を曳いて來たのである。これはいゝ！早速の掛け合ひだ。

「親方ッ。」

「おゝ。」

と馬方は此方を向く。

「何處まで行くんです？」



「おれかね？」と馬の口を取つたまゝ佇ちどまり「おらは白丸に歸るんだよ。」

「さうか。ちようどいな。駄賃を出すから乗せてくれないか？」

「お前さん何處へ行きなさるんだ？」

「氷川から小河内の方へ登るんだが、白丸まで乗せてもらへば、先は歩いてでも大したことはあるまいと思ふから助かるんだがね。」

「さうかね。ふむ。どうせ歸るんだから、駄賃などはいらねえ。お前さんさへ好けりや乗らつせえ。今朝。暗えうちに砂利積んで出たがね。途中で雨にぶられたが、もう乾いてゐるだべえ。」

氣の好い馬子は、砂利を積み容れる箱型の荷馬車に蓆を敷いて、物好きな此の旅人を載せてくれ、存外の早足で軌り出した。「まっすぐ日向和田へ出るかと思つたら、駒木野へ渡つて日影和田から吉野村へ出た。さうして此の梅の名所の宿場口まで來ると、不意に馬を止めて道端の掛け茶屋へ躍り込み、汚い風呂敷につゝんだ割籠のやうなものを腰にぶら下げながら急いで引返して來る。さては此處で朝飯の辨當でも食べたのだらうと思つてゐると、五日市への岐路を左に柚木へ向つて砂利を噛みながら馬車は轆轤と軌り出す。聞きはしないがこの先の柚木を経て御嶽村の部落を過ぎ、丹三郎から棚澤へ渡つて行くつもりらしい。そのほかに白丸へ出る道があるか

何うか私は知らない。柿。梨などの若葉の木立の緑のなかに。涓々と落ちる水晶のやうな筧の水の、雨を含める微風に靡いて、その傍らの小池の畔に咲ける紫いろの燕子花に、颯と飛沫かゝるは艶にすぎたる風情。今は養蠶どぎと見えて、あちこちの藁葺屋からサク／＼と桑切る音の聞こえるのも、この土地らしい感じだ。空に杜宇の聲がある。それを眺め、これを聞く、昔の駕籠ならで砂利を積む小さい貧弱な荷馬車の蓆の上なるも風流と心得たもの。杉と檜とは此の溪谷の沿岸を飾る尊い景物である。小手を翳して望めば、その杉と檜の津々たる密林の梢には眞白い雨雲が低迷してゐる。あの邊は降つてゐるのではあるまいか？荷馬車が柚木の村里へ入るころになると、いまにもしとしと、やつて來さうに思はれて少々心細い。景色は雨氣を乃子み吹く微風も冷たい。寒烟の低く地に彷徨る柚木の村里を離れるころから山のだゞすまる水の動きが、だんだん風を變へて、そろそろ深まらうとする溪澗の趣きが感ぜられる。光澤の強い暗緑色の老杉と古檜とが鬱蒼と茂つてゐる密林を貫いて谷川へかゝる橋をこへ、藓滑らかに迂曲する路を進んで行くと、岩を咬み涯に碎くる碧流の眞上に、こちらの森から向ふの懸崖へ高く架けわたされた長橋へ出る。この邊の溪流を射山溪と呼ぶのである。射山溪の入口だ。長橋の名は高橋。御嶽への登山口だが、橋畔より見渡す崖の曲隈、渚汀の凹凸、水際の砂地や流れの淀みや、早瀬に渦を巻き、



黒岩に泡を噴く水の姿には、いまだ嶮奇竦栗するほどの凄愴なものはないけれども、眺めるには、ゆかしく爽やかな情景だ。前方の翠嶂は眞白い濃霧につままれ、手近な山丘はその脚下から澎湃として湧き立ち騰り、縦に横に狂奔する朦雲のなかに隠れたり現はれたり。夢の畫中を行くやうな氣持だ。やがて白丸の村落についた。荷馬車の上から跳び下りた私は、要らぬといつて斷る祝儀を無理に馬方へ押しつけた。馬方は頬冠りを脱つて

「こりや、どうも濟みませんな」とお辭儀をしながら、「旦那は御存じかも知れんが、この道を眞つ直ぐ行くと氷川に出る。泊るなら三河屋といふのがあります。」

「有り難う。」

私は洋傘を振り振り、溪流に沿ふた村道を西へ歩き出したが、氷川村の近くで、この邊一帶、小丹波から白丸へかけて、河鹿多く、月の秋は殊に妙だといふ溪岸の、水に迫り寄るところへ、若萱などの、すすく伸び茂る雜草の間の覺束ない小徑を辿りながら、岩石の累疊する磧へ下り立つて見た。何とも言へない幽雅な景色だ。南東に連なつて空を走る三頭や御前や大嶽と思はれる御嶽山脈の巍然たる姿は、遠きも近きもとゞ模糊として灰白色の雲烟にかこまれ明かならず。やゝ近い重巒の蔚蒼たる影も、霏々として舞ひ飛ぶ湯氣のやうな狭霧の翼に淡彩されて、定かな

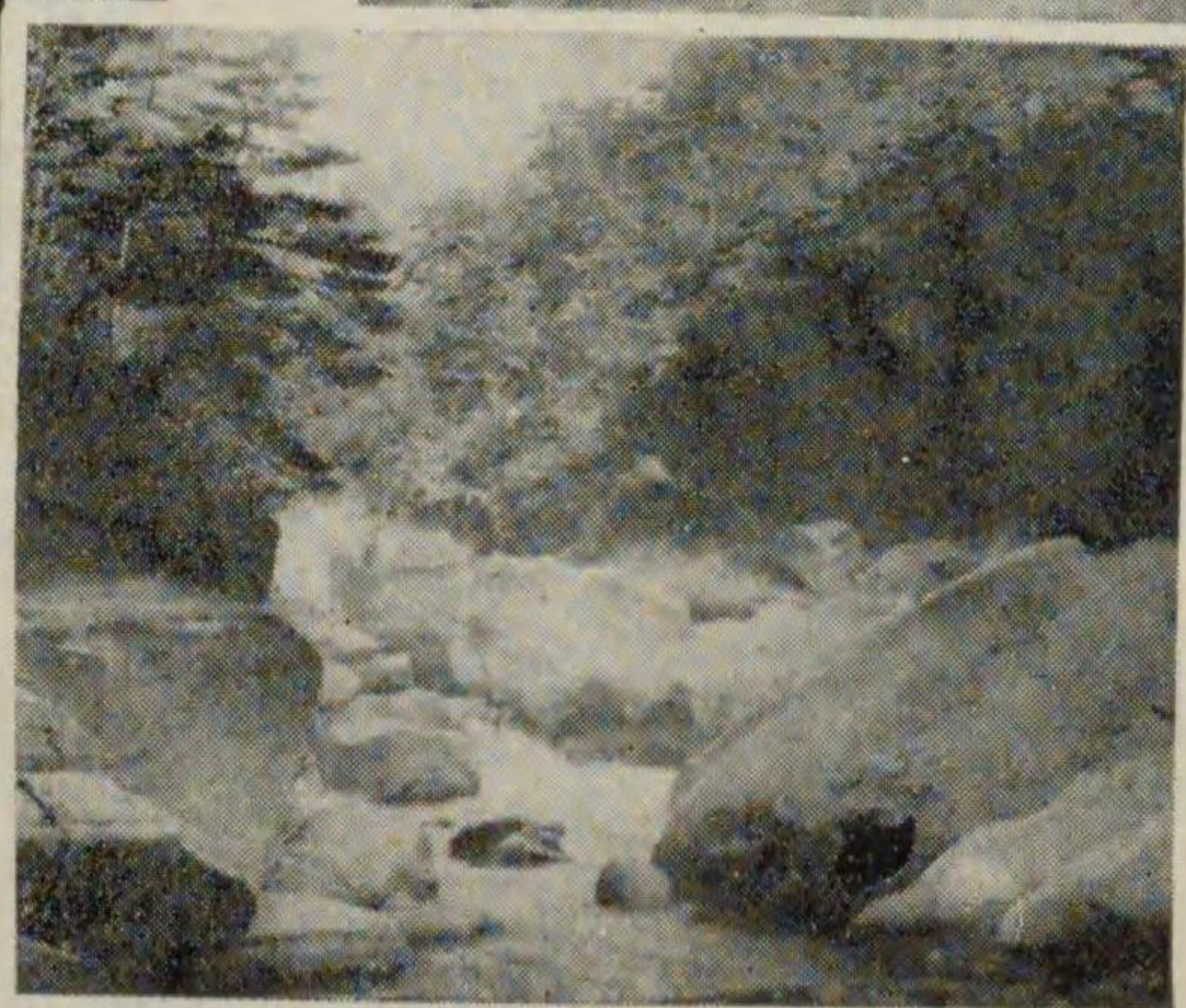
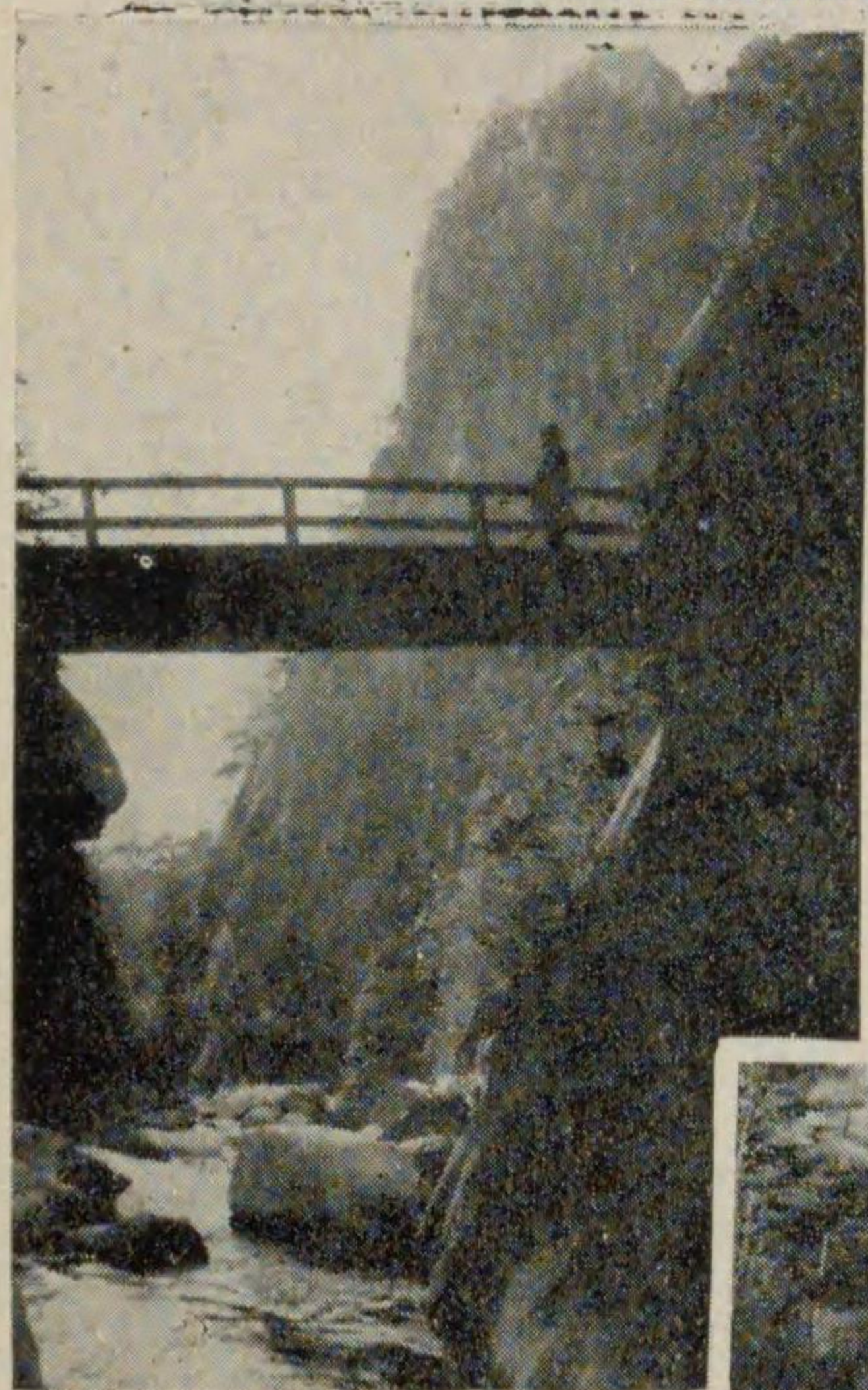
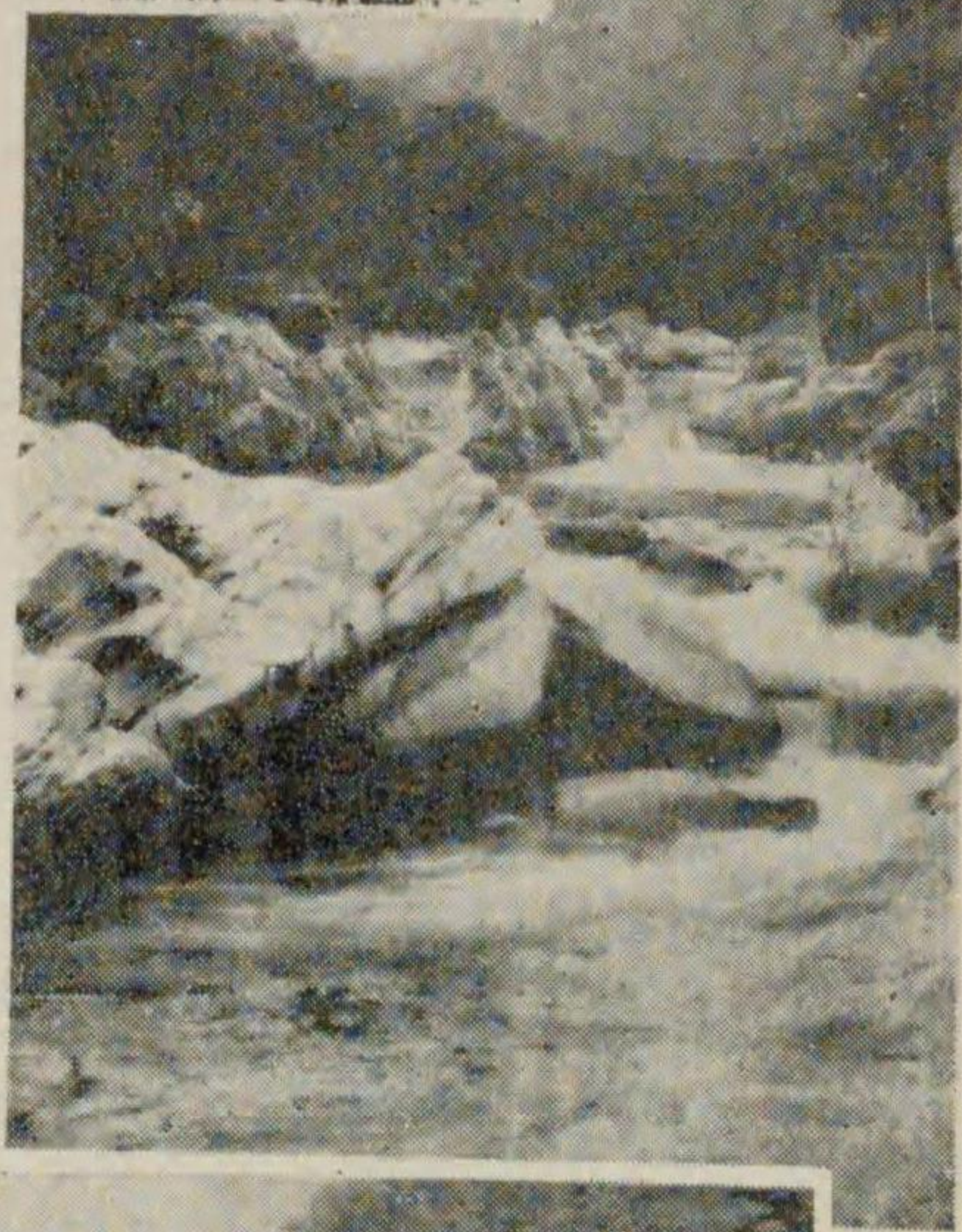
らず、ひとり兩岸の峭壁のみ綠樹の新色あざやかに滴り濡れて眉前に逼り立つ。その峭壁のあひだを清麗な水が、苔蒸す岩に咽びながら滔々として流れて行く。嵐氣腸に泌みて薄ら寒いばかり。稍しばらく岩塊の上に佇んで此の景色に相對してゐるが、じつとりと合服の濕つて來るのに氣がついて、慌てゝ背後の岸へ引返し、そこから日向の方へ道をとリ、氷川村へ入つた。こゝは例の怪窟鐘乳洞の方からやつて來る日原川が、多摩の本流と合する地點の臺地。二百戸ばかりの一寸した山村。水廊である。鐘乳洞を探るには、この村から日原川へ沿うて日原村へ出る。そこから半里ほど大日谷を上げればいゝ。東京から鐘乳洞探見を目的に來るならば、この氷川村を通つて日原村に一泊。翌日洞窟へ入るといふ順序だ。私は氷川神社へ向つた。それは日原川と多摩溪谷との合流點左方にある有名な古社。亭々たる老杉の喬木に晝もなほ暗い巉崖へ河流を跨いで虹のやうに偃架してゐる橋を見たばかりでも、そゞろ森嚴崇邈しんげんしうまくな氣に打たれる。けだし此の溪畔に於ける名勝の一つだ。この宮居に杖を曳いて溪流に沿ひながら、村はづれまで下ると、溪水を壓して屹立する高峻の斷崖で、路は嶮しいが、崩のはしから宮居の森をへだて、氷川の村落を見おろせば、老ひたる鶯の聲微かに聞こえ、トントントンと杵の音も淋しげに遠くより傳つて來る。眼を移して登計の彼方へ渡る釣橋を望めば、村南愛宕山の喬杉の、雪雨に鎖されてゐる冥濛まぼろしな半



空へ轟々と聳立するさま、雲氣のために黒味を帯びて或は暗く或は明るく、刻々に色調を變へながら、縹緲たる南畫の趣きをそのまゝにあらはして、頗る奇觀だ。多摩溪谷の南畫的風致は、この村から溯つて、二境、原、河内、小河内へ行くに従ひ、ますます深くなることを私は後に知つた。足もと遙かにひゞくものは、崖裾をめぐる激流の音。鼻をかすめて飄へる黒い影は燕らしい。いかにも大まかな眺めだ。こゝからまた日向の部落へ逆行し、大嶽山への登り道があるといふ對岸の海澤へ渡る橋の上から深い溪谷を俯瞰しようかと思つたが、それは明日のこゝとして、村へ下り、教へられた旗亭を見つけて、ともかくも足休めをすることにした。溪流に臨める田舎式の家づくりだ。靴の紐を解くまもなく案内された二階の部屋。その南面の欄に凭つて眺望を求めると、濃厚な雨雲が少しづつ、消え散つて行きつゝあるためか、半空に岫立する先刻の愛宕山の輪廓が急にくつきりとして見える。凝乎と見つめてみると、その山容から老杉古檜の鬱蒼たる有様までが、私の郷里長崎にある同じ名まへの愛宕山にそっくりなのだ。さう思つて見ると、欄干の直下、清流に洗ひ磨かれた岩や小石や砂利を越えて走る碧湍の風致までが、やはり故郷の街はづれなる藤の茶屋かち見おろした中川上流の溪澗に似てゐるから妙だ。斜に見ゆる對岸へ架け渡された釣橋。登計の方へ轉る岨路も手に取るやうに見える。山雨來らんと欲して風樓に滿つる爽



←和田峠  
近 寺附 羅漢 ↓



↑昇仙橋



→富士石



快な気分もいゝが、溪雲霽れなむとして微光亭に漲るときの明るい軽快な気分も、これからまだまだ歩かねばならぬ私にとつては愉快だ。いまに青空があらはれるだらう。さうしたらぐたものだ、と、谿中の岩から岩へ跳び移つてゐる鶺鴒の尾の運動に視線を向けてゐると、湯が沸いてゐるから、お入りなさらんかと言つて、女中が浴衣に温袍のやうな着替へを持つて來た。さつそく案内して貰ふ。汗を流すといふよりは寧い暖まりたいやうな季候だ。一風呂浴びて上ると、頼んで置いた夕餉の膳がほつほつと運ばれる。時間は少し早いけれども、汽車や電車や荷馬車にゆられて空腹の氣味だつたから早目にしたのだ。皿には鯉のあらひ。椀には鯉こく。鯉料理は此宿の自慢と見えて美味さうだ。何はともあれ、一杯なかるべからざるものは則ち酒で、一二本つけて貰ひ、涼々たる早瀬の音を聞きながら箸を取り盃を傾けた。(奥多摩溪谷紀行の一節)



## 昇仙峽

八二

笛吹川や荒川や釜無川の溪谷は既に世に知られてゐるであらう。駿河灣に口をあけてゐる富士川を北へ北へと溯り、駿河をぬけて甲斐に入ると、市川大門附近で、左の方へ釜無川といふ枝が生ずる。更に溯ると、甲府から一里半ほど手前の下曾根あたりで笛吹川(右)と荒川(左)の二つに分れる。この笛吹川は大正五年の夏に帝大生四人が遭難したとかいふ七千三百餘尺の甲武信嶽と、そのお隣りの八千五百五十尺の國師岳との谷間に水源を發するのだが、荒川の方は、その國師岳と此の邊の山では一番高い八千五百六十餘尺の金峰山との谷間に水源を發し、國師岳から御鷹巢山といふ順に南へ走る連山と、金峯山から木賊山、御嶽山といふ順に南へ走る連山とが挟む谷を蜿々として甲府の方へ流れてゐる。この荒川の流域に甲州人御自慢の昇仙峽の奇勝があるのだ。この花崗岩石峽谷の奇を探るには中央線甲府市から荒川岸に沿ふて溯行するのが普通である。東京から出掛けるとすると、新宿驛から甲府市まで五時間かゝる。午前五時三十分新宿驛

發、鹽尻松本行で立つと十時二十五分には甲府に着く。そこで直ちに自動車を備ふと、峽谷の入口である長潭橋まで三十分そこらで行ける。そこから峽谷の中心に位する仙娥瀧を左に御嶽川に沿ふて、金櫻神社へ參詣して引返すならば四五時間もあれば足りるから、午後六時十四分甲府驛發の上りに間に合ふし、夜の十時四分には新宿に着くから、つまり日歸りの見物が出来るわけだが、金櫻神社の下から登り、展望道路を経て歸るとか、または仙娥瀧から荒川の本流を溯つて琵琶瀧から燕岩を登つて歸るとか、或は仙娥瀧から猿渡の瀧の方へ道をとつて、板敷川を溯つて歸るとすると、東京からの日歸りは六ヶ敷い。歩く道中だけでも七八時間は要する。況んや此の峽谷中の仙境ともいふべき黒平温泉に浴することは到底駄目である。

太古のこと。神様たちが三國山で戦争をした。流血は一方に流れて信濃千曲川となり。他は流れて武蔵の荒川となり。御神體は流れて上野の神流川となつたといふ神話がある。昇仙峽の創造者たる荒川の水源より登り切つた國師岳につゞく甲武信岳や三國山の一群は、甲斐と信濃と武蔵と上野との國境をなす山々だ。あまり大きくない地圖をひろげて見ると、この四つの國は唯一點に於て接觸し合つてゐる。その一點を擴大鏡にかけてみると、實にかういふ高山が塊つてゐるのである。それに隣接して登山家憧憬的になつてゐる奥千丈岳や金峯山があるのだから、昇仙峽

八三



を採つたついでに、これらの山々を征服することは壯快だが、それは一日や二日では逆も出来ないし、女子どもには思ひもよらぬし、また足達者な男でも案内者がなければ一人では危険だ。こゝには専ら昇仙の風光について筆者の見聞を書く目的であるから山の話は止すことにする。昇仙峽を一人で探らうとする人のための案内書だ。甲府から徒歩で一里八丁の和田峠。森林のあいだから振りかへつて見る秀麗な富士の姿もいゝが、自動車は甲府驛前から千塚村の方へまわり白山を通つて櫻橋へ出る。こゝで荒川は二つに岐れて、清川溪流と荒川本流となる。本流に沿ふて鷹の巢山の峭壁の下まで涸ると、峡谷の關門たる長潭橋となるのだ。工費十三萬圓で出来上つたばかりの有名な橋である。こゝで自動車を棄てて歩くことにした。四〇〇〇米の峡谷の奇はこの橋の上と下とから始まるのである。蒼々たる崖上の松。磊々たる澗中の石。峭脚をめぐる潭水が鬱蒼たる老松の影を映して緩やかに、ゆるぎ流れてゐる此の奥ぶかい長潭は、平地の苦熱を忘れしめ俗塵を洗ふに充分である。林のなかの茶亭から天神森の裏手へ向つて行くと、峡谷本來の面目はそろ／＼現はれて来る。それは水中の石だ。淙々として流れる碧潯には、實に驚くばかりの奇状を呈する岩石が、累々として夥しく横たはつてをり、綠樹のあいだには可愛らしい谷百合の花が咲いてゐる。この峡谷の特徴はむろん岩石にある。入口から既にそれがわかる。いはゆる石

溪だ。進み行くに従つて岩石は一層の奇を加へて来るのだから面白い。なかでも取りつきの大砲岩とか、人間の顔のやうな人面石。これは北米マサチューツト州トオトンのテツソネット人面石よりも精巧だといふ代物だが、道ばたから振り仰ぐと頭の上に聳えてゐる猿岩の、その翠壁にひびく不動瀧のそばの駱駝石。轆轤瀧の傍に突出してゐる富士山の模型のやうな富士石などは、奇石の代表者ともいふべきものださうだ。一対岸に見ゆる臥龍松から綠蔭の五月雨岩へ轉じた眼を羅漢寺山の中腹に移すと、これはまた奇怪な岩にぶつかる。恐ろしい大きな圖體の青龍が山から蜿蜒り下つて溪流へ頭を突つ込んでゐるやうな恰好だ。あとで聞いたのだが、これは輝石安山岩が花崗岩の割れ目に沿ふて噴出して出来上つた柱状の筋理に、苔が生へて龍の鱗のやうに見えるのだといふが、いかにもグロテスクだと思つた。立派な地質學の標本だ。それから登る岨道を天鼓林——松林の路を力一ぱい踏みつけると鼓の音がするといふので、さうした名稱がついてゐるんださうだが私は経験しなかつた——から羅漢寺橋を過ぎ、橋の向側の山麓に羅漢寺を眺めて暮石の後ろへまわり、全勝峰の下から石門のまへに出ると、そのあいだに、先刻の登龍岩とは裏表の見當に鞍掛岩といふのが、羅漢寺と白砂山に夾まれて欵立してゐる。鞍のやうな形の大岩石だ。その白砂山の右に奥ぶかく窪んだところが羅漢寺谷といつて、以前はこゝに羅漢寺があつたさう



だが、山火事のために焼けたので、その後は現在の場所に移されてゐるといふことである。弘法大師の御作といひ傳へる木彫の五百羅漢が安置され。昇仙峽中の一名勝となつてゐるが私は訪れなかつた。羅漢寺谷を分け登つて彌三郎岳に出る途中に兜岩といふのが直立してゐる。登つて行けるところではない。險阻な山だ。その山から展望臺の麓の見當に此の峽谷の開拓者長田圓右衛門翁の碑と、溪流を隔てゝ相對するのが夢ノ松島。陸前の松島の島を一つ持て來て絶壁へくつつけたといふ見かけで、水の上にそゝり立つてゐる。その松の岨つゞきに、これも峽中の一奇勝となつてゐる石門があるのだ。天狗岩のほと。岨から轉落した巨大なる岩塊が、他の岩塊に支へられて崎異なる潜り門を造つてゐる。そこに岨嶮として斬立し、空飛ぶ鳥を脅かしてゐる大峻壁が峽中最大の岩壁といはれる覺圓峰で、溪流を間に仰ぎ見る驚嘆すべき面貌の奇怪な天狗岩と相對してゐる。天龍峽の龍角峰。鹽原の天狗岩。鬼怒峽の盾岩にも匹敵すべき大偉觀だ。その巖頭に疎生してゐる松を下から眺めると極めて小さく見える。何處から何うして攀ぢ登つたか、昔、覺圓といふ坊さんが其頂上で坐禪したさうな。この險阻の裾に跪伏燈局算を亂してゐる岩石のあいだを、回り越へ潜りまわつて奔洩しながら谿水は流れ、深い靄が立ち罩める。石門を出たところが雲虹瀧となつて、天狗岩の下から瀧を左に俯瞰しながら溯ると、岩に激する急湍に架けわたした

高橋が見える。昇仙橋だ。峽谷の入口から此處までの蹊道が一里四丁だといふ。橋の上から遙かに奔流を見おろすと、水中に蟠る石骸の一つが特に浮いてゐるやうに思はれる。それが浮石である。橋を渡つて通天門いふ洞門へ登らうとする途上。右手の谷へど、と落る飛泉の轟きが聞こえる。仙娥瀧がそれである。橋を渡らずに谿谷に沿ふて溯り、眩岩の頂上から瀧を俯瞰するのもし。途中から瀧へ下つて、荒川の本流と御嶽川と合した水が、眩岩と鏡岩との竅隙を三段に折れ屈しながら落下する優麗な姿を濛々たる煙霧の裡に仰ぎ望むのもし方法だ。瀧の上の洞門から小さい路が彌三郎權現まで開かれて、下道ヶ原へ通じてゐる。峽谷探勝家が千仞の高所に登つて金峰山や南アルプスや甲府盆地を展望するには持つて來いの場所であらう。

私は此の瀧壺の淵岸に腰かけて、甲府で買ったサンドツキツチを食ひウキスキーの小瓶を傾けながら眺めたものだ。長潭橋から此處までの道程一里五丁。この一里五丁の間を昇仙峽と稱するのであつて、これから先は峽谷の趣がだんだん變つて行く。谿道もまた物見遊山氣分では進みにくいほど峻しくなつて來るのだ。東京からであるならば勿論だが、甲府界限からでも日歸りの豫定で來る人は、この瀧の土流にある猪狩の部落——甲府電力會社の發電所が工事をしてゐた——そこを過ぎて二十町ばかり。この間に荒川沿岸に手綱瀧といふ物凄い瀧がある。これは古生層



の粘板岩を浸蝕した大きな瀧壺だ。これから下川窪までは輝石安山岩の柱状節理が非常に發達し、上川窪から中津森山、上黒平から乙女坂礫山へ出る荒川の峡谷は可なり峻しくて行きにくいのである。私は御嶽川に沿ふて北行し御嶽の部落に出で金櫻神社へ詣でた。大黒屋といふに名物の蕎麥があつてなかく、美味い。金櫻神社は素盞鳴尊、大己貴命、少彦名命の三神と日本武尊を祀つた壯麗閑古な古社である。左甚五郎の作といひ傳へる本殿の昇龍や降龍の彫刻。武田勝頼寄進の能面などは珍らしい。昔は御岳千軒とも謳はれるほど賑やかな場所であつたさうだが、今は少かに遊覽、登山者相手の宿屋、土産物賣店などが靜かな一廓をなすばかりである。夏は全く蚊がらないので、こゝへ避暑する者もあるし、近年は學生が勉強に来るさうだ。私がこゝへ來たのは五月の末で、合服一つでは少し寒いくらいだつた。この縣社から御岳の小町へ引返し、我貴山と蠟燭の奇岩を右左に見ながら、展望道路の下道づたひに八王子峠の八雲神社へ出る。御岳バナラマの頂上には雪があつた。そこから彌三郎岳へ攀ち登ると、昇仙峽は遙かの脚下に横たはつてゐるのので一望のもとに收める壯快さを味はふことが出来る。南には甲府の平野を隔て、雲間に富士が見えるし、西の空には南アルプスの連峰が望まれる。北には木賊峠を前にした八幡山、金峰山、朝日岳、國師岳も指呼の間だ。八王子峠から南下すると清水平の三聲返し、兜岩、鞍掛岩、刀拔石

の奇勝がある。そちらへは行かずに、二十餘丁の岨路を再び仙娥瀧へとつて、元來た道を長潭橋へ引返すならば、行程一日で足りるのだが、さうでなくて、御岳の町から清川通りへ出るとか、或はそこから二ノ瀧、一ノ瀧を右に、猫坂を登つて黒平温泉に浴し、いはゆる奥昇仙峽の幽奇を探りつゝ四里の路を金峰山へ登るとか、または猪狩村から猿渡の瀧へ出て荒川本流を溯るのも興味がある。曰く傘蓋瀧に骨の洲。曰く銀鈴の瀧に蛇ヶ淵。瀧あれば必ず淵あり。淵あれば必ず瀧ありだ。琵琶瀧。釜裏の瀧。蛇淵の瀧を経て下黒平から黒平温泉へぬけるコースを俗に野猿谿と稱してゐる。或はまた猿渡の瀧から北、板敷川の流れに沿ふて溯るならば、斷崖絶壁の眺望は愈々深まるのだが、いづれにしても一日の清遊といふわけには行かないので、このコースを取つて進む人は少いさうだ。御嶽を終點にするのが普通になつてゐるらしい。



## 天龍峽

九〇

天龍峽を振出しに、信濃の山岳の雪に會はうといふ旅だ。名古屋から木曾路をのほり、鹽尻で東轉し辰野で南回し、白衣をまとへる南アルプスの美しい姿を電車の窓に迎へながら飯田につく。上小傳馬町の路次の奥に民衆詩人社といふ金看板をかけ吊したる若き友々(T・K・M)の本城を襲ふたのである。

「よう。小父さん。珍しいな。何時こつちへ來なつた？」

「今着いたばかりだ。」

「偉う出しぬけどやないか。何か此方へ急用でもあつてか？」

「天龍峽見物だ。」

「さうか。ははは。ま、よく訪ねて來てくれた。さあお上り」といふ條までは、別に不思議とも何とも思はれなかつたが、さて上り込んでマントを脱いで、胡坐をかく段になると、みんな吃驚

して眼を丸くする。何處でもさうだ。生れてはじめつの法被……私は大阪朝日新聞社の法被を着てゐるのである。

「何だ……その姿は？」

「見りやわからず。新聞配達夫だ。」

「たいそう凝つたもんだねえ！」

「感心しちゃいけないよ。可哀相に！道樂にこんな風をしてるんぢやないんだけ。」

「ははは。商賣か？」

「さうさ。緊縮不景氣！文運つたなく失業したんだ。」

「呑氣な失業者だね。」

「何が呑氣だい？」

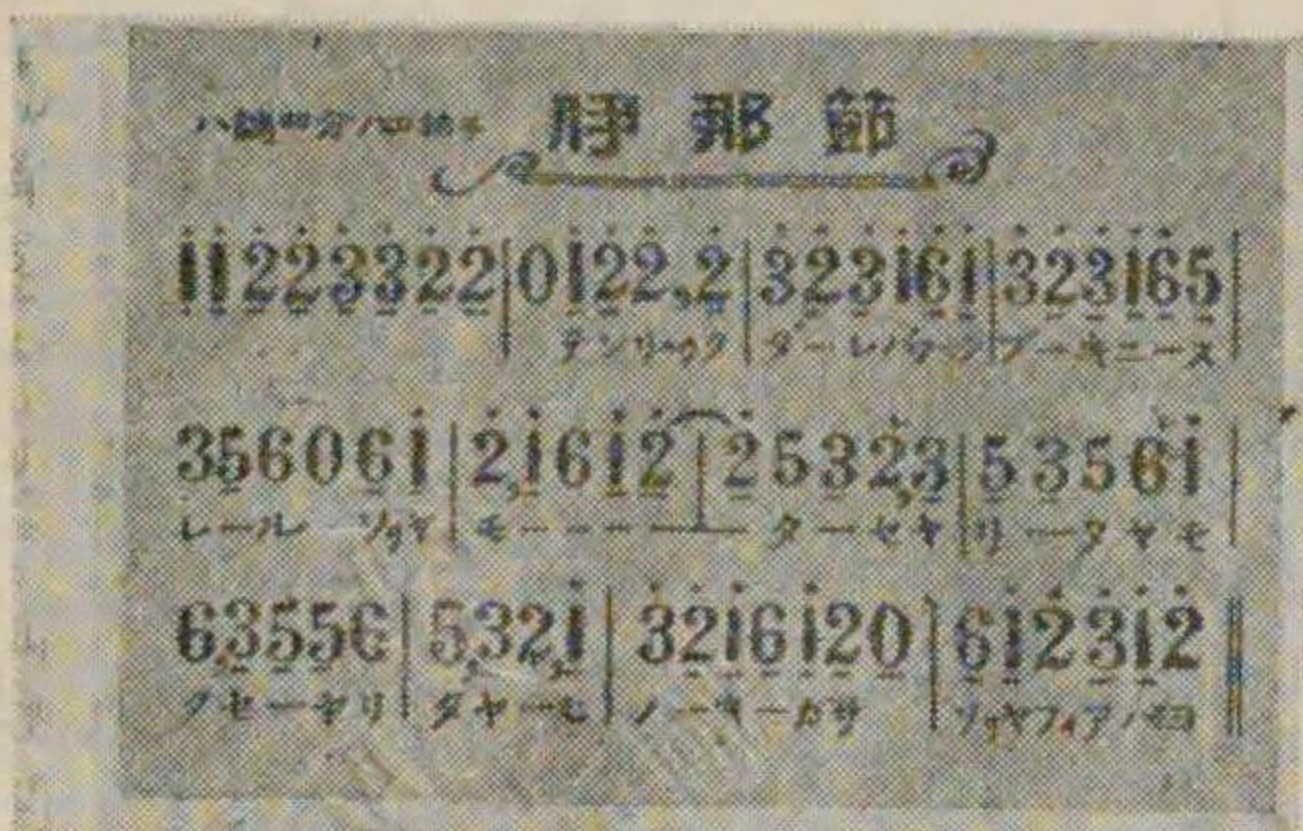
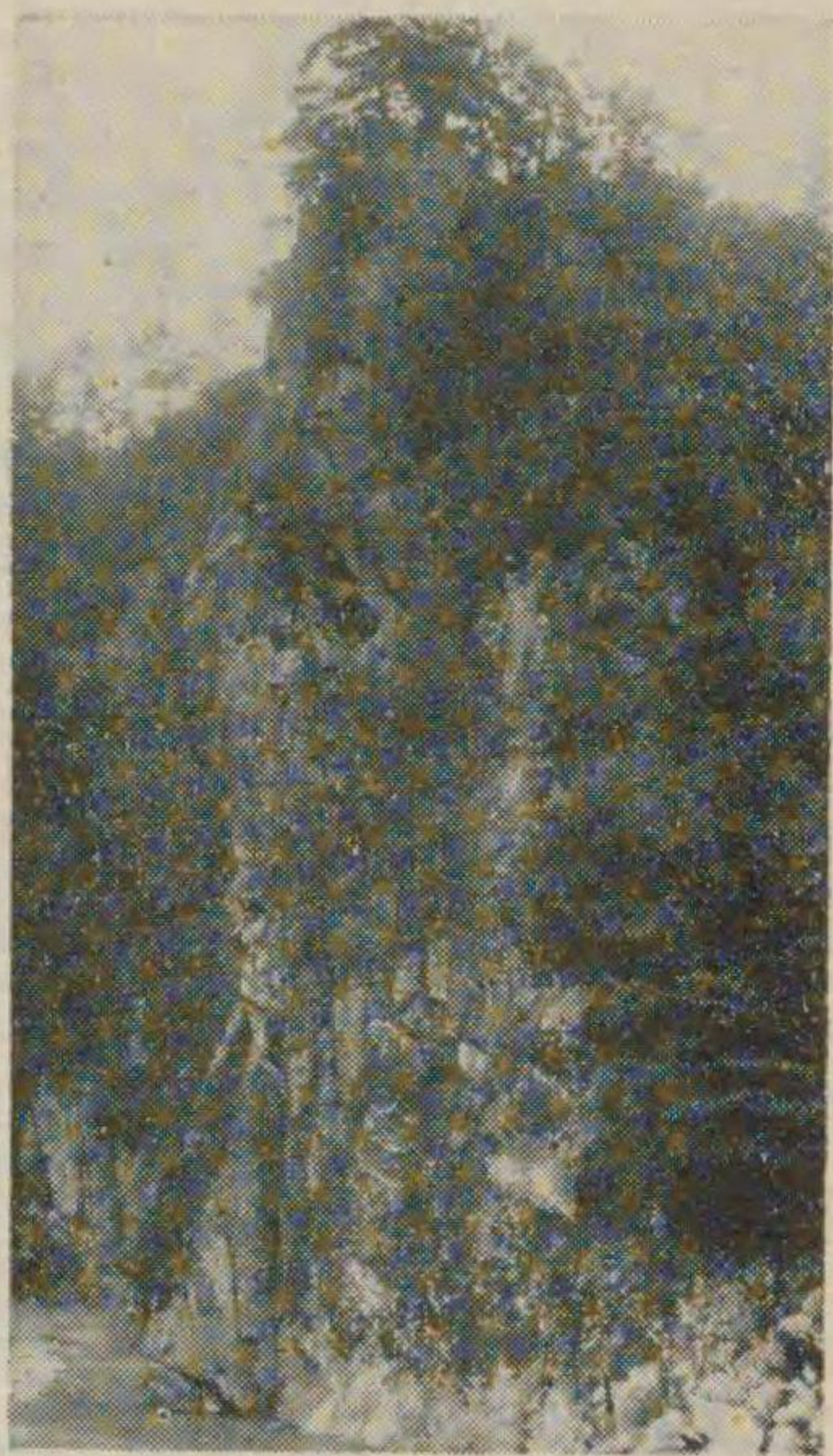
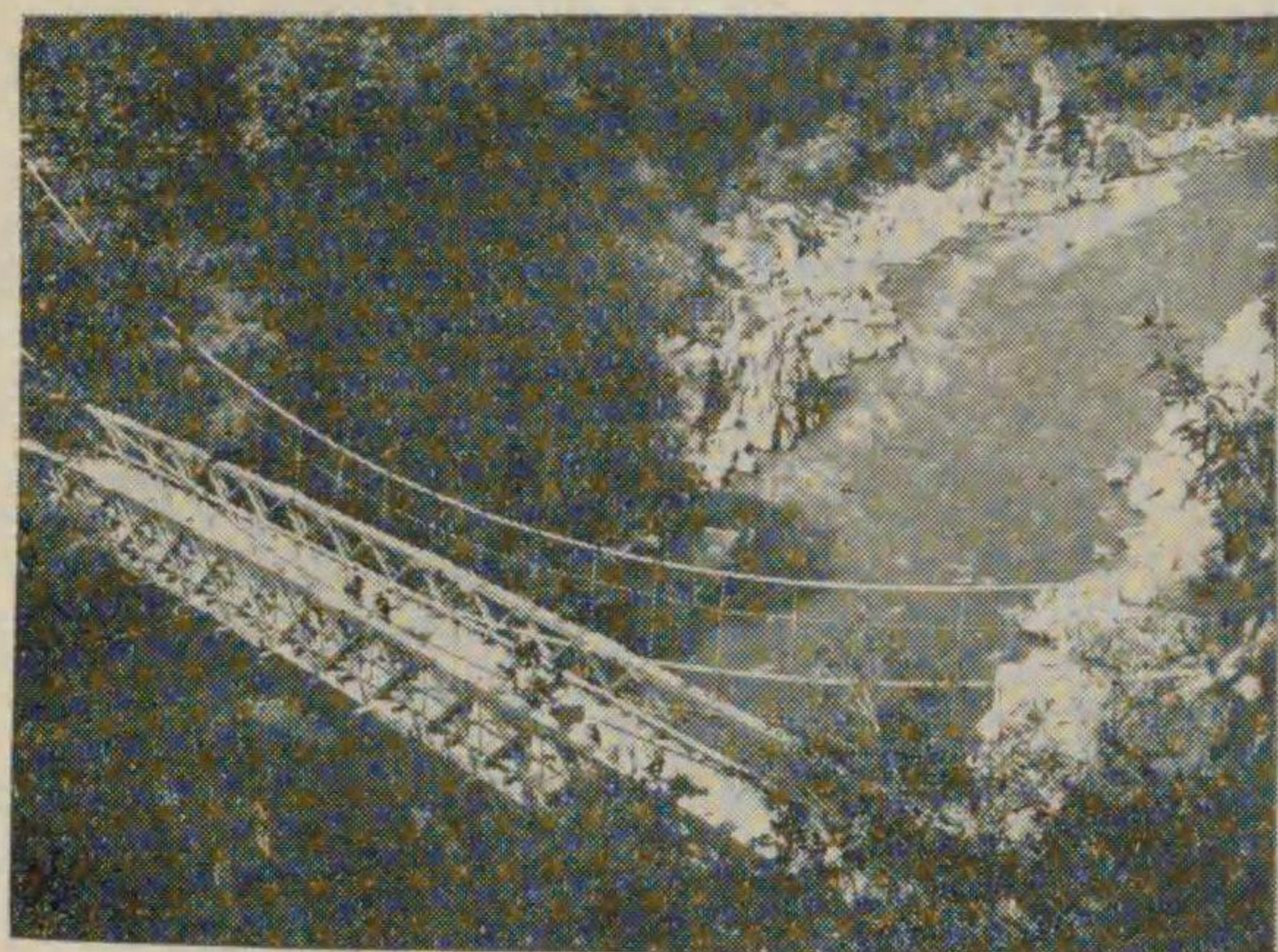
「天龍峽見物てんだもの。」

「それは諸君の懷中をあてにしてゐるからさ。小父さんは一文なしだ。さうは見えないかね？」  
「さうさな。一文なしには見えるかも知れないが、新聞配達夫には見えないね。變だね。小父さんのその野暮くさい髯面ぢや似合はないよ。間がぬけて不景氣で、威勢がなくなつて、よほくして



↓橋射姑

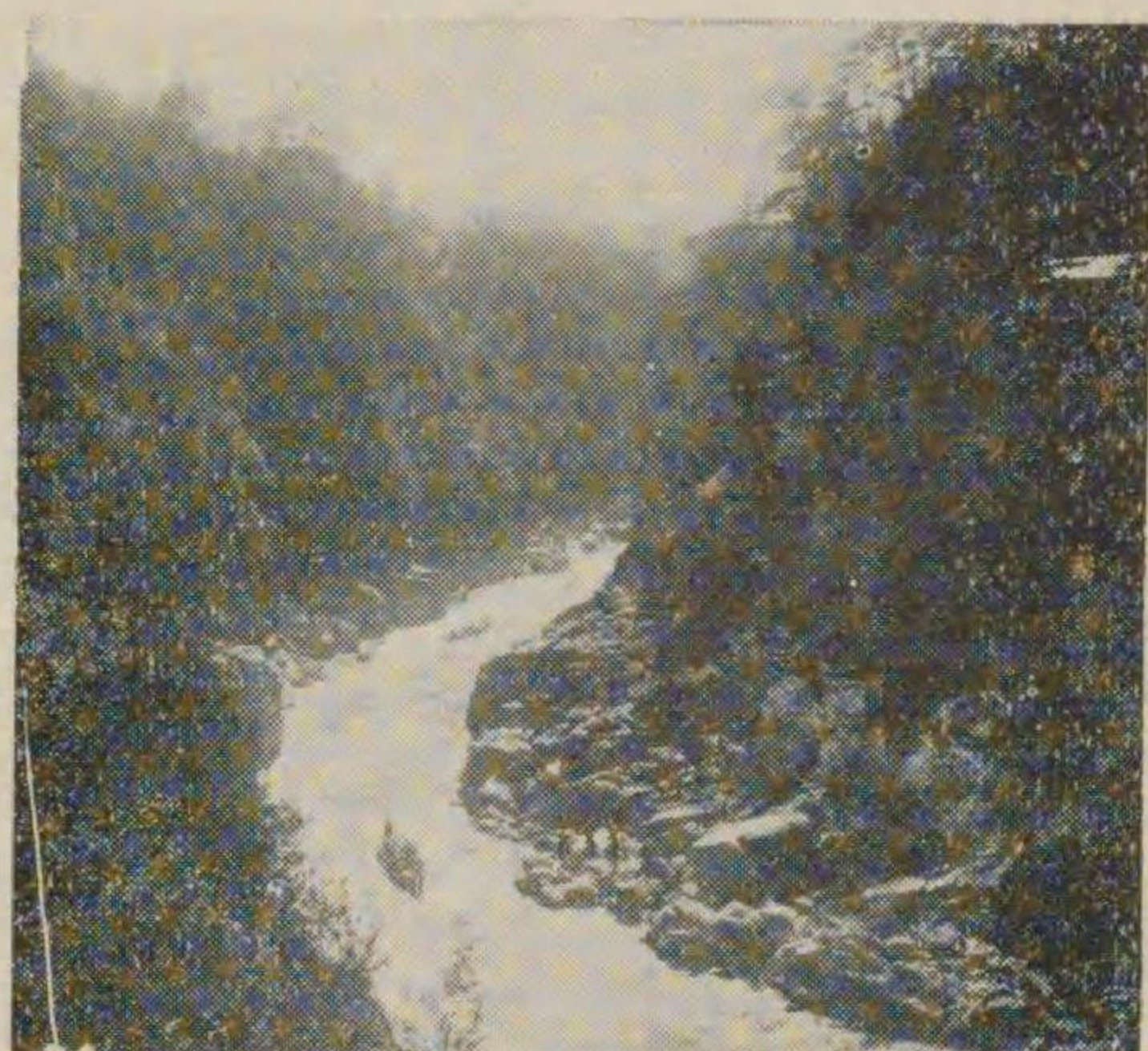
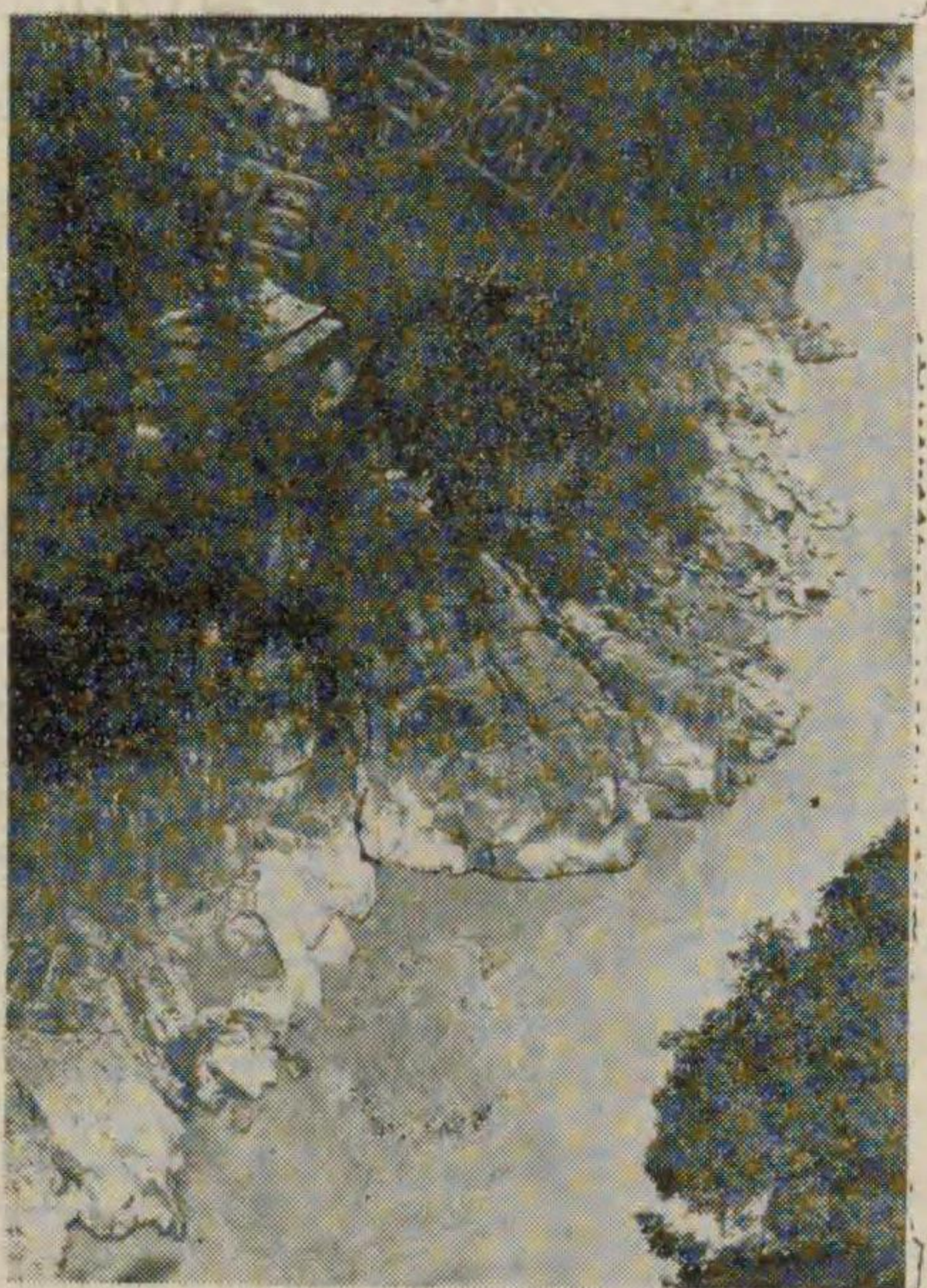
峰角龍峽龍天→



伊那節 ↓



姑  
近附橋射 ↓



←閣峽仙

ら。法被（ハッピ）の文字と目の出の印がなけりや、立（ツツ）坊といふところだな。」

「ははははは。さうかな。これで大阪をたつて、彼方此方ひつかゝりながら漂來したんだがね。京都までは青切符を買つて二等車へ乗つたら、車掌が愚老（カシ）の姿を見て、三等車は彼方（カチ）だといひやつたよ。それから此方は赤切符なんだが、汽車の中で鮮人労働者の一隊と仲よくなつた。この連中は近江の水口で土木工事をやつてゐるところへ働きに行くんださうで、仕事がなかつたら、お前も一緒に水口へ稼（カ）ぎに來ないかと親切に誘つてくれたぜ。愚老（カシ）を新聞配達と見たか何（ヒ）うかは知らんが、法被（ハッピ）階級者の片われと思つたことは確かだ。名古屋とその附近の町の一流だか二流だか知らんが、宿屋では二度も玄關ばらひを食つたから、こいつはしめたと思つたさ。愚老（カシ）はこれでも新聞配達夫のつもりだよ。大阪朝日新聞社で借りたやうな貰つたやうなこの法被（ハッピ）を携へて、太秦の日活撮影所へ流れ込み、舊友龜原嘉明……知つてゐるだらう？……龜原氏に腹掛と腹引とを工面してもらつて、姿を拵へたところへ山本嘉一氏やら横山運平氏が來合はせたから「どうです？新聞配達夫に見えますか？」と訊くと「そつくりです。」といふ觀察だ。お世辭もあらうが、まづ大丈夫と思つて悦に入つたものだが、駄目かい？」

「ははは。まあいゝや。新聞配達夫がそれほど御意に召したら、さう見て置かうよ。だが何だつ



てそんな頓狂な眞似をするんだね？」

「陽氣の加減だ。しかし着て見ると寔に體が引緊つて身輕でいゝな。ははは。時に何うだい？信州の景氣は？」

「往生だ。絹絲が安いんでね。まあ小父さん、見ておくれ。われ／＼農村の青年の年賀狀を！」といひながら、書きかけの葉書を二三枚とつて私に見せた。年頭の辭にはいはく「謹んで絹死苦の新年を賀す。」またはく「絹絲憂苦の新年を賀し奉る。」といった調子だ。なるほど此奴はあんまり陽氣でない。

◇

その絹絲をつくる工場……年ごろの娘が二、三百人も塊つて花を敷いてゐる製絲工場をイの一番に紹介されて、法被の親父、さすがに恥かしくなり引退つた翌る日のことだ。凸凹したこの山間の町の恰好が珍らしいので、一番目抜の場所へ寫生とおいでなすつたが、法被姿で大きなスケッチ帖をひねくつてゐる方が、よつほど珍な圖であつたらしい。四方八方から群衆に取圍まれて、寫生どころか身動きもならず、這々逃げて歸ると、私の漂來を誰か知せたものと見えて、T・K・Mたちとも知り合といふ東京朝日支局の桑原碩郎氏が私を訪ねて來てをられた。此方から敬



意を表しに行かうと思つてゐた矢先だから、酒有る所これ故郷。酒のむ大将これ兄弟……でもないが、茶碗酒を擧げながら茶碗酒のやうな話となつて、桑原さんがふとかういふのである。

「明後日は大晦日ですな？」

「御尤です。その翌日から昭和五年となるのも止むを得ないやうですな。」

「へへつ。さうと心得てゐらつしやるなら伺ひますが、一たい何うした風の吹きまはしで、今ごろこの附近を徘徊しておるでか？」

「いや。申し上げるほど凝つた趣向も因縁因果もありやしません。雪見です。」

「雪見？……へへ。御苦勞な話だ。」

「おまけに古くさい粹興だ。今どき雪見なんて、いづくの里にも流行はしませんからな。」

「そんなに雪がお好きですか？」

「なアに。時代ばなれだか、時代おくれだか……それが好きなんです。人間。さういふ風に出來上つてゐる。こつちへ來る途中で田舎藝者に惚れられましたがね。十年に一度か五十年に一度そんなことがあるかと思ふと、その藝者の年齢なるものが五十二とか三とかいふのだから、お茶のみ友達に選定されやうとした髭面、六十歳ぐらゐの爺さんに見られたことは確かだ。それほど老

けちやるないんですがね。」

「ははは。」

「ところで、今度は私の方から伺ひますが、この邊に雪景色の變り種はありませんか？」

「さうですなア。」と桑原さんは、ちよつと考へたが「變つた雪景色もないことはありませんが、

逆ものことに索道の上かち下界の雪を見るといふ寸法は何うです？痛快奇抜ですよ。」

「なるほど。それは痛快奇抜らしいな。」

「乗りますか？」

「大いに乗りませう！」

索道が何んなものか知らないのだから、淺草公園の木馬にでも乗るやうな氣で威勢よくいひ放つと

「それぢや、索道會社の方へ電話を掛けて置きませう。多分動いてゐるだらうと思ひますが、明朝十時ごろにしては何うです？」

「や。結構！萬事よろしくお頼みいたします。」

「ではそのお積りで。」



といふことになつて、桑原さんが歸つてしまふと、この相談を黙つて聽いてゐたT・K・Mの三人が、いかにも呆れかへつたやうな面相で

「おい、おい、小父さん。」と云ふのだ。「小父さんは索道と云ふものを見たことがあるかい？あるまいな？」

「ウン。まだ見たことはない。」

「さうだらう。だから大いに乗りませうなんて無鐵砲なことがいへるんだよ。おどろいた。あいつに乗つて非業の最後を遂げた向ふ見ずなんか幾人ゐるか知れやしない。」

「おどかすなよ。」

「おどかしやしないよ。大體あれは荷物を運ぶためのもんで、人間は絶対に乗らない。索道會社の社員だつて怖がつて乗らないくらゐだ。命懸けだからな。」

「そんなに危いものか？」

「さうさ。いくら何でも索道乗りだけは願ひ下けにしてもらひたいな。悪酒落すぎるよ。あんなところで小父さんに寂滅された日には大迷惑だ。むしろ天龍峽あたりの姐さんのお酌で雪見酒と行つた方がよつほど乙リキですぜ。」

「それもさうだが……弱つたな。桑原氏が忙しいなかに便宜をはかつてやると仰有る。今さら廢しますといふのは卑怯だし、乗つて見たくはあるしさ。考へて見ると東京では、もう、そろ／＼家のマダムが死にもの狂ひになつて、寄せ來る鬼と戦闘開始の準備にとりかゝつてゐるだらうかな。亭主たるもの、いかに圖法螺といへども、巨燵に入つて温もつた馬鹿面を、山の中の姐さんのまへに安閑と晒してゐられもすまいて。このさい多少は際どい藝當でもやらなことに義理がわるいや。なあに心配したもんぢやないさ。一句うかんだ……酒や女やそれ何ものぞ今日の雪……とは何んなもんだ？」

「偉い馬力だのう。」

勝手にしろといはぬばかりには、T・K・Mたちは苦笑した。



二階の高屋根から崩れ落ちる雪の塊。ドサリ／＼と軒庇の上で角力をとるややうな音に枕をゆすぶられて眼をさますとT・K・Mたちはまだ巨燵のなかで土籠ちかごのやうに眠つてゐる様子だが、時刻はすでに七時を過ぎてゐるので、跳ね起きて廁へかけ込んだ。四方の壁に煤けた古新聞が一ぱい貼りつけてあるのだ。用をたしながら、ちやうど眼の前の個所を見るときもなく見る、と、いか



に偶然とはいひながらも、索道會社の人夫が索道から墜落慘死した記事が二つも出てゐるのだからオヤ／＼と思つた。ゆうべはT・K・Mたちにあんなに脅おどかされても、何の驚くものかと高をくゞりながら悠暢にかまへてゐるが「これを見る。」と警告するやうな、この新聞記事の皮肉な出現には流石に氣持をわるくした、が、これしきのことですぐ青くなつて尻ごみしたら後世の物笑ひだらう。そこで厠を飛び出すと顔も洗はず飯も食はずに、雪風を突切りながら飯田驛前の桑原氏邸へ馳せつけた。そこまでは鬼も角も勇ましかつたが、「これから乗らうといふ索道はこれです。」と桑原さんに寫眞を見せられるに及んで、その冒険さ加減の豫想以上なのに、すつかり驚いちまつたのである。こりや大發だ。冗談ぢやない。こんなものとは思はないからこそ乗りませうと約束はしたが、こんなものに乗つてたまるものか。寒くなつて來た。どだい何百尺あるか何千尺あるかわからぬ深い谿谷の上空を、山頂から山頂へと架け渡された二條の鐵索があつて、鐵索と一緒に移動する鐵籠がブラさがつてゐる、鐵籠に乗つてゐる黒い人影が一粒の胡麻のやうに小さく見えてゐるといふ寫眞だ。何でもこの天龍川の方の低地に位する砂拂といふ地點から木曾の山脈を越えて遙か向ふの何とかいふところへ通じてゐるんださうだ。

「こゝに小さく見える黒い人間の影が、私とそれから寫眞師の藤井紫苑といふ人です。一昨年の夏でした。『暑熱を超えて』を新聞でやつた際に、私はこの索道の油注あぶらましになりました。索道に乗るだけでも冷々するのに、立ち腐れの槽へ飛び移り飛び移りして油を注さなくちやならないんだから、全く猿仕事の冒険でしたよ。おまけにしばしばの停電……いや。水の力で動くんだから停水かな……短くて二三分。長いときには七八時間も停る。たつた一人、こんな中空にブラさけられてゐるときの寂しさ心細さといつたら、とても経験者でなければ想像がつきまみん。………：ほんたうに泣きたくなる。怖ろしくなる。その恐怖に打ち勝つために、空から下を見下したところ、土地の高低がわからないから、いきなり飛びおりの氣になるんですな。飛び下りたら最後だから、餓死するか凍死するまで、も、やつぱり凝乎と我慢して動き出すのを待つてゐるが安全です。ははは。然しこんな異例も稀にはある。いつでしたか非常に高い處で停られた上に猛烈な雷雨に襲はれた男があるのです。かうなるともう助かる望みはない。が、どうせ死ぬなら運試しに飛び下りようと思つて、遙の脚下を見下すと、幽かに砂地らしいものがある。川だ。そこで意を決した。随分沈着な男でしてね。着物を脱いで落下傘パラシュートのやうなものを造り、それを手に持つて思ひ切り飛び下りたところが、運よくも深さ五、六尺の川の中へ墜落し、百死に一生を得たといふ、本人の直話です。が、餘程怖かつたと見えて、索道などには二度と再び乗る氣がしないと云



つてました。ははは。さういふわけだから私が油注しの真似をしたときなんか、索道會社の方では、生命の保證はいたしかねるから、萬一不幸な事があつても、會社へ苦情を持ち込むやうなことは致しませんと云ふ一札を入れてくれ、といふので書いてやりました。ははは。」

「ははははは。」と、此方はすでに亡者のやうな顔に、白骨のやうな笑ひをのせながら

「さうすると、私もやつぱり一札認めて差入れなくちや、いけないわけですか？」

「いや。それには及びませんよ。この寫眞のやうな遠方まで登らなくても、砂拂から次の驛に至るまでに、雪見は十分出來ますからね。私も行きませう。」

と桑原さん。私は心からホツとした。

「それは有難い。實は先刻からの物騒なお話を承はつて、内心怖れをなしてゐたのです。こんな高い處で一分間でも索道にサボられた日には、この凜烈な寒さと雪ではたまるまい。此方から話を持出して置きながら、こいつは何うしたもんだらうと思つて心配してゐました。文士の高野豆腐や小説家の寒天などは、あまり結構な品ぢやありませんからね。ははは。」

「ははは。」

「さう決つたら早速出陣ませうや。」

「ちよつと待つて下さい。藤井紫苑氏が來ますから。先刻藤井氏の助手に來てくれるやうに頼んだんですが、索道乗りと聞いて俄に腹痛だつてんで、ははは、御大が出馬してくれることになつてゐるんです。まあお茶一ぱい。」

座敷には驚の聲音。硝子戸の外は吹雪である。



その吹雪のなかを、飯田郊外砂拂の宿場へ殺到したのは、自動車のお蔭様によるのだから何の苦もなかつたが、骨を刺る寒さに身顫ひ止まず、こりや敵はん、一杯やらうといひ出したお蔭様あによつて腹を切つたのは桑原さんだから氣の毒だつた。飯田名物五平餅の元祖といふ掛茶屋ここにり。血めぐりの景氣復活したところで、雪に埋もれんとしつゝある殺風景な小屋……索道發着所……へなだれ込んだ。電話で通じてあつた話が、此處へまはつてゐたものと見えて、四五人の荒くれ猛者が、こいつら物好きな馬鹿だなアといはぬばかり、苦笑ひしながら、焚火へあたれといふので、一あたりあたつてから、途出の杯だか別れの杯だか、出發して見なければわからぬ杯を汲みかはし、まづ經驗者の桑原さんと紫苑氏が、スタートを切るべく索道へ乗り込んだ。索道は絶えず無氣味なほどのろ／＼動いてゐる。随分のろいものだなアと思つてゐるうちに、第



一の櫓を打越えて、二人の姿は宙に吊されたまゝ、降りしきる雪の彼方へ隠れてしまった。お次は私の番だ。暫くすると小屋の暗處から、一俵の炭をつんだ大きな鐵の箆が、直徑七分ぐらゐの鐵索に一本の鐵の棒でブラさがりながら徐々とやつて來た。石油の空罐に火を入れたのが、鐵の箆の尻に下けてある。こいつは自分に對する猛者連の親切だらうと思つたから、禮をいつて乗つたところが、名前を横田樹夫君と申す兄哥株の快漢が、私に向つて一場の訓示を試みるのである。「おい。先生。しつかりつかまつてるんだよ。途中で止つてもすぐ動き出すから慌てちやいけな

いよ。何んなことがあつても飛び下りるんぢやないよ。」

「有難う。しかし大丈夫かね？」

「はつはつ。どうせ明日は大晦日だ。」

「どつちみち助からんと仰有るんだね？」  
ドツと笑ふ人夫らの聲を背なかにうけて、移動しつゝある索道の、鐵の箆の上の私は第一櫓へ向つた。前方を望むと此方から動いて行く鐵索と向ふから動いて來る鐵索とが、山越え野越え、次第々々に高まりながら涯もなく蜿蜒と續いてゐる。寔に壯觀だ。尻の下を覗くと一帶の平地で桑の枝らしいものが、雪の表面に七八寸尖り出てゐる。第一第二第三の櫓あたりまで登つての

くと、索道と地面との距離が著るしくなり、雪の原に點在する百姓家は眞綿に包んだ玩具の如く笠をかぶつた雪靴の百姓は松茸の如く小さく見ゆる。成るほど此奴は變つた雪景色だと思つて喜んでゐるところが、此方の眼のせいか何のせいか、天地四方悉く眞つ白くなつちまつて、まさかと思つてゐた索道がピタツと停つちまつたから驚いた。「さては停りやがつたな。」ぐらゐの驚きで濟むかと思ひながら、凝乎としてゐるが、五分たつても七分たつても動く模様がない。話に聞いた通り厭に寂しい氣持で、そろ／＼心細くなると同時に、降る雪の冷たさが身に泌み入り、おしまひには向ふからやつて來る索道の荷物までが羨ましくさへ感ずるほどだから、炭俵のわきに置いた酒を燻の口から呷りつけて絶叫するに至るのも怪しむには足りまい。

「おい。飛び下りるぞツ。」

「待て！つ。もう十分の我慢だア！」

雪のほかには全く何も見えない向ふの上空から微かな聲が飛んで來たのは一寸意外だつた。何ぞ知らん。私から左程離れてゐないところに山があつて、その山頂の丁場には桑原さんと紫苑氏が索道の動靜を知らながら私の到着を待つてゐたのだ。それは長い十分間に違ひなかつたが、索道再び動き出して間もなかつたのである。どうやら助かつた。桑原さんの曰く。



「ははははは。痛快奇抜な雪見だつたでせう。活動寫眞にもこの索道を利用して逃走追跡の場面を撮つたら面白からうと考へるが何うです？」

「同感です。少くとも俳優各位に今の私の絶叫的場面の経験を嘗めさせたいですな。妙な氣持でしたよ。ははははは。」三人は小屋の焚火を圍みながら、下りの鐵策を待つことになつたが、これから飯田町へ戻つて先の計畫は何うかといふ桑原さんの質問だから、いきなり松本へ走つて、あの邊の山で雪見の段取りだ、それについては大阪の淺野さんから松本のMといふ人に會ふべく紹介狀を頂戴に及んで來たと答へると、そいつは好い鹽梅、自分も松本在の淺間温泉で同志と會合する手はずになつてゐるし、M君も來るはずだから、一緒に出掛けないかといふ説。物事もかう調子よく運ぶと寔に始末がいゝなア、と膝を叩いてお供を願つたわけだが、やがて索道で砂拂へ逆戻り、飯田の中央で一先づ別れてT・K・Mの壻へ歸ると同時に運命一變しちまつたのである。

「やあ諸君！諸君には思ふ存分厄介をかけて本望だつたが、愚老はこれから桑原氏と松本へ赴いて單身山へ登るよ。」

「無茶なことを云ふな。小父さん。どうやら息災に歸つて來たと思つて喜んでゐるとそれだ。」とT・K・Mがまた呆れかへつて反對したのである。「天龍峽は何うしたのさ？お中止かい？仕様が

ないな。こゝまで伸ばして來て、肝腎の名勝を賞めて行かないなんて法があるかい。行かう。行かう。今から行かう！」

かういふ傾勢になつて來た勢ひ、私は桑原さんへ電報を打ち出して、驀地に天龍峽へ向つてしまつたのである。

「天龍峽の風光は巖頭に俯して靜止するその姿を見るよりも、一葉の輕舟に身を托し、仰いで意のままに、その大觀を味ふにある。定期遊覽船は毎日辨天より姑射橋の十勝まで下る」と案内書にはある。天龍峽を探るには此の町から自動車を驅つて、天龍川に跨る辨天橋のほとりから遊覽船で下るところに感興があるとのことだが、私たちは飯田町から自動車で時又へ向ひ、そこから龍角峰へ歩いた。案内してくれたのはT・K・Mのうちの大将株T則ち田中幸雄君である。二人は龍角峰の巖頭に蹲つて松の蔭から遙かに咆吼する奔湍を俯瞰した。

天龍くだければ飛沫しよきにぬれる。特たせやりたや檜笠

樹木と岩石と流水の取合せに、夥しく變化のある趣を見せてゐるのは、まことにこの峽谷である。流れを夾んで峙立する兩岸の峭壁の眺望に於て、先づこのへんが一番優れてゐるだらうと思はれるのは、此の龍角峰附近らしい。そこで嵯腹の小道をつたつて比處へ來たのだ。岩石は怪貌を凝



らして水を脅し、流水は奇態をつくして岩を嚇す。光景は寔に目を奪ひ魂を冷すべきものがある。こちらの方はよく見えないが、對岸の展望はひろい。仙牀盤といふ箇所から少し上手によつて、蔚蒼たる密林に隠れた小さい家の屋根が見える。

「あれが仙峽閣だよ。」

「ハハア。あれかい。」

その仙峽閣の主人公とこの若き詩人とが知合ひであるところから、どうだ、ちよつと立寄つて見やうではないかといふ寸法で「これから、こちらへ参ります。」といふ電話を飯田からかけた、ところが「寔にお氣毒ですが、今日は小學校の先生がたが集つて宴會をされますから、御案内申しかねます」といふ返事であつた。こちらは別に御案内申していただく量見ではないのだから、立寄りさへしなければ不都合はなからうと心得て來たのである。

「して見ると今頃はあの家で小學校の先生がたが、校長さんの音頭とりで、天龍下れば飛沫に濡れる、を演つてをられる時分だな？」

「さうせ。」

巖頭より去つて元の崖道を姑射橋へ取る。橋の根つけに朽色蒼然たる小さき家二三軒。塊つて

る。幸雄君が店をのぞいた。

「龍峽饅頭を賣つてゐるのは、たしかに此の家だと思つたが、今日はないらしい。」

「なくつて仕合せだ。この老齡になつて變な饅頭なんぞ食はされちや敵はんからな。」

「だつて甘いんだぜ。名物だよ。五平餅には感心したくせに。」

「まあいいよ。饅頭は願ひ下けとして饅飩でも御馳走にならう。この邊に蕎麥屋はないかい？」

「橋向ふの驛前にあるが、薄汚いぜ。」

「薄汚いのはお互様だ。」

天龍峽の水は何時もちう豊かに美しく澄澈してゐるか何うか知らぬが、賞めるだけのものは確かにあると思つた。姑射橋は峽澗名勝の秀逸なるものとしてある。悠々たる渦をまき紋を描いて流れる碧潭こゝにあつて、夾むところの鬱蒼たる斷崖と斷崖の間に懸けわたされてゐる。水面から何米突あるか、随分高く、おまけに大ぶんな年數を経て古くなつてゐるので、荷馬車のやうなものが通ると橋が震ひ、渡つてゐる人間まで震はせられるのは、いさゝか恐縮ものだつた。三十人以上同時に渡るべからずといふやうな警札が、橋桁に打ツつけてあつたが、一人十五貫と見て四百



五十貫の上は持ちきれないのかなと思つた。敢てこの橋を以て雅俗の境界を定めるわけではないが、橋を渡つてしまふと情ないほど下手に開けてゐる。イの一番に悲觀したのは天龍峽ホテルである。人造庭園にライスカレーとかコロツケの定價表みたいなものを堂々と建て、あるホテルといへば想像はつかう。このホテルの女將なる者が、誰の噂であつたか、天龍峽の女王といはれるる婦人ださうだ。飯田の知人も幸雄君も、折角だから寄つて見なさいといふし、「天龍峽へ行つたら、ホテルに寄つてくれたまへ、あそここの女將は自分が知つてゐるんだから、宜敷く言つてくれたまへ」と白鳥省吾君にすゝめられてゐた。元來、君子は女王に近づかず。まあ饅頭でも食つた方が風流だらうと思つて、ホテルの斜向ひの吾妻屋といふ小料理屋に入つた。そこから女中に頼んで、「白鳥君がよろしく」とのことを言ひ傳へさせた。「わざわざ有難うございます。東京へお歸りになりましたら、白鳥さんによろしく」とも何とも言はなかつたのは流石に女王である。龍峽小唄の新作者などは眼中にないらしいと思ひながら、料亭の前の驛を見てゐると、カフエーの女給らしいのが二三の客と連立つて驛の入口へ行く。

「この邊の女給もゴテゴテ粧つてゐるな？」

「女給？そんなものが何處にゐるね？」

「あれを見る。」

「あゝ。あれだ。ホテルの女將つてのは。」

天龍峽の面目は姑射橋から下流にあるのであらう。姑射橋を中心として探勝の客を送り迎へる垂竿磯、烏帽子岩、龍角峰、仙狀磐、歸鷹崖、芙蓉洞、炯々潭、姑射橋、樵蕪洞、浴鶴岩などを土地の人は龍峽十勝と稱してゐるさうだ。それを舟で探るには舟賃と辨當があれば充分愉快である。徒歩で見物するには、二本の足があれば澤山である。然しながら、われ等の今や將に饅頭をすゝらんとしつゝある界限の勝景を享樂するには、よほど膨れてゐる臺口を用意しなければ面白くないらしい。

【附】「伊那ぶし」や「信濃民謡集」によると「伊那高遠藩のお庫米は西山越えて木曾におくられた。馬追ひは高遠米を馬の脊に積んで、ことに秋から春へかけて何百頭となくつゞいてこの峠路を越えてゆく。全く人馬絡繹として、街道に滿ちたものである。海拔五千尺の峠のいただきへ來ると、御嶽山の靈峰が瞳に投じて來る。白雪皚々として碧空にかゝり夏なほ寒さを覺える。感激性に富んだ若者は思はず胸の悩みを心ゆくばかりうたつたであらう。往く者、還る者、きのふ分れ、けふまた逢ふ馬子仲間でもあつた。伊那節の囃言葉はこの掛聲であり挨拶で



あつたといふ。

この伊那節といふ名稱は最近に起つたもので昔は御嶽山節と呼び、専ら權兵衛峠附近に行はれその歌詞に至つては純朴、卒直な百姓の叫びであつた。他郷への進出は、明治四十一年長野市に一府十縣の共進會が開かれたとき、西春近の唐澤某氏が御嶽山節として、これを權堂藝妓に歌詞と振り付を習得させ、みすす音頭とともに宣傳したのが第一歩で、大正五年伊那風景探勝會が歌詞の懸賞募集を行つた。

「天龍下れば」などの歌詞はみなこのときに出來たもの「云々とある。

伊 那 節

嫁はにこくく夕餉の仕度

かいた蠶繭に月がさす。

○

私しや伊那の谷谷間の娘

かいここわがる子は産まぬ。

○

桑の中から小唄が洩れる

こつた聞きたや顔見たや。

○

取れたくよ繭がたとと取れた

ゆきの山ほどたとと取れた。

○

遙か向ふの赤石山に

ゆきが見えます初雪が。

○

神坂越へて來りや木通の口へ

つるべ落しの日が覗く。

○

惠那の高嶺に雨雲たてば

かない皆出る桑摘みに。

○

菅の小笠に峽の時雨

おくり迎ひの渡し舟。

○

谷の狭霧か絲挽く湯氣か

たけに日がさしや午の鐘。

○

あかね禱で桑つみ姿

やがて嫁入つて繭を取る。

○

嫁さ稼げよ秋蠶があがりや

つれて遊ぶぞ天龍峽。

○

天龍下りて川下見れば

まつが見えます濱松が。

○

濱へくくとつくだす糸は

いなな農家の玉の汗。

○

信州名物かすあるなかで

わすれしやんすな伊那節を。



こほれ松葉をあれ見やしやんせ

○

かれて落ちてても二人づれ。

一一二

天龍峽遊覽の行路に四種ある。其順路は左の通りだ。

【第一行路・駄科驛】―自動車一里半・二五分三〇銭―【天龍峽】（歸路は駄科驛に戻る）

【第二行路・駄科驛】―自動車半里・一〇分一〇銭―【時又】―船（二〇人前後）五里・二時間半―

艘四〇圓―【南宮橋】―徒歩一里一時間（近く自動車開通）―【東條】―自動車 八里半・

三時間二圓七〇銭【駄科驛】

【第三行路・駄科驛】―同前―【時又】―船（同）二〇里六時間半一艘百十圓―【中部】―自動車五里一

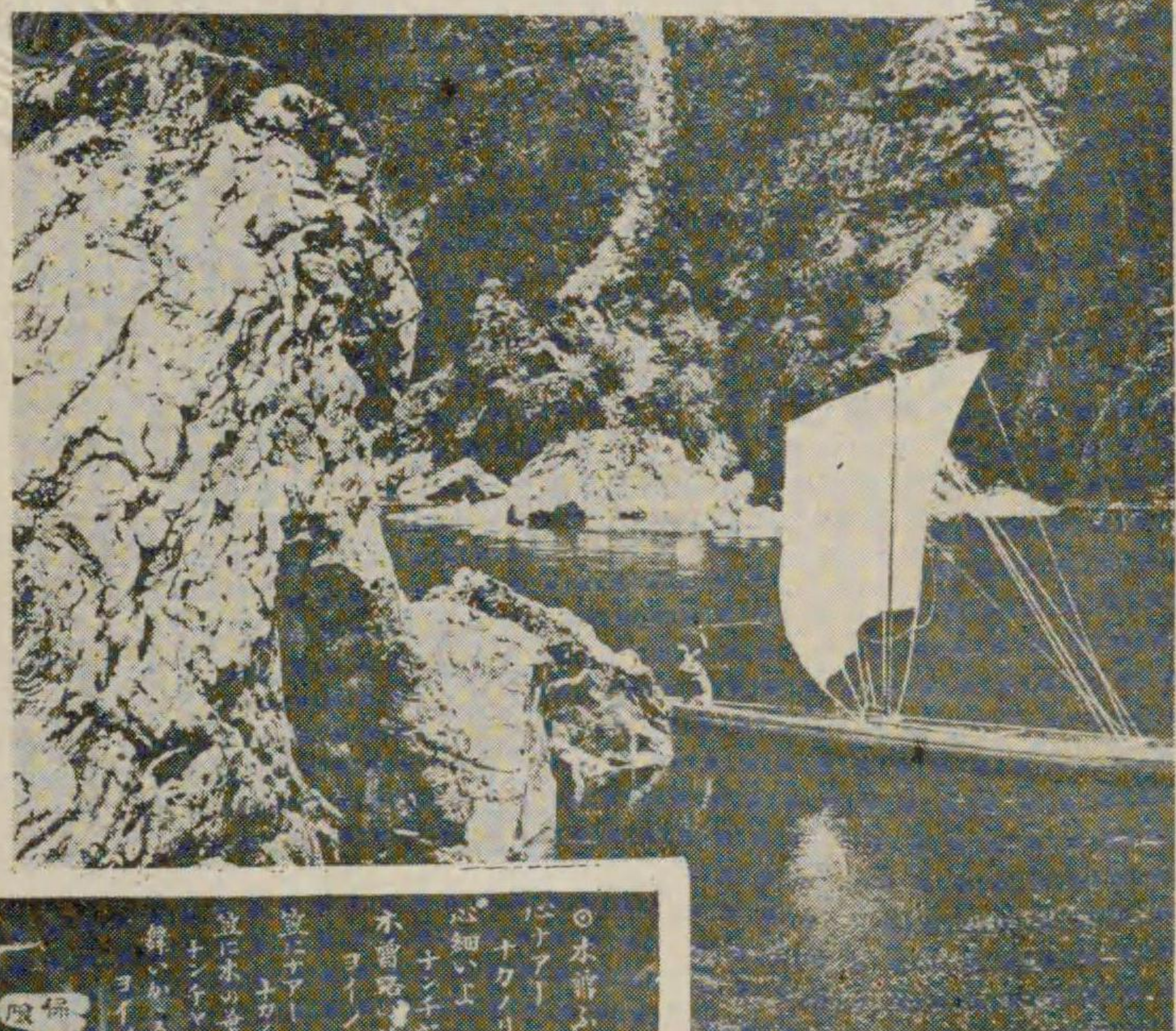
時間十分二圓十銭―【三河川合】―電車二八哩一分・一時間半九二銭【豊橋驛】

【第四行路・駄科驛】―同前―【時又】船（同）二五里・十一時間一艘一三〇圓―【遠州二俣驛】―電

車一一哩四分・四二分 五七銭―【濱松驛】



木曾川  
裏鞍馬 ←

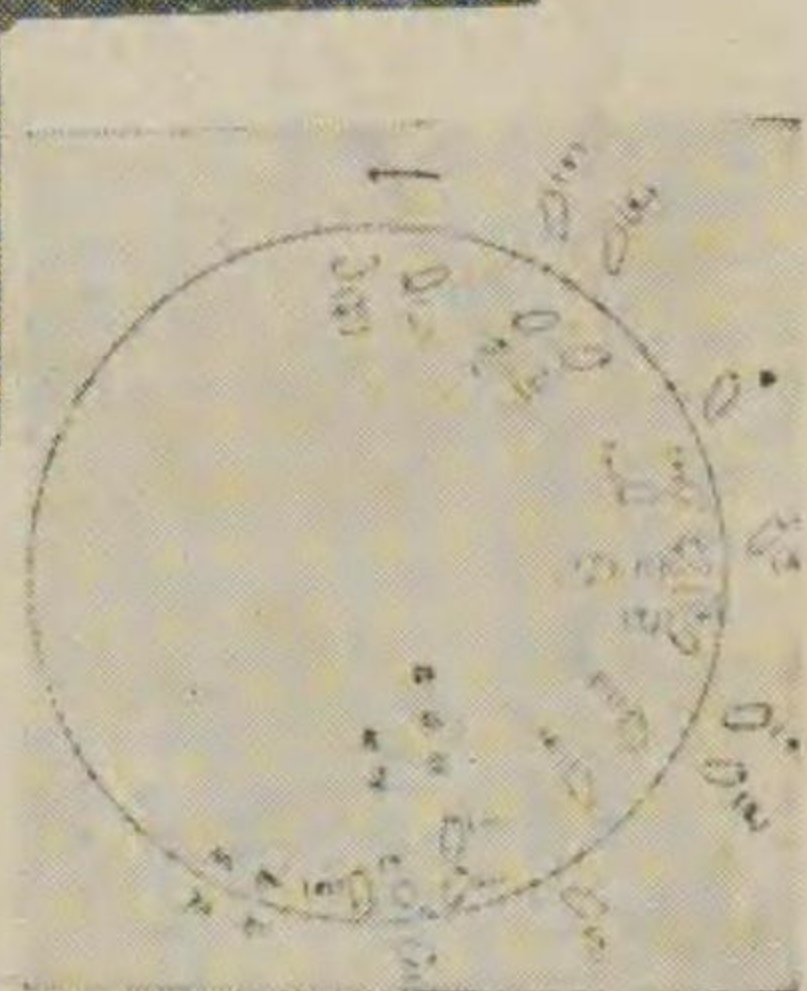


木曾川香木峽 →

木曾踊 ↓



木曾踊  
足拍子 →





木 會 館  
作詞 不 詳  
作曲

きよのな - - きのりきん き - きの  
おのりきはなちん なるも - さむい せり  
あはれ な - - きのりきん あ - はし  
せり - たせなちん はい なる - さ へり せり

# 木 會 川

木會の御嶽夏でも寒い給やりたや足袋添へて

○ 給ばかりはやられもせまい袴襦仕立てゝ足袋添へて

○ 男伊達ならこの木會川の水の流れを止めて見よ



木曾のながれはとめればとめるとめてとまらぬ色の路

○  
木曾の奈良井か簸原流か婿もとらずに孫を抱く

○  
木曾へ木曾へとみな行きたがる木曾はよいかや住みよいか

中央線を通つて東京から大阪へ屢々行くことのある私は、嘗て寢覺の床へ降りて見たことがないので、一度は見えて置きたいものだと思ひ、上松あたりで夜明けになるやうな汽車に偶然にも長野から乗つたことがある。暑い盛りの七月中旬であつたが、上松驛で下車したときの寒さ冷たさには顫へたものだ。流石は山の中だけに、都會とは餘程気温の加減が違ふと思つた。このたびは近頃有名になつた惠那峽の水光に接せんとての一人旅である。東京飯田町驛を終列車で發つて。鹽尻に着いたのが翌朝の九時十三分。そこで二十分あまり待つて長野からやつて来る名古屋行に乗り、木曾福島を素通りに中津川で下車する筈だつたが、鹽尻から木曾福島までのあひだで、長野の善光寺へ參詣しての歸りだといふ白髭の老人と、ふとした會話を取り交したのが縁となり、この木曾福島の物識りぶつた老人にすゝめられるまゝに、二時間ばかりの暇をつぶし、追つかけて

来る一時四十何分かかしの長野發名古屋行で中津川へ向ふつもりで、道程のなかに入つてゐなかつた福島へ、小さい信玄袋をさげた白髭の老人と一諸に臨時下車を試みたのである。昭和の始め七月八日。七夕祭たなばたの翌日。午前十一時そこそこだ。一體、篠ノ井線から中央本線にかけては、停車場が市街の民家よりも遙かの高處にあるから、驛よりの展望が大きくて眼界が廣い。この福島驛がさうだ。驛からつゞく北方の高地こそは、箱根のそれと共に昔の旅人を悩ました有名な關所の址であつて、山も森林も溪流も町家も田畑も、そこからは一望の下にある。いはゞ自然の山關で、木曾峽谷のなかにある一切のものを、居ながらに見おろせるのだから、關所としては實に理想的な場所に置かれてゐたわけだ。

「あの關所をあげかつてゐたのは山村氏と申し、代々三百人の家來をそなへて、木曾の峽を支配してゐましたのです。」と白髭の老人は、全部槍づくりだといふ停車場を出ると、そろそろ説明にかゝる。「この山村家があるために、町の人は生活くらしが立つたやうなものです。御維新ごろは、戸數が六百ばかりあつて、その半分は關所役人の武士の住居。あとの半分は關所役人と旅をする人を相手の商人ばかりでした。只今は一千何百戸ありますが、御維新ごろから見ると、少か四百戸しか殖えてゐない勘定だから、町の繁昌ぶりも知れてゐます。とにかく昔にくらべると衰微したも



のですよ。」

「關所が廢止たゞめに奮はなくなつたわけですね？」

と私は言った。

「さうです。それから東海道筋の交通が早く開けて發達したせいもあります。御承知の通り此の木曾路は五十三次の東海道のやうに、一たいに平地を歩くのではなくて、山と川に沿うた危い路を辿つて行くのです。でも、東海道筋には大きな川が幾つもあるつて、しばしば出水のために川止めになりますから、普通の旅人も困りますが、參勤交代をする大名諸侯などは、川止めをくつて幾日も滞在するとなると、旅費の豫算に大狂ひが出来る。いつも此の木曾路を通つて江戸へおいでになつた加賀の前田様などは、この福島で半日ほど休息するのに千兩の入費だつたと申すくらいですから、懐中の豊かでない大名たちに取つて、川止めに遭ふことは餘程辛かつたでせう。木曾路の方は谷が深いし、また流れに沿うて行くのですから、そんな心配がありません。従つて諸大名は好んで此方の道を取つたものです。それから東海道筋には例の飯盛女が驛々に澤山おりました、こちらには一人もありません。賣女の跋扈をゆるさなかつたので風規は亂れませんが、その代り淋しいといふことになりますね。この街道筋が衰へた眞個の原因は、耕地と山林がないからで

す。山林がないといふのは可怪い<sup>おかし</sup>が、つまり昔は官有林と私有林との境界が判然しない。その境界不分明の山から、どしどし材木を伐り出してゐましたので、尾張の殿様が濫伐を御禁止になるために、五木の停止<sup>ちやうし</sup>といふものをお出しになりました。五木といふのは、この山中に茂つてゐる檜。扁柏。花柏。羅漢柏。金松。櫛です。この五種の木を伐つた者は打首になるので、木曾峡谷の人々は檜や柏や松を見ると震え上つた。はゞ、自分が所有してゐる山林のなかに、檜や柏などの若木を見つけると、いつか過つて伐るやうなことがあつては打首の刑に處せられるからといふので、その若木を引きぬいて痕跡がわからぬやうに秘密に焼いたものです。それでまあ御覽の通り、この峡谷の森林の美しさは保たれてゐるわけですか、御維新のあとで、地籍調査が行はれました際、調査の趣旨を思ひ違へた一般の人民が、先祖から傳はつて來た自分たちの私有林さへ自分のものではないやうに申告しました。無智な話ぢやありませんか。その結果は凡ての森林が御料林や官有林のなかに繰り込まれてしまつて、山林ばかりの木曾に、山林を持つてゐる者は數へるほどもない、奇妙なことになつたものでして、關所の司<sup>つかさ</sup>、山村家なども無高<sup>むたか</sup>の代官といふやうな敬稱で呼ばれて、一坪の私有林もあるべき筈はないと言ふわけで召し上げられてしまひましたよ。耕地も山林もないと申したのは右のやうな事情ですが、誰が悪いといへば、二代前の住民



でせう。町が發展しないのは當りまへぢやありませんか。はゝゝ」と嘲け笑つた。この老人も親の無智なために所有地を持たない住民の一人らしい。町のお跡を途すがら案内するつもりで私を汽車から誘ひ出し、それに應じて私も降りて來たのだが、蕎麥屋に飛び込んで空腹を充たし、不味い酒を二三本倒してゐるうちに時間が迫つて來たので、折角の好意を無にするやうだが、老人とは木曾川の畔で別れることにした。老人は西を指して中畑の方へ淋しげに歩いて行つた。木曾の溪流は町を貫き、深い淵をなして曲りくねりながら走つてゐる。吊橋から俯瞰すると、碧水藍を湛へ冷氣竦々として衣に迫るものがある。いはゆる日本ラインも此の邊に源を發するのだが、この邊から木曾峡谷は次第にその深さと大きさを増して行き、兩岸の處々には、御料林から伐り出した素張らしい材木が、山のやうに堆く積まれてゐるのを見ることにもなるのだ。その昔。上り下りの大名諸侯が、警蹕の聲いかめしく、青葉若葉を吹きわたる風も心地のいゝ木曾の峽道を、南から北へ、北から南へ、岸から岨へ、岨から岸へと長蛇のやうな行列を進める壯快な光景を想像すると、御嶽登山の旅客を相手に生活してゐる今の町の寂寥さが一入強しほく感ぜられる。時代の變遷を目のあたり見たい人は此處に來るがよい。

木曾の御嶽夏でも寒い 拾やりたや足袋そへて

心細いよ木曾路の旅は 笠に木の葉が舞ひかゝる

木曾の奈良井かやぶ原流か 麥もまぜずにまゝを炊く

木曾路には美人が多いといふ老人の話だつた。

「大道に男女打交つて車輪の如く、若き者は更なり老人は杖を傍に置いて交はり、老婆は孫を負ひ兒童を引連れ來りて、その中に入り、夜一夜踊りあかす」といふやうなことが信州奇勝録にも書いてある。木曾節を唄ひながら圓陣を描いて踊るのだ。木曾節は有名である。老人が汽車の中の説話によると、その踊の振りは、明治初年、中津町の踊りを此の福島の人が持ち歸つて、興禪寺の境内で盛んに宣傳したものださうだ。その興禪寺も火を失して今は山門あるのみだといふ。因に木曾節のなかで最も人口に膾炙してゐる「木曾の御嶽夏でも寒い」の歌の文句は、この土地で作られたものではない。これは此の町の西北の空に雲の帯をしめて聳ゆる高山、木曾御嶽の雄姿を望みながら、その山奥で修験の道に寒さを忘れる兄弟知人の身を思ひやつて謠つたものださうだ。北アルプス南尾の秀峰。一萬一千餘尺の御嶽へは此の町から登るのである。檜の御料林をくゞつて北へ三里の玉瀧峠を越えると御登り口に達する。登山者は此處で山登りの準備をする。強力を備ひ草鞋の補充をなし、二日分の食糧を携へて夜明けまへに六根清淨と出發する。富士山



に登ると殆んど同じ努力が必要だ。その御嶽への登山口として此の町は知られてゐる他に、舊跡としては興福寺といふ古刹に木曾義仲の墓がある。二里ほど東の宮の越には義仲の本城山城の址がある。それと溪流を隔てた徳恩寺には巴御前の墓があり、義仲や樋口兼光や今井兼平の像がめるといふ。講談にあるお六櫛の話「木曾の名物お六の櫛は、きりし前髪の止にさす」と唄にあるそのお六櫛と蕎麥とは此の町の名物だ。蕎麥はたしかに美味と思つた。氣紛れにもこゝで道草をくつた私は、懐中時計を見ながら木曾川の畔を去つて再び福島驛に引返した。一時四十九分の名古屋行を待つて乗り込んだ。汽車はやがて一萬尺に近い駒ヶ岳・剣ヶ峰の麓を走ること七分で棧橋のほつりを通過する。これがいはゆる「かけはしや命をからむ葛」の長さ一町もある木曾の棧橋。幽潭寒き懸崖より懸崖へ蜿々と架けわたされてゐるのだ。

木曾で名所は棧橋寢覺 山で高いは御嶽山

それより西へ一里で寢覺の床となり上松驛から十二三町でそこへ出る。深い峽底だ。峽底に横たはつてゐる磊砢たる巨巖の床だ。曰く鳥帽子岩。屏風岩。硯岩。腰掛岩。獅子岩。組板岩。浦島太郎が釣舟岩といふのは、それぞれさうした形をしてゐるからである。砥石のやうなものもある。砧のやうなものもある。碁盤のやうなものもある。巖と巖とが相迫つて、溶々と流れ来る深碧の溪水

を堰き挟み、或は奔湍をつくり、或は旋瀾をなしてゐる。そのなかの一番大きな巖床には、松の下蔭に祠がある。浦島太郎を祀つてゐるのだ。こゝに立つて峽景の煙れるを見るのもいゝ。崖の上の臨川寺から大觀の美をおさめるのも壯快だ。會峽一の名所たるに耻ぢぬものがあるのを認め得るだらう。寢覺めの茶屋に出て少しばかり國道を三澤岳の方へ入つたところに、小野瀧といふ瀑布があるさうだが、私はまだ見る機會をもたない。



## 惠那峽

一一一

北アルプス連山と中央アルプス連峰とのあひだに横たはつて、奇を岩骨の形に現じ、妙を水波のさまに顯はしつゝ進む木曾川は、南へめぐつて鳥捕山の翠影をうかべ、西に轉じて飯盛山の緑苔を洗つて、ひたむきに流れ、流れ流れて信濃から美濃の中津町へ入ると、そこで姿を變へて靜媚幽邃の惠那峽とはなるのである。中津から南の大井に至る三里の峽谷がそれだ。鐵橋の景色に富める玉藏橋からはじまるといつてもいい。木曾川の水は、こゝで全く奔流の性質を矢ひ、荒くれ男が温順<sup>おとな</sup>しい處女に化けたやうに、さしも勇ましかつた浪は勢ひを落して、おだやかな漪<sup>さゝなみ</sup>となり、一見、谿間の湖水ではないかと怪しまれるばかりである。時には逆流しつゝあるやうにさへ見ゆるほど漫々たる水を湛へて旋浚し、淳膏しつゝゆるやかに、しづかにうねつて行くのだ。その漲る水の量に、今までは嶄然と聳えてゐた兩岨の岩峭も、多くはその岩根を深く水中に隱没して、あらたに言ふべからざる幽韻漂渺たる風氣を呈してゐる。水際に孤立し又群立する峭壁も少

くはないけれども、それらは天龍や黒部や鬼怒の峽中に、鬼面人を脅かすやうな相貌をもつて、角を振り牙を怒らす物凄い竦巖ではなくて、何者かの手によつて刻まれ、磨きをかけられ、不思議な魔法で、さまざまの恰好に空高く積み上げられたのではないかと思はれるほど、優雅に見えるのである。その巖脚をひたゝと浸す水は脈々として青靨の、目も鉤<sup>かぎ</sup>に眩しく麗はしく潤ひ光る色を映して、おどろくばかり濃い紺青<sup>こんじやう</sup>に染まりながら、ゆるゆると動いてゐる。これが他の峽谷とはその趣を異にする惠那峽の著しい特色ではあるまいか。福島驛から此の峽谷の北門をなす中津驛に汽車が滑り込んだのは午後三時一寸過ぎてゐた。驛から五六丁。人家の軒の七夕祭の笹竹が、峪水をわたつて來る涼風に、色あせた短冊をひるがへしてゐるのを珍らしく思ひながら、ぶら／＼歩いて川岸へ出ると、屋形船や短艇が纜<sup>りゅう</sup>である。合客を待つ間は殆んどなかつた。大井町まで一人金一圓二十錢といふ。私を加へて脊廣服と丸髻とで五人。峽谷遊覽の屋形船は發動機船に曳かれてボツ、ボツ、ボツと波を分けながら、靜かに中流へ浮かび出て舳を南へ向ける。波は兩岸の影を碎いて搖れる。景色は馳て走馬燈の廻りはじめのやうに、のろのろと走り出し、舟足と共にだん／＼速くなる、と、緑の波の上に飛び上り、きらりと白く閃めくものがある。大きな鯉だ。船は程なく苗木の古城址のまへに來た。城址とは名ばかり、自然に重疊せる岩層の頂

一一三



がそれで、今はたゞ櫻の林が疎らに立ち列ぶだけだ。岸は回つて私らの行手に、いろいろな形貌の岩根をあらはした。あれが武光岩。だこれが鬼岩だと合客の男女が姦しく饒舌り出す。突出亂起する臺岩や鳥帽子岩のあひだに屈躓する倭樹の疎林は赤松に黒松。月明の夜を思ひ偲ばせる月持ヶ岡。村雨の瀧。天狗のやうな天狗岩。枕のやうな枕岩。品といふ字によく似せて積み上げられたかと疑はれる奇異な形状の品の字岩がある。船は舳を轉じて本流から付知川へ右折しつゝ溯る。冷澈の深潭は更に幽沈玄澗の鬱氣をたゞへて煙波肌にしみる。眞に惠那峽は人に迫り人を威嚇して恐れ慄はしむる何物をも持つてゐない。それは閑雅な明るさに於て秀れた墨色蒼然たる日本古畫の高逸清玄な情趣をもつて人を迎へる自然の慰樂者であるといふことを、今さらのやうに感ずるので。こゝに夫婦岩の突兀として來り、蓬萊岩の忽々として去り、岩戸不動瀧の滌々として來り、寶塔、重ね岩の去つて垂釣潭にかゝれば、屋形船は再び方向をかへて本流へ引返すのだ。かくて源齋岩、天柱岩の矗立するあたりまで流れ進むと、丘陵をなす岸の斜面の細い枝ぶりの赤松の林が、奇矯なる一帶の景色に温味を添へてゐるのを見る。船は岸壁に寄りそひながら、雲の色の変化につれて、微妙にかはる水の色彩を刻明に描いた水繪さながらの天地を行く。こゝらには別荘風の孤亭や茶寮が綠樹の蔭にチラ／＼覗いてゐる。盗人谷。將軍臺。金床臺を通り過ぎて



↑ 惠那峽

↑ 惠那峽  
付知川

→ 品の字岩  
↓ 付知川合流



鉦鼓淵に入ると、峡谷は潤然として開け、軽く躍る波は輝きを放つて、船の上からの展望も、俄かに明るくなる。こゝに今までの古典的な、日本的な深遠の峡谷美を一變して近代風景にしてしまふものが現はれる。大同電力のダムだ。その銀灰色の大堰堤だ。さらに灰白色のコンクリート建築の家だ。流水は百尺あまりも此のダムのために堰き湛められて溢れんばかり漾蕩としている。雲と風と波と緑の光の交錯！湖だ！丘陵の上の木の間に茶亭が見える。あざやかな色調の洋館が湖面に影を落して美しく反射する情景はまた棄てがたい。このダムは東洋一の壯觀とされてゐるさうだ。このダムを眞正面にして屋形船は左側の船着場へ向つた。私も合客もそこから岸へ上つたのである。木曾川の中流にある奇勝として漸くにその名を天下に馳せんとしつつ、ある惠那峡谷は此處でおしまひになるのだ。これから下は益田川と合して日本ラインの流れをつくり犬山城下より名古屋へ回つて伊勢灣へ注ぐのである。私はこの峡谷の終點から大井町へ乗合自動車で急いだ。それは中津川驛から二つ目の停車場だが、中津川の方からやつて来る六時何分かの列車の到着に間もない時刻であつたからだ。その列車で私は名古屋へ向つた。「新愛知」新聞社の尾池義雄氏に會はねばならぬ用件を携へての旅であつたから。名古屋に着いたときは、すっかり日が暮れて、驛前の電車通りは賑やかな夜の世界に入つてゐた。



【附】 惠那峽下りと惠那登山を試みる人々のために、中津町役場で發行してゐる案内書を次に轉載しやう。

惠 那 登 山 (自七月十日 至九月三十日 期間)

惠那山は標高二、一九〇米、鐵路岐阜縣惠那郡内に入らば東南面前山の奥、雲表に雄大なる容姿を表はし、千古斧鉞の入らざる靈峰にして、全山花崗岩より成り山麓より頂上迄老樹鬱蒼として繁茂し晝尙暗き幽邃の仙境である。輓近登山熱の勃興に伴ひ、夏期此の靈峰に登山する者、毎日三百の多きを數へ今や信仰又は遊山的探勝者のみならず、民衆的修養の樂園として學生、青年團員、處女會員等多數登山するに至つた。【登山路程】 中津川驛より頂上迄四里十七町。驛より中津町字川上迄二里は道路平坦にして定期自動車(片道四十錢)の便あり。川上、宮前橋より二里十七町は急峻である。驛前、綠町を進むこと三町にして右折し新町、本町を通り、郵便局前にて左折し、町役場前を過ぎ、新國道を右折し更に左折して、御料局の西側に出つれば字中村の農村部落に至る。進むこと十數町にて字尾鳩。

道路の右側を流るゝは木會川の支流、中津川にして牛ヶ瀬に至らば漸く仙境に入るを覺ゆ、對岸に聳ゆるは、阿寺古城址にして、天正の昔武田勝頼の來襲に會ひ、城將遠山友重の奮死したる血醒き古戰場である。

鳴岩を過ぎ中津電氣會社發電所前にて中津川を渡橋し進むこと數町にして字川上部落に達す。川上の中央、中津川に架せる宮前橋迄、驛より自動車が行復する。宮前橋を通過し山に登ること九町にして縣社惠那神社に詣つ。尙宮前により路を變へ軌道に沿ふて中津川の上流に進めば五町にして樺太工業會社中津工場の發電所がある。水管の落差七百尺、落差の大なること日本第二なりと謂ふ。二千キロワットを發電す。其の隣は有名なる大瀧、ジヨウロウ瀧(一名女郎瀧)で附近に至らば飛沫四散して涼味乾坤にあまる。この道は惠那山御料林道にして九里進めば長野縣波合村平谷に達す。惠那登山にはジヨウロウ瀧より左上の高地に登れば二町にして縣社惠那神社前社に出る。

之より奥には人家なく、前社より進むこと十町にして正ヶ根澤に至る。此の谷を右に徒渉し七町にして對東澤を左に徒渉し鬱蒼たる羅漢柏ラスベの林中を攀登る。對東澤より奥には溪谷無く、水筒に水を十分入るべし。

對東澤より町有林を進む事十五町の山道右側十數間の所に金明水がある。湯を潤すに足る。數町



にして御料林内に入り遂に中小屋に達す。前社より奥社に至る二里八丁の中間に在りて、此の附近は千古に斧鉞の入らざる白樺の森林地帯。眞に神秘幽玄の境に在るを覺ゆる。吹上を経て斷崖の上に物見松横たはる、試みに攀づれば郡内一帯指呼の間に在り。木會の清流銀絲の如く田野を縫ふの狀、實に大自然の織成せる錦繡の展開したる美觀を味ふに足る。此の邊一帶に石楠花しやまひの群生あり。是より道は益々峻し、やがて最も峻嶮なる行者越に達す。麓より或は頂上より吹き騰り吹き降る雲霧。如何にも高山峻嶺の氣分を味ふことが出来る。

急峻空八町を過ぎて十町餘、峰頂最初の神祠、一ノ宮（祭神猿田彦大神）を拜む。一ノ宮より奥社までは十二町にして此の間、道路に沿ひて左の攝社を祀る。劔神社（祭神 天目一箇命）神明社（祭神 天照大神、豐受姫大神）熊野社（祭神 速玉男命）富士社（祭神 木花咲開耶姬大神）葛城社（祭神 一言主大神）

頂上の石室は熊野社と富士社の間に在り、百人の登山者を宿泊するに足る。登山期節には川上青年團員出張して日用品を販賣す。頂上の井水は小屋より二町下に在り。靈水常に湧出す。

惠那本社は、六社の攝社と共に、頂上崇靈の地に鎮座し、伊邪那伎、伊邪那美の二柱を祀り、太古より神徳彌高く、日本武尊御東征の砌、御參拜あらせられたるを始め、古來、武將の崇敬最

も厚し。【登山の注意】

一、惠那神社より頂上迄一町毎に里程札を樹枝に鈎しあるにより、之に注意して登山せば道に迷ふ虞なし。

一、前社よりの登山道は、毎年七月上旬笹伐りを行ひ相當修膳するにより危険の虞なしと雖も正ヶ根澤に至り右に溪を渡り、對東澤は左に渡るへし。溪谷に奥深く踏迷ふことあり、揭示板あるを以て此の二ヶ所は特に注意せられたし。

一、夜間初めて登山する者は前社に詰居る青年團に請ひ強力を雇はるべし。強力は一日二圓一泊三圓程度である。

一、豪雨の場合正ヶ根澤及對東澤は水勢強く岩石流るゝことあり。之れを徒渉することは危険なり。中小屋に滞在待たれよ。

一、單身の登山は避けられよ。

一、豪雨、暴風雨の爲め小屋に滞在を要する場合あるにより食料二日分は必ず準備携帯せられたし。

一、前社より奥には人家無く、又水筒に水を詰め得るは前社の奥十七町の對東澤なり、金明水



は時に水濁るゝことあり。頂上には水あり。

一、夜間山上に宿泊する場合寒冷に付、毛織シャツ一枚携帯せられよ。又防雨具として蓆蓆又は合羽を持参せよ。草鞋は一足豫備を携帯すること。

一、携 帶 品

陸地測量部五萬分の一地圖「中津川」、金剛杖、手拭、小刀、鉛筆、手帳、時計、磁石、提灯  
(懐中電燈) マツチ、蠟燭

食料二日分、水筒、草鞋豫備一足、蓆蓆、毛織シャツ

一、強力を雇はるゝ方は豫め左の所へ依頼し置かれたし。中津町中津川字川上區長「惠那山の高山植物」

惠那山には各種の高山植物あり就中 ナンバンギセル(二合目邊の柏樹寄生) オサバグサ「十三合目より生じ十七合目頃最も多し」ハリブキ「十六七合目より生ず」ツバメオモト「十九合目邊」水晶蘭「日蔭濕地」等あり。其他サクライ草、クケシマラン、モミヂハグマ、ツリバナ、セリバンホガマ等も生ず。

惠 那 峽 下 り

本溪谷は兩岸に峨々たる連山峙ち且極めて急流にして從來觀賞すること能はざりしが、大正十三年大同電力のダム工事竣工により、始めて探勝するを得るに至れる新景勝地である。舟行三里一大湖水にして些の危険無く、加ふるに遊覽會社定期乗合船(毎日正午出帆)に乗船せば往復六里僅に一圓五十錢の船賃にて座ながら半日の清遊を恣にすることを得る。

惠那峽遊覽には、直接中津町、惠那峽遊船會社へ豫め交渉し(船賃その他)遊船を豫約して來遊せらるゝを便とする。

中 津 小 唄 (野村賤の自作)

○朝な夕なの中津の煙霧をいろどる

惠那と木曾との中ほどに ヤレサコイヨイヨイヨイ

○流れ流れて上藤の瀧は針の稽古に

中津河原の石を縫ふ ヤレサコイヨイヨイヨイ

○鳥舎とやの灯りと小鳥の命消ゆるいとしさ

空は夜明けの霞張り ヤレサコイヨイヨイヨイ

○中津妙見裏山道は露を分けく



君と寢笹の路を行く

ヤレサコイヨイ〜

○屏風岩かけ花ならつつじ番い鴛鴦や

色も香もある寢入り花

ヤレサコイヨイ〜

○中津茶屋坂昔が戀しまよ夢の世

はだか武兵衛は露と寝る

○土産樂焼惠那峽の歌をサアサ書かんせ

思ふ心が色に出る

惠那峽小唄

○こゝは山國日の出が遅いホノホノセ

お前とめたら寢てくらす

惠那峽小唄 源氏鶏冠

中津小唄 源氏鶏冠

中津節 (裏面)

○戀の港は中津と定めて

惠那峽口から舟を出す

○逢いに木曾川惠那峽の舟は

ほれたほの字の帆をかける

○昔思へば河波とめて

うつらうつらの梶枕

○昔やどんと来て泣かせた浪も

今じや惠那峽の櫓の雫

○舟の底かときく手枕に

晝の惠那峽ほととぎす

○惠那の朝露雫になれば

紅のつゝじの水馴れ棹

○戀の灯が中津で招く

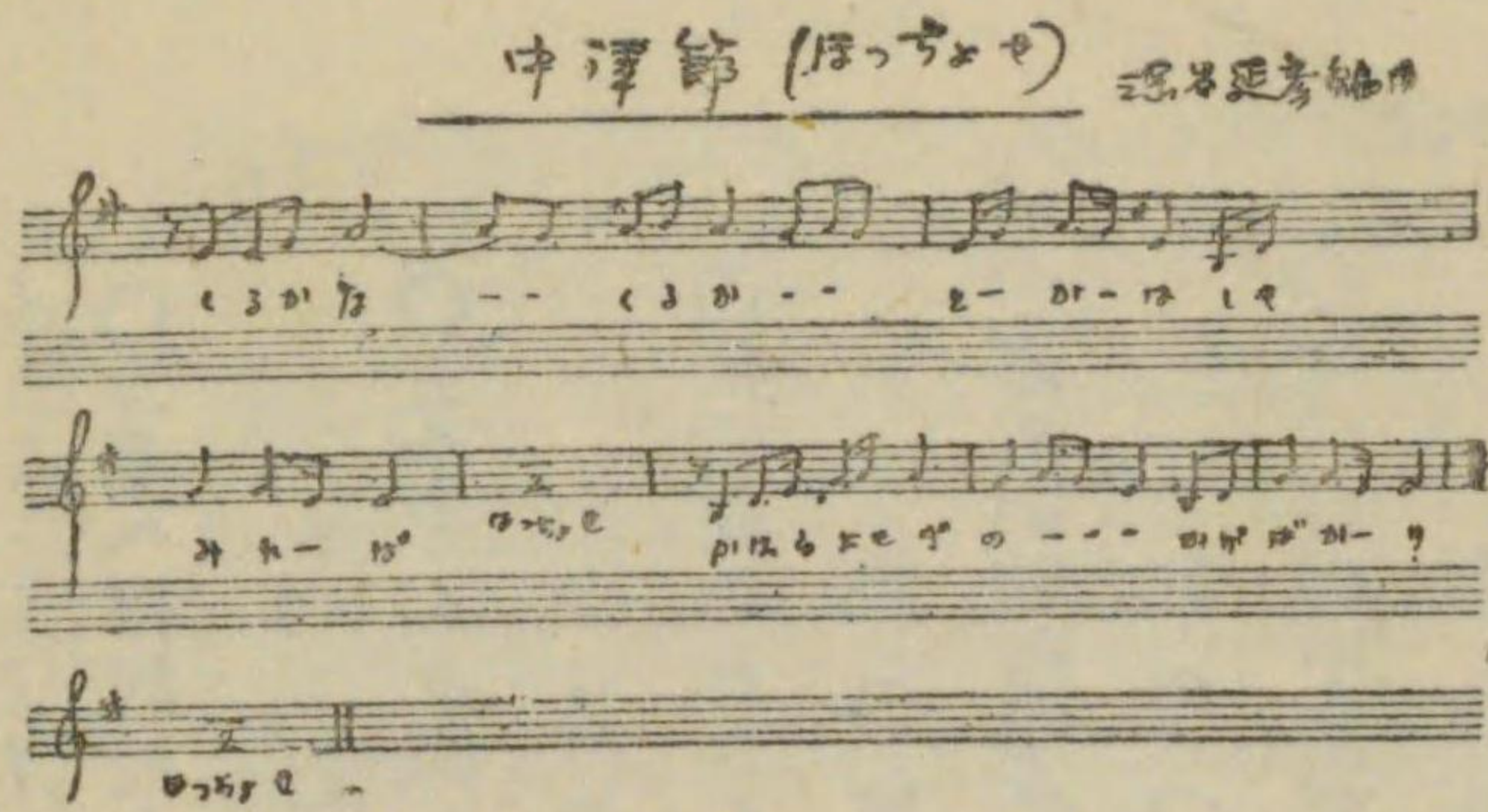
あれは惠那峽の歸り船

○惠那の朝霧一番舟は

もゆる紅葉に灯をかりる



中津節 (ほつちよ)



○様と旅すりや月日も忘れ

鶯が啼く春ぢやそな ほつちよせ〜

○来るか来るかと川下見れば

河原蓬のかげばかり ほつちよせ〜

○こゝは山家ぢやお醫者が無いで

可愛い殿御を見殺しに ほつちよせ〜

○月の出頃と約束したに

月は山端に私やこゝに ほつちよせ〜

○可愛い殿サは五反田にひとり

せめて風吹け空くきれ ほつちよせ〜

○二十日に風さえ吹かには

家内三人寝てくらす ほつちよせ〜

○こほれ松葉をてどかきよせて

様のかへりを焚いて待つ ほつちよせ〜

○心細さに山みてゐれば

雲のかゝらぬ山はない ほつちよせ〜

○谷の流れに言傳てしたや

日雇ひよの殿さのかへるよに ほつちよせ〜

○来るか来るかと待つ夜來ずに

待たぬ夜來てかどに立つ ほつちよせ〜

○云はゞ云やがれ山ほとゝぎす

いつか世に出て云ひかへす ほつちよせ〜

○松になりたや峠の松に

諸國大名を見下しに ほつちよせ〜

○惠那のお山に雨雲立てば

家内皆出て桑をつむ ほつちよせ〜

○嫁はいそ／＼夕餉の支度



かいた蠶まゆに月がさす ほつちよせく

○霽のえにしをたゞ一筋に

眺め惠那峽の船遊び ほつちよせく

○解いたしごきか小袖の紅か

屏風岩間に咲くつゝじ

○辛夷咲いたか惠那峽の岸に

君の襟脚しのばせて

○みどり設樂の森かげの波

きくも葦の葉ほととぎす

○雪の惠那峽屋形の船に

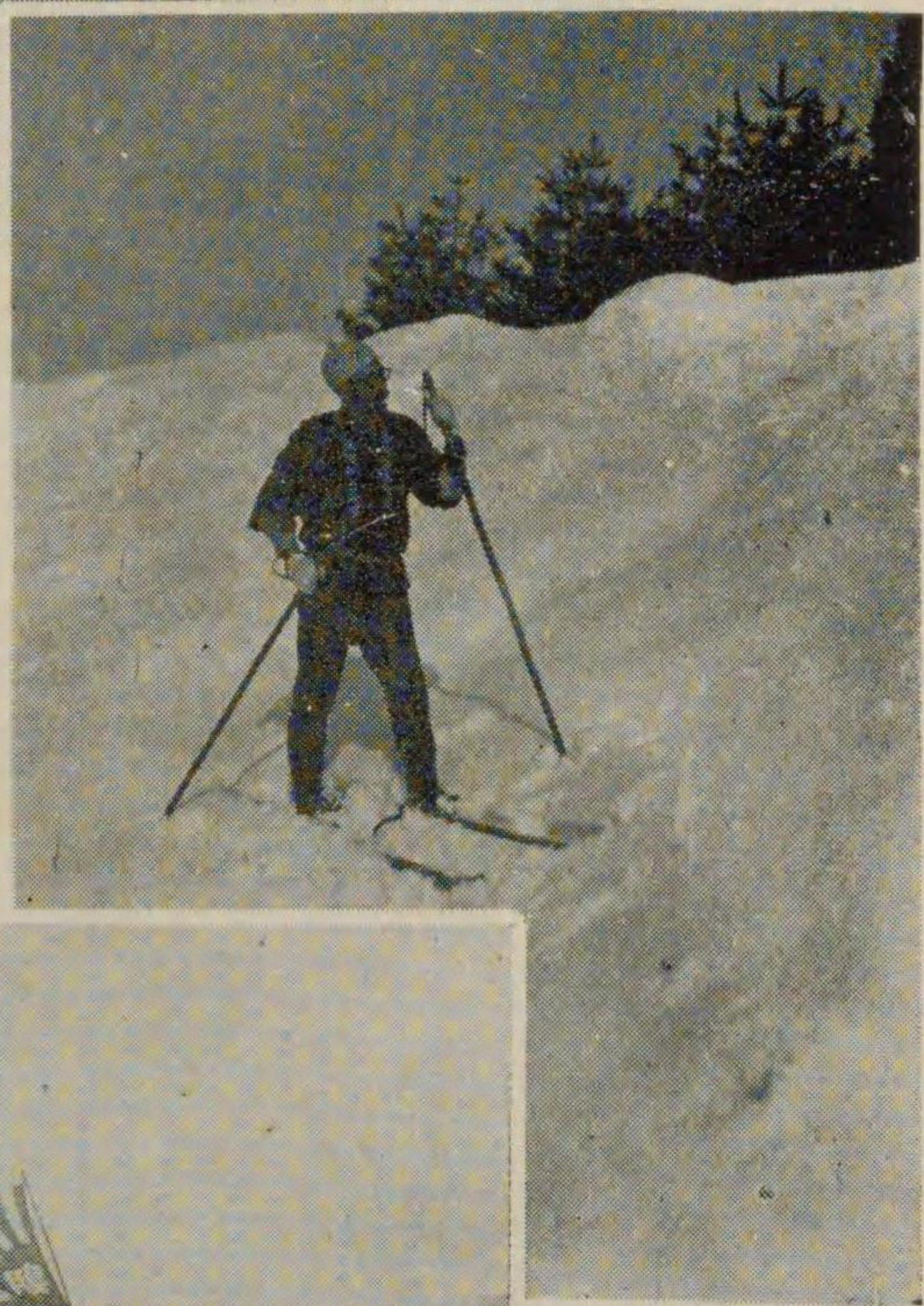
そつと心を置炬燵

○浮世はなれた鳥舎住みなれば

山に秋風夕しぐれ

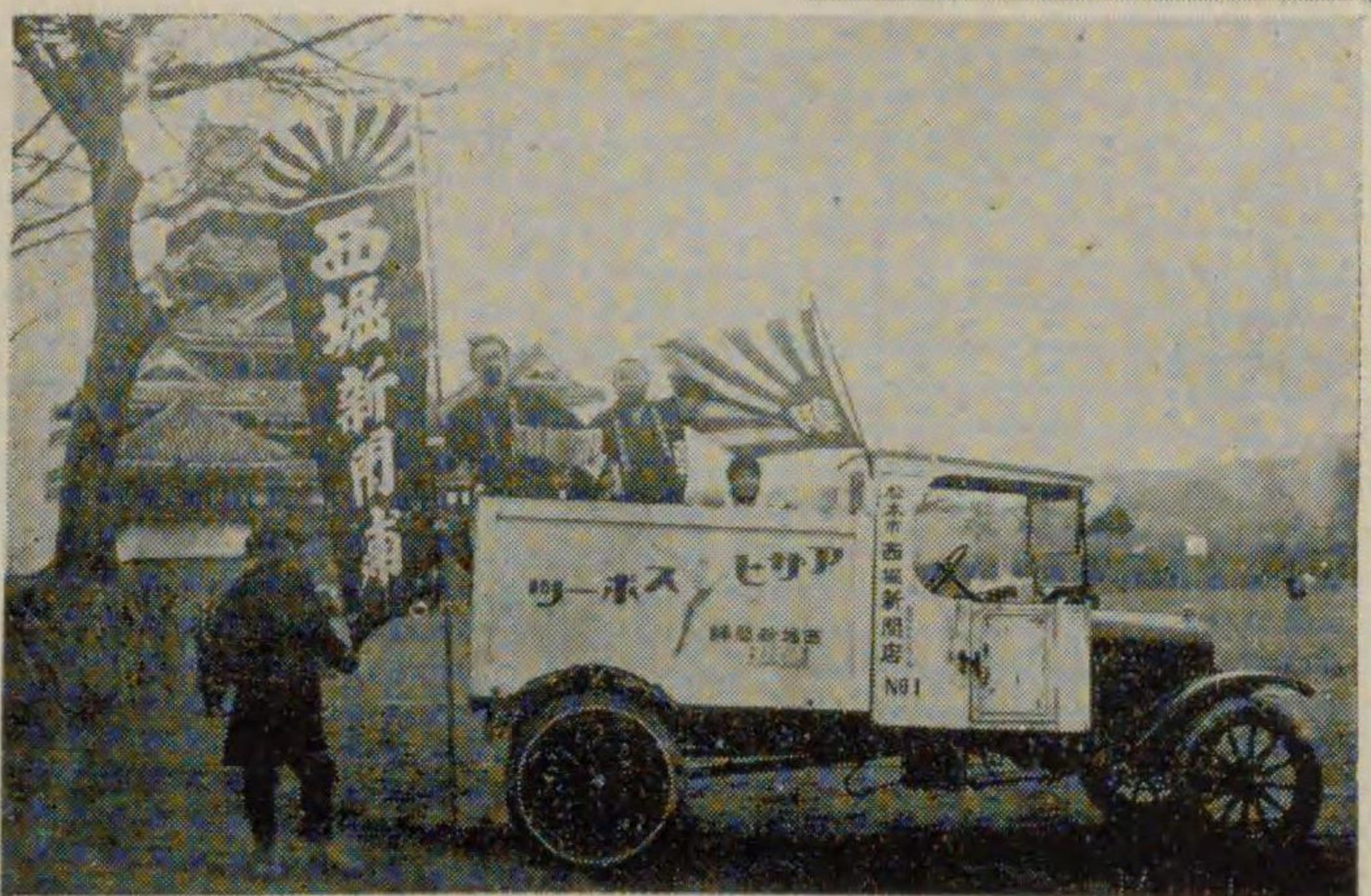


青木湖畔  
←(雪をもてるは著者)



↑  
白馬路の雪  
と著者

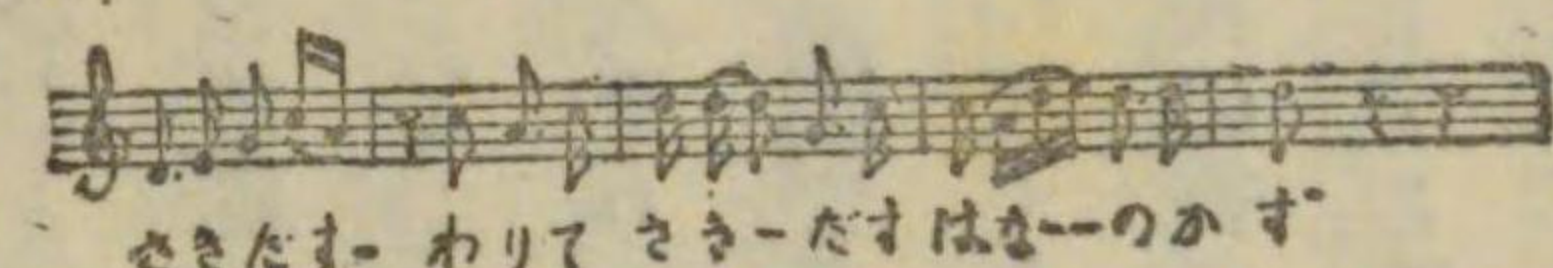
松本城外(車上  
は著者と西堀氏  
及今嬢)  
↓





# 白馬路

安曇節  
 作詞 田原隆士氏  
 作曲



誰か行かぬか高瀬の入りへ  
 うどやわらびの芽をつみに  
 すぐれ提灯さけても暗い

夏も涼しや木崎湖行けば  
 岳の白雪舟で越す  
 白馬八月残りの雪を  
 割りて咲き出す花の數  
 安曇大町借り馬市場  
 證も取らずに馬貸せる  
 まめで逢ひましよ又來る年の  
 踊る輪のなか月の夜に  
 お月をたよりに越す山路  
 鹿島男は皆山かせぎ

女借馬通ひ作

(安曇節)



吹きしきる雪に飛驒連峰は眞白く煙つてゐるし、あまり接近しすぎるので、かへつて展望がきかないのだ。東天井岳か大天井岳か、それとも有明であつたか、有明であつたかも知れない、その麓に地圖で見ると有明神社とあるが、それとは違ふ「おためさま」といふ奇しき哀話をもつ不幸なるヴィナス——色戀の願ひごとはもとより、男女腰の病にまで靈驗あらたかなので有名な女神の社がある。松本大町間の信濃鐵道は此の社の附近を通つてゐるのだ。松本からこの電鐵に乗り込んだのが、ちやうど「おためさま」の年に何回かの縁日だつたので、沿道の驛々から雪崩やぶれこんで来る信心家の女達が、五六人きりゐない男の客を壓倒せんばかりの勢ひで包圍しやうといふのだ。女はみんな嫁入前の田園的潑刺さをもつて、この少數黨に退屈をさせまい——なんて親切ぢやあるまいが——頗る陽氣に囀つてくれるので、多少の窮屈は我慢のしやうもあつたが、男の壽命をちぢめるやうな髪油と安白粉の奇臭を以て御馳走されたのは辛かつた。而もこの女海嘯が途中の寒驛に吐き出されてホツとする間もなく終點の大町へついたんだから、何のこたない、松本から十里の道を、戦慄すべき髪油と白粉のお供で通して来たやうなものである。この大町から西へ一里、葛温泉の方からやつて来る高瀬と、鹿島鎗岳の方からやつて来る鹿島の二溪谷がひらけて大町平をなす南には佛崎の佛穴がある。絶壁だ。またこの町から南東二里。白駒山の城址のや

や東には、十針の傳説を遺してゐる登波離がある。なかんづく此の町から東、犀、高瀬、穂高の三流相合ふところから犀の下流山清路にいたる四里の峽はざまは耶馬溪にも劣らず、且そこから篠ノ井線西條や麻績へ通ずる新道はまた耶馬の青ノ洞門をも凌ぐほど傑れた風色をもつてゐるといふ。これは松本にゐるあひだ自分が世話になつてゐた西堀新聞店主西堀儀太郎氏に承つたので、どうでも行つてごらんさいとあるから、順々と出掛ける筈になつてゐる——但しこれらの溪谷を此處に紹介する餘裕はないかも知れないのが残念だ——それよりも先づ一番に槍ヶ岳や白馬岳の雪景、その邊のスノオラインに見参しやうと思ひ、大した交際でもない松田氏を訪れてスキーを借りた。これも西堀氏の斡旋によるのである。それから雪靴を買つて押出す準備がととのふと、例の針の木峠へ向つて登る道とは斜かひに、積雪三四寸の糸魚川街道を、農具川に並行しながら北へ一里ばかり歩いて木崎湖の南口へ出た。それまでは日脚が淡いので、雪の反射も眩しいほどではなかつたが、こゝまで来ると雪の深さも一二寸加はり、その色の白さも著るしく感じられ、寒氣も俄に厳しくなつた。山に近いだけのことはあるなと思つた。

湖畔に群がる針葉樹の棘々しい枝はもう「かねこほり」で美しく飾られてゐたが、その鋭い冷たい射光を見ると、眼を刺すやうで寒いよりは痛いほどだ。こちらの岸では青黒い波が汀の雪を



砥めてゐる。遙かの向ふ岸には住む人もない學者村の、玩具の様に小さい一塊の家が白雪に埋れてゐる。その裏山はまだ悉皆化粧してゐないが、その後を衝いてゐる六千尺の白澤天狗や、その右隣の九千尺といふ爺岳から、布引岳、鹿島槍は既に壯麗な白衣の姿を靜かに誇らしげに横へてゐた。あの頂上まで此處から二里もあるかしら？あの向ふが大黒岳だとすると、お次にお控へ遊ばすのは、唐松岳、槍ヶ岳、杓子岳といふ席順だな？こゝからお目にかゝれぬが、その次の白馬岳は、たしかあの見當だ。麓まで三里か四里だらう。さう思ふ方角を仰觀してゐると、その白馬の天空から、夥しい雪をもつた猛烈な風がいかにも此の風來坊の自分を吐りとばして大町へ追ひ返してやらうといふ權幕で、突然に吹きおろして來たから面喰つた。おまけに此奴のために溫度がグツと下つたらしい。突つ立つてゐると凍りつきさうな身震ひに驚いて歩き出したが、景色も見物もあつたもんぢやない。山といふ山は残らず隠れてしまつた、歩けくゝと鼻息荒く、人間の影も足跡もない雪の上をざつと半里。中綱青木の二湖を過ぎると雪は約一尺になつたが、スキーに適した斜面がないので行ける處迄前進と來たが、弱つたのは風で此奴止まない。白馬の頂上から杓子をのりこえ、槍をかすめて物凄い唸りをあげながら、これでも恐れ入らぬか、これでも驚き入らぬかと、雪のうへに蠢く小さい此の生物を殴りたふしに、頭のまうへから吹きおろし叩き

つける雪颼。こいつのために、地上の積雪が眞つ白い煙となつて足もとから濛々と噴きあがる有様は、古い文句だが、白日忽ちにして已に冥しの奇觀だ。しかし眼をふさがれてしばらくは動けないから、この雪の煙幕がはれてしまふまで、眼をつぶつたまゝ凝乎としてゐなければならぬ。風の吹き具合によつて出現する雪女郎や龍卷のゐるとは異つて、全くの煙だから、無風流なことおびたゞしく、敢て怖れをなすほど手剛くはないが、厄介な資格は充分にもつてゐる代物だ。この山谷鳴動式大活動は然し瞬時にして止む。ピタツと止んだあとの氣味のわるい靜けさと穩かさに至つては形容の言葉がない。何しろまたやつて來るのだから、さあ、今のうちに三間でも四間でも、いや一尺でも二尺でも先へ進めと、足に力をこめて踏んぱりながら、寂かな雪の上をあるいて行く。その自分の藁靴の音を聞いてゐると、だん／＼妙な氣もちになつて來るのである。山に登るときもさうだが、ここには自分一人しかゐないのだといふ孤獨の感じが轟々と迫つて來る。それが自分を取り巻いてゐるものに對する恐怖に變るのだ。

自分はまだ一度も雪崩に遭つたことがないのを仕合せと心得てゐる、が、吹雪や洪水や難破しかけた經驗がある。辻も敵はぬとは思ひながらも、勇ましく風波と戰爭したものだ。無我夢中になつて大勢と一緒に死にもの狂ひに闘つたせい、大自然の偉力や腕力に對して、怖いなアと思



ふひまがない。怖いなアと思つたのは助かつてからだ。自分は今度の雪中放浪中に見たのだが、山の頂に近い場所にくつついてゐる小さな石——山腹から見たので實際はそんなに小さくなかつたかも知れない——石が烈風に吹き飛ばされて、山の斜面をゴロゴロ轉がりながら、斜面の雪にくるまつて、だんだん大きな雪達磨となりつゝ落下した。そのときは驚くばかりの雪塊團となつてゐたから、そこに人家でもあらうもんなら粉微塵に押し潰される筈だが、何にもなかつたので雪の塊御自身だけが、えらい音を立て、砕け散つてしまつた。自然といふものゝ偉力の活動に對する人間の——少くとも自分の感ずる恐怖は、むしろそれが暴れてゐるときよりも、鳴りをしづめて己れのふところに入りこんでゐる人間の姿を黙つて見つめてゐるときの方が強いやうに思はれる。この感じは老衰期の火山に登るとき自分が常に抱くところのものだ。もう一度ぐらゐるは小爆發を起すかも知れないといふ上信國境の白根山の湯の池に、湯の花を採集に行く人達は、あやまつて小石を池のなかへ蹴り落すことを無上に恐れてゐる。山が荒れ出すといふのだ。山の活動を畏るゝのあまりに、守り傳へられて來た斯ういふ迷信は、どなたも御存じであらう。山に登ること、恰も親父の肩に這ひあがるが如く、海に入ること、宛がらお袋の懷中に潜るが如く、峻巖なる山の疝癬を知るでもなければ、豫測すべからざる海の變化を知るでもなし。山また己を見る

こと、恰もその餓鬼の如く、海また己を扱ふこと宛がらその生みの子の如く自分には考へられたのであるから、そこに何らの危険をも豫想する世話はいらない。いや、さやうなことは念頭にすななかつた年少時代の自分を振り返つて見ると、足柄山の金時ではないが、いかにも自然に近い生活を送つてゐたものである。むしろ人間をこそ怖れたれ！何うだ。それが段々年齢を喰ひへらすに随ひ、人間を屁とも思はなくなるほど人間生活を味はひ來るにつれて、いつとはなく自然に離れ遠ざかつた結果、只今でも金さへあれば則ち山に向ひ、暇さへあれば則ち海に行きはするけれども、虚心平氣ではない。山にあつては山靈の思惑を怖れ、海にあつては龍神の御機嫌を氣にし、己を忘却し去り、心を空にして自然のなかに完没すること思ひもよらぬ。自分といふ人間と自然とを對立するとき、雄大壯嚴、清淨無垢の自然のなかに立てる人間の姿が、いかに見すほらしく微弱であり、貧相であり、無力であり、不淨であるかといふことを、情ないほど痛刻に示されるからである——浴客赤芋を洗ふやうな海や、行列黒蟻の如き登山者をもつ山では迎もわからぬが——わかれば怖くなるのは當り前だ、怖くなるのみならず心細くなる。

そこで、お見掛けの通り、われわれは至つて小つほけなものでございますが、お山の御厄介になつてゐる間は決して了簡の曲つた眞似は致しませんから、お手柔かに願ひますといふ代りに、



六根清淨なんて神妙な氣にもなるわけだ。さう稱へながら登る。

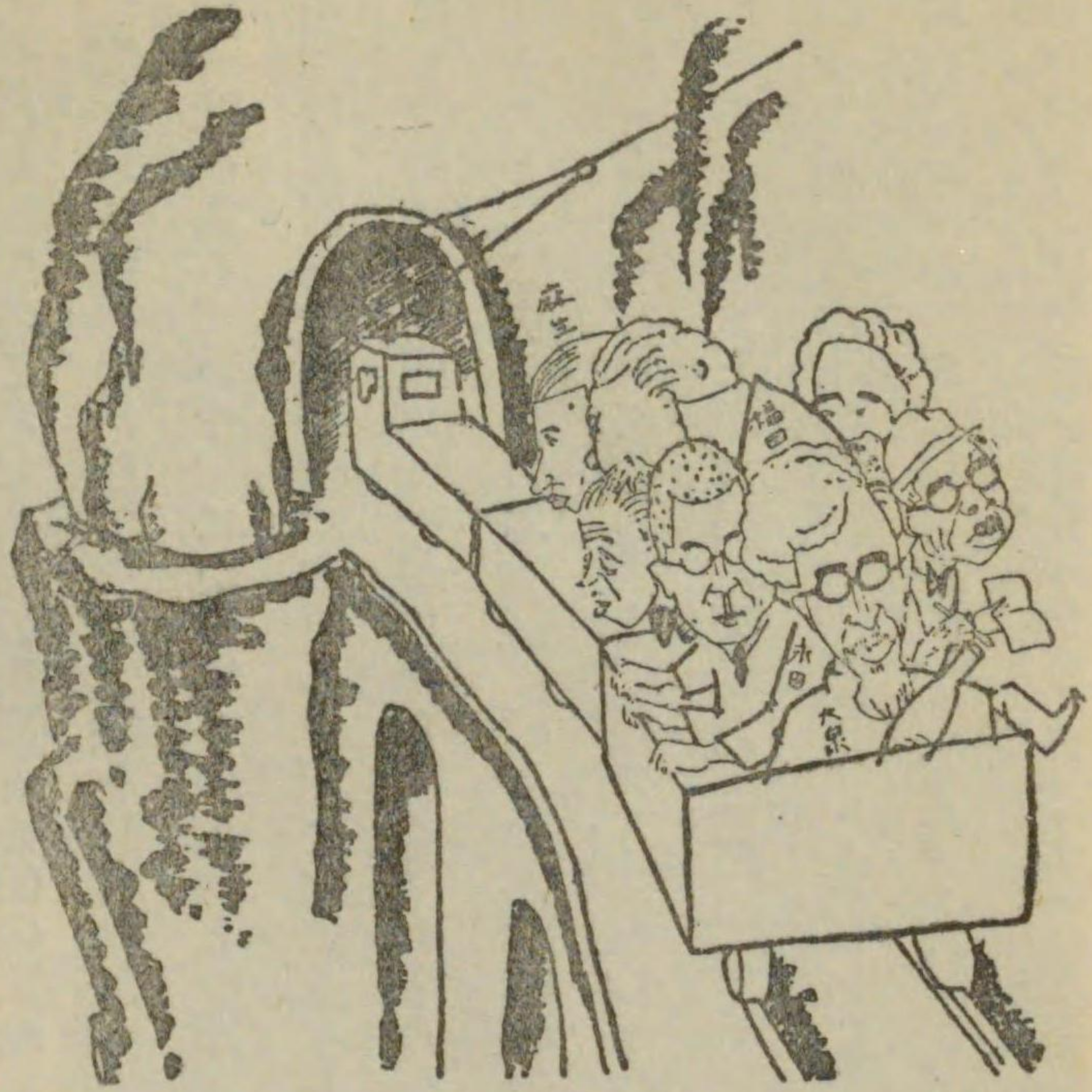
かくまで神妙に恐縮しながら山に攀ぢ登つて、頂上の石塊を踏みつけたところで一文半錢になるわけでもなし、褒めてくれ手もありはしないだから合點のゆかぬ話だが、われわれが、山岳踏破を企てるのは豪健の氣象と忍耐の精神を養ふためであるといふスパルタンもある。大きに尤もだが、それは從屬的なお土産ではないかな？ いろんな危険を冒してまでも苦勞するのは人間が持つて生れた無際限の好奇と征服慾とを飽くまで満足させやうとする本能の積極的活動そのものではないかな？ 自分はさう思ふ。甚だ怪しからん文句を吐くやうだが、賭博にしる姦通にしる、公然にやつていゝもんなら、從來やつてゐる人まで止めるかも知れない——と申しましたが、これは行つていけないといふから秘かに行はれるのだといふ逆説でないこと無論です——われわれが東京の愛宕山へ登つて見やうと思はないのは、登つたところで感激も昂奮もしないことを知つてゐるからだ。危険と秘密のない世界には、緊張も努力も驚異も感激も昂奮も熱情もない。即ち一切の興味がない。

危険と秘密とをもてるものは山岳である。冬の山岳である。深い深い積雪を踏んでその山岳へ志した人々が眼のとゞりかぎり漠漠たる雲海をぬいて聳ゆる高峰の頂から、遙かの下空を昇りい

づる神々しい朝暾に、絶大の驚異を喫し、最高の感激、快美の情禁じ得ないといふのは、要するに偉大なるものを、みごとは征服し得た心の満足と、好奇の飽充に因つて生ずるのではなからうかと自分は考へる。然しながら、凡て非凡高雋なるものを平凡卑俗化することの好きな科學は、また嶮惡な山々から危険と神秘とを奪ひ去つて、次第に低くなしつゝあるやうだ。いま自分の左手に肩を壓して連亘する白馬、杓子、槍、唐松の連華山脈なども、嘗ては女人の寄りつける代物ではなかつたのだが、只今は夏場になると女人も登る。この勢ひで進むならば、上高地あたりに銀座を欺くばかりの繁華な街が出来て、雪中のアルプス踏破も散歩氣分で片づく時が来るであらう。さうなつたらお終ひだ。賭博と姦通の一件を此處へ引合ひに出したくはないが、恐らく登山者の興味は失はれて、汽車賃を奮發した上に暇をつぶすことないといふ成行になりはしまいか？ 汗を流して顛蹶退且復して行く山の中で、女の頭髮から沁り落ちたピンや紙屑やブリキの空罐などを見つけてさへも、がっかりするくらゐだ。危険と神秘とは山岳の生命だと言つちや悪いかしら？——こんなことを考へながら、ひとりザクザクと雪を踏んで行く。行くては西行足洗ひの泉で昔から有名な佐野の山里、白馬の登り口はそれから一里有牛とある。頬つぺたが針の刷毛で擦られるやうにヒリつく。眼からは涙が流れる。鼻の先は鉋で削られるやうに痛い。髭髯はバリ／＼



凍つてゐる。はなのうちは、たゞズキズキ疼いてゐた手足の指が、どうやら感覚を失ひさうだ。一方では白馬嵐がだんだん烈しくなる。地上の雪は次第に深くなる。おい。おい。もうこの邊で勘辨してくれつたつて、そりや誰に言ふんだい。進め進め。



## 黒部峡谷

黒部鐵道の大澤光義氏、三日市驛長の中山鐵治郎氏、黒部鐵道の(背廣)氏、富山タイムスの高井氏、富山市主事の竹島氏等の案内で、世にいはゆる神秘境の黒部峡谷を探らんとする一座七人——翁久九子、竹久夢二子、福田正夫子、麻生豊子、堤寒三子、永田衡吉子と愚老庵わたくしとは、黒部鐵道



の終點に横たはる水廊宇奈月温泉町の驛頭に隊伍をととのへ、旅亭の女中さんらに見送られて、トロツコの電車に、人夫や材木と一緒に乗り込んだのは朝空に月仄かなる六月十日『どうぞ、ごゆつくり』『行つて来るよ』電車は溪流に沿うて走り出す。仰ぎ見る彌太藏谷の中腹にかゝる七段の瀧の影没するころ、人間の世界と神仙の天地とを境するといふ黒部鐵橋へさしかゝつた。

轟々たる響きをあげてその鐵橋を殺渡すれば、トロツコの頭は忽ちにして、森石山のトンネル第一號へ入る。いや、にいつはトンネルといふよりも、岩壁の横腹を判りぬいて、荒彫りの圓穴を穿けた冥暗の洞門だ。怖ろしい牙を如鬼々々とむき出して、頭から咬みつきさうな血相の無氣味な天井に、電氣の閃光がピカリ、ピカリと迸る。『こりア凄い！』『どうだ、この天井の化ケ物は！』と思はず一齊にふり仰ぐ、とたん、氷のやうに冷たい水の雫が、ほたく／＼降り落ちて、顔にかゝるやら、襟に入るやら、わつと首をちぢめる。と、いきなりトロツコは夜の闇から、白日の明るみへバツと躍り出る。出るかと思ふとまた夜だ。また晝だ。そら夜が來た。そら明けたといふ調子で頭から水玉の洗禮。『いやはや全體この洞門は幾つあるんです？竹島さん』『さあ。私も數へたことがないから知らんが、まだ／＼これからでさア』と、禿け頭に流れる水滴を拭きながら、富山市の主事が言へば、沈黙家の中山三日市驛長さんが後から自慢する『この洞門の號數を重ね



(者著は登先) 橋釣の谷峽部黒